DBJ SHIKOKU RESEARCH NO.18

四国におけるエコツーリズム

～高知県本山町での経験から考える～

平成１７年８月

日本政策投資銀行
Development Bank of Japan
DBJ
四国支店
Shikoku Branch

四国におけるエコツーリズム

～高知県本山町での経験から考える～

四国におけるエコツーリズム

～高知県本山町での経験から考える～

【 要　旨 】

1．四国の自然は、北海道や沖縄、屋久島の大自然とは異なり、大昔より人々が暮らし、育んできた歴史や文化を含んだ自然と言える。日本エコツーリズム協会も、エコツーリズムを「自然・歴史・文化など地域固有の資源を生かした観光を成立させること」と定義しているように、歴史や文化も自然と並ぶエコツーリズムの重要な要素と位置づけている。

　四国には、四万十川以外にも「四国三郎」の異名を持つ吉野川が流れ、西日本一高い石鎚山があり、小豆島をはじめとした瀬戸内海の多島美、そしてホエールウォッチングができる黒潮の海まで、多種多様な自然が存在する。同時に、祖谷のかずら橋や金刀比羅宮、四国霊場八十八カ所巡りのような多彩な文化資源も存在する。このように四国はエコツーリズムを行うに相応しい素材に恵まれている。本稿では四国観光の現状分析から、四国におけるエコツーリズムの可能性を探ると共に、本山町での取組を通じて得られたエコツーリズム振興のための方策を紹介する。

2．四国観光の現状をマクロ的に捉えると、四国地域への県外からの観光客数は、本四３架橋（瀬戸大橋、明石海峡大橋、しまなみ海道）の開通による影響を大きく受けている。また高知県に関しては、92 年に本州と高知県が高速道路で接続されたことによる影響が若干現れている。これらの要因による観光客数の増加には一過性の部分が存在するものの、長期的にみれば架橋以前と比べて高い水準の観光客数を維持してきたことがわかる。しかしながら、こうした架橋による観光客数増加の追い風も今では衰えつつある。

3．旅行動態から見た四国観光の特徴としては、四国域内観光の少なさを特徴として指摘することができる。これはフェリーや瀬戸大橋、明石海峡大橋による近畿への交通の利便性や、四国の人々が旅行先として大都市圏を選ぶ傾向が強いことが要因と考えられる。また四国地域の住民は、宿泊旅行回数自体が少ないという結果も表れていることから、四国の人々が四国内の観光資源に対する認識が希薄でその良さを見いだしていないという面や、四国内の他県に対し心理的な距離感を持っているという面もあるのではないだろうか。

4．四国の個別観光地の現状に目を向けると、これまで観光客誘客のための中心的役割を果たしてきた既存観光地の入込客数の落ち込みが伺え、瀬戸大橋架橋前水準を下回っている例も見られる。一方で観光客は、行きたい観光地として四万十川やホエールウォッチング、足摺岬等の自然や環境と関連する観光地が多く挙げている他、阿波踊りやよさこい祭り、高知の日曜市のような地域文化に根付いたイベントにも関心を示していることから、四国観光に対する観光客の欲求は、有名観光地を単に見て回るような「見物型観光」から、自然や文化（イベント）を体感する「体験型観光」へとシフトしている状況がうかがえる。

5．旅行者のニーズが見物型観光から体験型観光へシフトしつつある中、エコツーリズムはまさにこうしたニーズに応えうるものであり、新たな観光客数の発掘やリピーターの増加に結びつ

く可能性がある。域内観光の弱さという課題に対しては、エコツーリズムは近隣地域に住む小中学生の教育旅行（修学旅行・移動教室等）をターゲットにしやすいことから、有効な方策になるだろう。さらに、高齢化が進行し若者の少ないといった、地域の活力に係る問題に対してもエコツーリズムの効用があるものと思われる。例えば地域の農業従事者など住民自らが受入主体となることで、地元の魅力を再発見したり、地域に対する誇りを持ったりすることが可能となるほか、旅行者との交流が日常生活における刺激や生き甲斐づくりにもつながると考えられる。四国の一部では特徴ある体験型観光の取組が始まっていることから、今後はこれらの取組が、エコツーリズムの中核資源・プログラムとなる可能性を持っていると言えよう。

6．しかし、四国の多くの地域では取組をはじめたばかりであり、実際にどこからどのように手を付けて良いか分からない、といった悩みを抱えている。そこで弊行では、高知県本山町と連携して同町をモデル地域としたエコツーリズムの活性化策を模索する「エコツーリズム検討会 in 本山町」を開催した。対象地域となった高知県本山町は四国のほぼ中心に位置する典型的な中山間の町である。四国４県を流域に持つ吉野川の源流域にあたり、町の西側には“四国の水瓶”とも呼ばれる早明浦ダムを抱える。森林面積は町域の実に９割にもおよび、現在の人口は 4,657 人（00 年）、高齢化率は 34.2%に達する。本山町は役場内にツーリズム推進室を設置し、特にアウトドアスポーツへの取り組みに力を入れている。また町内では、農家民泊やエコツーリズムに関する勉強会を開催する等、住民のエコツーリズムに対する機運も高まっており、実施に向けた素地ができつつある。

7．「エコツーリズム検討会 in 本山町」ではエコツーリズム先進地とも言われる長野県飯田市でエコツーリズム事業推進の中心的役割を担っており、観光カリスマ百選にも選出されている井上弘司氏をコーディネーターとし、地元自治体やエコツーリズムの担い手となりうる地元代表者、大手旅行関係者などを集め、活発な議論を行った。検討会での意見交換を踏まえ、エコツーリズムを実際に進めていく上でのポイントとして以下の６点の重要性を指摘した、①文化、歴史、食に関する資源の活用、②観光ニーズと地元資源を踏まえたプログラムづくり、③ハード整備に頼らないツーリスト受入施設の確保、④地域とマーケットを結ぶ受入窓口の設定、⑤コンセプトとターゲットを明確にしたマーケティング、ＰＲ、⑥地域間連携

8．観光客の嗜好が見物型観光から、体験型観光へと変化していることは、豊かな自然が存在し、その自然の中で文化や歴史を育んできた四国地域にとっては、またとない観光活性化のチャンスと考えられる。こうした中、現在四国に存在する多くの資源をエコツーリズムという切り口で捉え直し、地域住民自身がその過程で地域資源の魅力に気づくことが、四国観光活性化を模索する中でのひとつの打開策になるのではないだろうか。また、観光振興のみならず、都市住民との交流による生き甲斐づくりといった高齢化対策や、就農希望者やボランティアを受け入れることで農村の荒廃を防ぐといった過疎地対策という側面も持っている。そういう意味でエコツーリズムは、今後の四国地域の活性化策を考える上で、大きな可能性を秘めているのではないだろうか。

【担当：後藤　明　(e-mail：akgotou@dbj.go.jp)】

～ 目 次 ～

□ 要旨
□ はじめに
□ 第１章　四国観光の現状　－ P. 6 －
　１－１．　四国地域への観光客数
　１－２．　域内観光の弱さ
　１－３．　低迷する有名観光地
　１－４．　四国におけるエコツーリズムへの期待
□ 第２章　我が国におけるエコツーリズムの取り組み　－ P. 14 －
　２－１．　エコツーリズムとは
　２－２．　観光地としての持続可能性
　２－３．　観光のあり方の変化
　２－４．　エコツーリズムモデル事業実施地区
　２－５．　四国でエコツーリズムに取り組む地域
　２－６．　エコツーリズム先進地域（長野県飯田市）からの報告
　２－７．　井上室長講演録「エコツーリズムを活用した地域振興」
□ 第３章　四国におけるエコツーリズムの方向性　－ P.46 －
　３－１．　エコツーリズム実施支援地域の選定
　３－２．　高知県本山町の概要
　３－３．　嶺北地域の概要
　３－４．　本山町の清流「汗見川」
　３－５．　本山町を横断する吉野川の流れ
　３－６．　「水」をコンセプトとした他地域との交流
　３－７．　「エコツーリズム検討会 in 本山町」の概要
　３－８．　検討会議事録
　３－９．　まとめ～エコツーリズム実施に向けた６つのポイント
□ おわりに　－ P.113 －
□ 参考資料１．吉野川流域の文化と歴史
□ 参考資料２．休廃校舎の活用
□ 参考資料３．四国と全国の観光カリスマ
□ 参考資料４．四国とエコツーリズムに関する年表
□ 参考文献・参考 URL

はじめに

「四国は自然が豊かである」というイメージを多くの人が持っている。一方メディアでは「エコツーリズム」という言葉がもてはやされ、世界遺産にも登録されている北海道や沖縄、屋久島の大自然が大きく取り上げられているが、そこでいう「手つかずの大自然」というイメージと四国の自然とは大きく異なっているように感じられる。四国には大昔より人々が暮らし、育んできた歴史や文化がある。例えば四万十川と言うと“大自然の中を雄大に流れる大河”を想起するひとがいるかもしれないが、実際には源流域の大自然を流れるだけではなく、古来より川魚漁が盛んであったり、沈下橋のような特有の生活風景を持つなど、地域住民の日常生活と密着した川なのである。

日本エコツーリズム協会も、エコツーリズムを「自然・歴史・文化など地域固有の資源を生かした観光を成立させること」と定義しているように、歴史や文化も自然と並ぶ重要な要素と位置づけている。

幸い、四万十川以外にも「四国三郎」の異名を持つ吉野川が流れ、西日本一高い石鎚山があり、小豆島をはじめとした瀬戸内海の多島美、そしてホエールウォッチングができる黒潮の海まで、多種多様な自然が四国には存在する。同時に、祖谷のかずら橋や金刀比羅宮、四国霊場八十八カ所巡りのような多彩な歴史・文化資源も存在する。このように四国はエコツーリズムを行うに相応しい素材に恵まれている。

四国の観光は、所謂「架橋効果」の一段落による入り込み客数の伸び悩みや、受入地域の過疎化や高齢化などの問題が指摘されているが、近年関心が集まっているエコツーリズムには、こうした課題を解決するためのヒントが秘められていると言えるのでは無いだろうか？

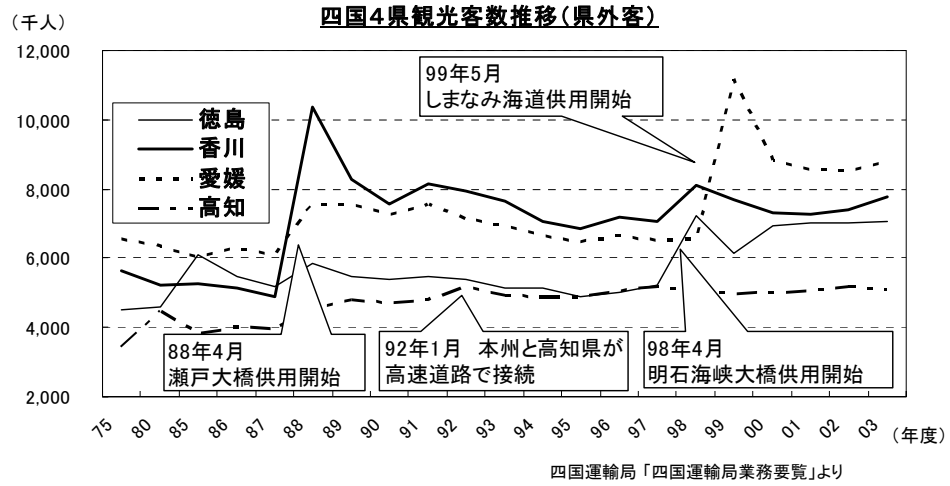
今回の調査では、吉野川源流域に位置する高知県嶺北地域の本山町を舞台に、具体的なツーリスト受入を想定した、エコツーリズム実施に向けての支援と調査を実施した。四国や本山町の抱える問題や課題を抽出し、自然や歴史、文化を洗い直した上で、エコツーリズム推進を担う地元関係者と有識者とを集めた検討会を開催し、エコツーリズム実施に向けた方向性に関する議論が行われた。本稿では四国観光の現状と本山町での調査内容を紹介することとしたい。

この本山町での取組が、四国をはじめ、固有の文化や自然を有する日本の各地域で、エコツーリズムに取り組む方々の参考となれば幸いである。

第１章　四国観光の現状

１－１．四国地域への観光客数

（図表 1-1）

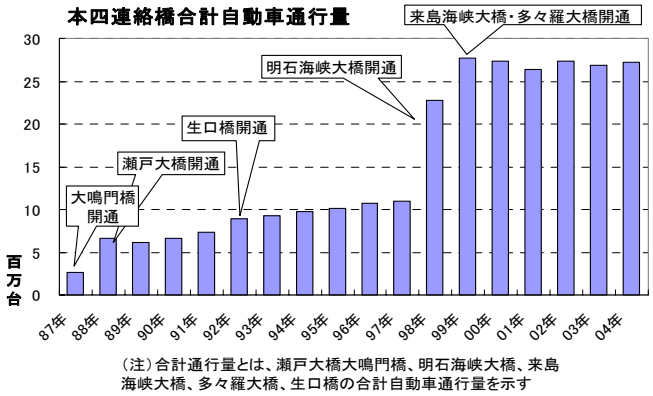


まず、四国観光の現状をマクロ的に捉えることとしたい。四国地域への県外からの観光客数は、本四３架橋（瀬戸大橋、明石海峡大橋、しまなみ海道･･･図表 1-4）の開通による影響を大きく受けている（図表 1-1）。88 年 4 月瀬戸大橋開通、98 年 4 月明石海峡大橋開通、99 年 5 月しまなみ海道の開通により、特に橋と接続した地域（瀬戸大橋に関しては香川県、明石海峡大橋については徳島県、しまなみ海道に関しては愛媛県）において開通後、大幅な観光客数の増加が見られる。また高知県に関しては、92 年１月に高知自動車道が愛媛県四国中央市の川之江ジャンクションから高知県大豊町の大豊インターまでの区間が開通し、本州と高知県（南国インター）が、高速道路で接続されたことによる影響も若干現れている。

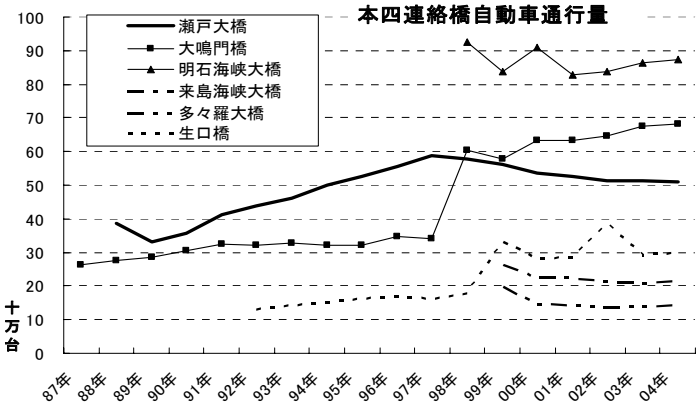
これらの要因による観光客数の増加には一過性の部分が存在するものの、長期的にみれば架橋以前と比べて高い水準の観光客数を維持していることがわかる。

しかしながら、こうした架橋による観光客数増加の追い風も、今では衰えつつある。本州四国連絡橋の車両通行量の推移をみると（図 1-2）、99 年の来島海峡大橋と多々羅大橋の開通をピークに頭打ちの状態となっていることがわかる。特に瀬戸大橋については、９７年をピークに通行量は減少に転じている（図 1-3）。

（図表 1-2）

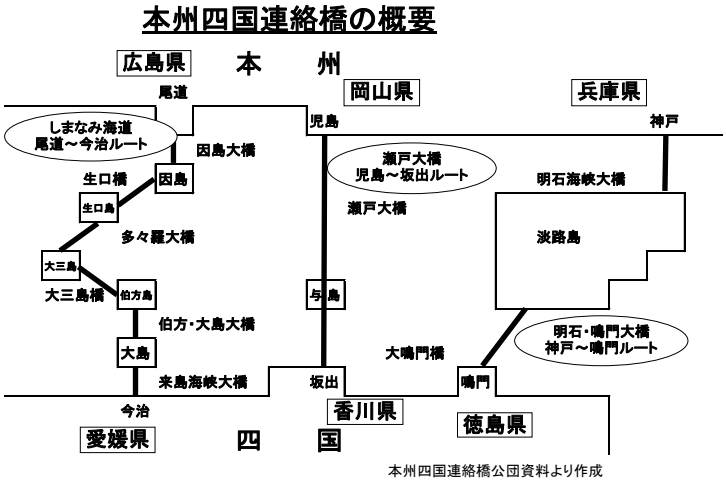


（図表 1-3）



さらに現在ではしまなみ海道の一部を残して、本州四国間の連絡道路はほぼ完成してしまっていることから、今後、通行量に大きなインパクトを与える要因もほとんど望めない状況にあると言えよう。その他、通行時に課される高額な通行料金（図表 1-5）や台風等による架橋等の通行止めのリスクも、四国への観光客誘致に対する阻害要因として指摘される。現在の特別割引料金が適用されている岡山県の児島インターから香川県の坂出インターまでの瀬戸大橋通行料金（18.5km：3,550 円）は、現在の岡山インターから神戸西インター間（131.0km：3,350 円）、岡山インターから広島東インター間（142.3km：3,550 円）、岡山インターから米子インター間（133.4km：3,400 円）の通行料金に匹敵する。

（図表 1-4）



（図表 1-5）

本四3架橋の料金

普通車通行1回当たり

代 表 区 間	新特別料金	（参考）基本料金
神戸～鳴門ルート 神戸西～鳴門	5,450 円	7,600 円
児島～坂出ルート 児島～坂出	3,550 円	4,950 円
尾道～今治ルート 西瀬戸尾道～今治	4,700 円	6,550 円

注）1. 新特別料金は、平成15年7月1日から適用。適用日から1年後に見直しを行った結果、特別料金の継続を決定。
2. 西瀬戸尾道から今治間は、生口島及び大島島内の未供用区間を除いた場合の料金。

１－２．域内観光の弱さ

（図表 1-6）**ブロック間流動（発地ベース構成比）** （%）

発地＼着地	北海道	東北	関東	北陸・甲信越	東海	近畿	中国	四国	九州	着地不明	合計（MA）
北海道	85.2	2.4	4.5	0.7	0.7	2.1	0.7	0.0	1.7	2.7	100.7
東北	3.3	65.5	15.9	5.4	1.3	0.8	0.8	0.0	3.6	5.1	101.5
関東	3.2	9.6	36.8	20.7	14.8	3.9	0.3	0.1	3.0	9.8	102.2
北陸・甲信越	1.5	7.1	21.6	48.2	7.1	6.5	0.4	0.6	1.9	7.8	102.7
東海	4.5	0.9	14.0	19.8	39.9	12.8	1.4	1.5	4.3	4.4	103.5
近畿	2.5	2.2	8.0	15.6	13.9	36.5	7.7	4.1	7.7	4.4	102.5
中国	1.9	0.7	5.9	4.4	5.6	13.7	46.3	10.0	15.6	0.0	104.1
四国	0.8	0.0	19.8	5.6	0.8	34.9	8.7	25.4	6.3	1.6	104.0
九州	1.2	1.2	6.3	1.9	1.7	5.3	4.4	1.2	77.7	1.5	102.4

（注）国土交通省編「観光レクリエーションの実態～第9回全国旅行動態調査報告書」より作成
結果は、回収サンプルの延回数に基づく結果である。
目的地が複数の場合も集計しているため、合計が100を超える。
宿泊観光に対する調査の結果である。

次に旅行動態から見た四国観光の特徴を把握することとしたい。四国観光に関しては、域内観光の少なさを特徴として指摘することができる。この点は国土交通省の「観光レクリエーションの実態～第９回全国旅行動態調査報告書」から読み取ることが出来る。同報告書では宿泊観光旅行におけるブロック間流動の状況を調査している。

図表 1-6 は、各地域ブロックに住む旅行者がどの地域ブロックを訪問したのかを割合で表したものである（発地ベースの数字）。例えば北海道を出発地とする旅行者のうち 85.2%は北海道内を旅行し、2.4%は東北を旅行したことを示している。これによると、四国を除く全ての地域では、程度の差はあるが、域内観光が最も多くなっているのに対し、四国に関しては、域内観光の比率が 25.4%と低く、域外である近畿を到着地とする割合（34.9%）を下回っている。これはフェリーや瀬戸大橋、明石海峡大橋による交通の利便性がその一因であると言えるが、関東圏への旅行割合も 19.8%と高い水準にあるなど、旅行先として大都市圏を選ぶ傾向が強いことが伺える。

また、他の地域ブロックを出発した旅行者のうち四国を訪問した割合を見ると、瀬戸大橋やしまなみ海道を通じてつながりの深い中国から来訪する割合は 10%と比較的高い（中国域内、九州、近畿につぎ４番目の位置づけ）のに対して、四国からの主要な旅行先となっている関東では 0.1%（地域ブロックの中で最低）、近畿では 4.1%（東北、北海道につぐ下から３番目）というように、その位置づけはかなり低い。

（図表 1-7）

ブロック間流動（着地ベース構成比全体構成比） （%）

発地＼着地	北海道	東北	関東	北陸・甲信越	東海	近畿	中国	四国	九州
北海道	62.2	1.4	1.2	0.2	0.2	1.0	0.8	0.0	0.9
東北	3.3	51.0	5.6	2.1	0.6	0.5	1.2	0.0	2.5
関東	14.0	33.7	59.0	37.4	31.9	11.0	2.5	1.7	9.5
北陸・甲信越	2.0	7.4	10.3	25.7	4.5	5.4	0.8	2.6	1.8
東海	10.8	1.8	12.1	19.2	46.4	19.5	5.4	12.2	7.4
近畿	5.0	3.4	5.7	12.6	13.5	46.1	25.3	27.8	11.0
中国	1.3	0.4	1.5	1.2	1.8	5.9	51.9	23.5	7.6
四国	0.3	0.0	2.3	0.7	0.1	7.0	4.6	27.8	1.4
九州	1.3	1.0	2.4	0.8	0.9	3.5	7.5	4.3	57.8
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

（注）国土交通省編「観光レクリエーションの実態～第9回全国旅行動態調査報告書」より作成
結果は、回収サンプルの延回数に基づく結果である。
目的地が複数の場合も集計しているため、合計が100を超える。

一方、図表 1-7 は各地域ブロックを訪れた旅行者がどの地域ブロックを出発地点としているのかを割合で表したものである（着地ベースの数字）。例えば、北海道を訪問した旅行者のうち 62.2%は北海道を出発地としており、3.3%は東北を出発地としていることを示している。なお、回答者の居住地の構成割合は、概ね人口構成比に一致している。これによると、四国を訪問する観光者のうち四国を出発地とする割合は 27.8%に過ぎず、近畿（27.8%）や中国（23.5%）からの旅行者に頼っている状況がわかる。

（財）日本交通公社の「旅行者動向 2004」では、四国４県別の観光客居住地シェアを調査（図表 1-8）しているが、この調査結果からも関西から四国への観光客数が多い状況がわかる。徳島県や香川県については、明石海峡大橋・大鳴門橋経由での関西から観光客が流入してくる状況が伺える。また県外観光客数の推移（第１章　1-1 参照）において３架橋開通による影響が比較的少なかった高知県については、大阪からの定期航空便やフェリー航路を通した関西とのつながりが深いことから、関西からの観光客数が県内観光客数に占めるシェアが最も大きい状況にある。このように域内観光が脆弱な四国の観光を考える上では、関西のマーケットを切り離して考えることできない状況にあると言えよう。

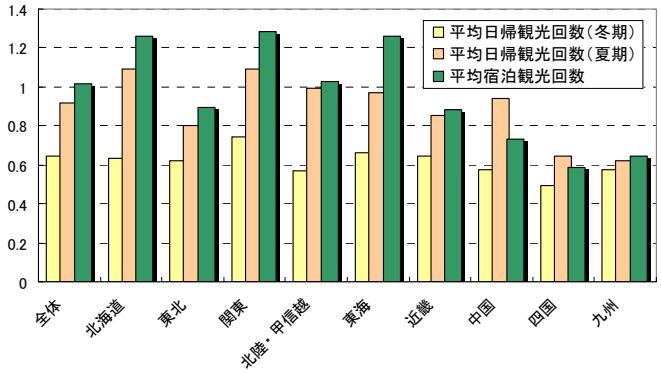
（図表 1-8）　**旅行先（都道府県）別の旅行者居住地シェア**

旅行先＼居住地	北海道	東北	関東	甲信越	東海	北陸	近畿	中国	四国	九州沖縄	合計
徳島県	3.4	0.0	12.6	2.5	4.2	2.5	46.2	8.4	14.3	5.9	100.0
香川県	0.0	1.1	9.6	0.0	5.3	2.1	37.2	22.3	18.1	4.3	100.0
愛媛県	1.4	0.0	12.5	0.7	5.6	1.4	27.1	21.5	20.1	9.7	100.0
高知県	3.1	2.3	18.3	1.5	9.2	0.0	32.8	9.9	16.0	6.9	100.0
全国	4.8	6.2	36.5	4.4	13.3	2.8	15.8	5.8	2.5	8.1	100.2

（財）日本交通公社編「旅行者動向2004」より

また、四国地域の住民は、宿泊旅行回数自体が少ないという結果が表れている（図表 1-9）。図表からも分かるとおり、四国地域の住民が旅行した回数は、日帰旅行（冬期・夏期）回数、宿泊旅行回数共に他地域と比べて最も少ない水準にあるのである。

（図表 1-9）　**ブロック別平均旅行回数（宿泊観光・日帰観光）**



国土交通省編：「観光レクリエーションの実態～第9回全国旅行動態調査報告書」より作成

こうした結果の背景には、調査におけるサンプル数の制約といった点はあるものの、四国の人々が、四国内の観光資源に対する認識が希薄でその良さを見いだしていないという面や、四国内の他県に対し心理的な距離感を持っているという面もあるのではないだろうか。四国域内の高

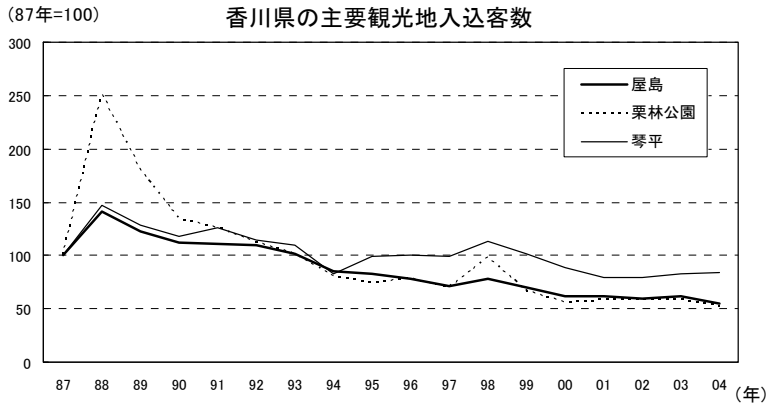
速道路の計画は“８”の字型になるものを最終目標としているが、現在（2005 年 3 月時点）では“Ｘ“字型に留まっている。この通称“Ｘハイウェイ”も 2000 年 3 月に開通したばかりであり、また４県庁所在地に高速道路が乗り入れたのも 95 年になってからというように、各県住民の中にある、“域内観光の不便さ“という先入観が拭いきれていない可能性も伺える。

１－３．低迷する有名観光地

四国の観光地の現状に目を向けることとしたい。架橋前と比べると県外からの合計観光客数は増加しているものの、各観光地は架橋前と比べて潤っているといえるのだろうか？　例えば、かねてより著名であり、観光客誘客のための中心的役割を果たしてきた、香川県内の主要観光地である屋島・栗林公園・琴平と高知県内の主要観光地である高知城・龍河洞の入込客数について考えてみることとしたい。これらの観光地の入込客数を瀬戸大橋架橋前の 87 年を１００として考えると、香川県内の屋島・栗林公園・琴平に関しては、瀬戸大橋の完成直後の 88 年をピークとして現在では架橋前水準を下回っている（図表 1-10）。

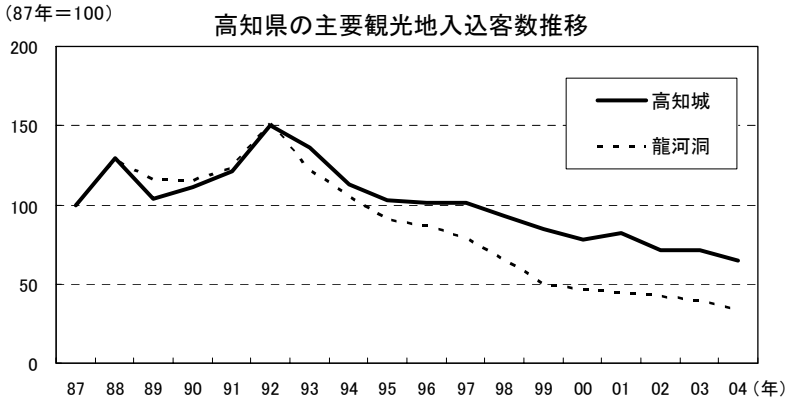
高知県内の高知城と龍河洞に関しても、川之江～大豊間の高速道路開通で高知へのアクセスが便利になった 92 年をピークとして、現在は 87 年水準を大きく下回っている（図表 1-11）。その他多くの観光地においても、近年観光客数の減少・頭打ちに悩まされている状況が分かる（図表 1-12）。

（図表 1-10）



（備考）1．香川県観光協会「主要観光地入込客数」より作成。
2．1987年を100とした指数。

（図表 1-11）



（備考）1．四国運輸局「四国運輸局業務要覧」より作成
2．1987年を100とした指数。

（図表1-12）

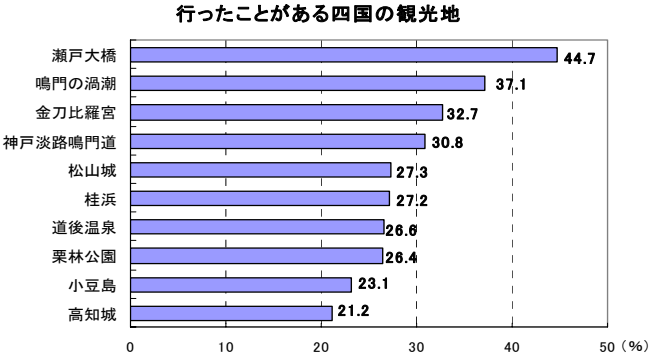
観光地等入込・利用状況

				87FY	88FY	89FY	90FY	91FY	92FY	93FY	94FY	95FY	96FY	97FY	98FY	99FY	00FY	01FY	02FY	03FY	04FY
徳島県	文化の森総合公園	徳島市	千人	－	－	－	－	790	713	668	646	793	714	699	723	766	757	752	868	865	924
	渦の道	鳴門市		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	881	811	686	652	590
	祖谷のかずら橋	西祖谷山村		192	316	284	321	337	314	284	285	285	294	294	398	283	287	299	321	379	332
	太龍寺ロープウェイ	那賀町，阿南市		165	176	182	177	181	168	n.a.	n.a.	235	231	214	252	264	277	287	267	244	222
	大鳴門橋架橋記念館	鳴門市		87	87	75	68	67	6	66	54	42	47	－	91	50	70	57	60	77	71
	ドイツ館	鳴門市		28	26	26	26	26	24	52	80	71	63	54	80	49	46	48	42	35	30
	うみがめ博物館	日和佐町		47	35	52	58	56	56	55	44	44	42	22	50	39	34	38	37	37	33
	鳴門公園駐車場	鳴門市	千台	108	113	123	109	103	98	93	76	66	73	65	145	98	191	173	151	142	128
香川県	琴平の入込客数	琴平町	千人	3,626	5,329	4,655	4,290	4,558	4,130	3,970	3,010	3,590	3,620	3,610	4,096	3,700	3,234	2,880	2,866	3,014	3,041
	さぬきこどもの国	香南町		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	521	589	574
	栗林公園	高松市		949	2,381	1,703	1,279	1,198	1,061	960	766	708	746	667	926	628	532	557	552	549	502
	寒霞渓ﾛｰﾌﾟｳｪｲ	内海町		192	465	437	410	409	393	366	329	324	310	276	288	263	244	252	268	297	271
	二十四の瞳映画村	内海町		－	－	－	－	243	249	264	245	254	247	215	233	216	186	190	225	254	236
	ゴールドタワー	宇多津町		－	－	－	186	171	157	139	n.a.	n.a.	n.a.	694	588	430	323	186	91	99	337
	レオマワールド	綾歌町		－	－	－	－	－	2,811	2,109	1,332	1,334	1,255	1,051	1,075	1,061	774	186	―	―	―
	四国村（四国民家博物館）	高松市		173	242	204	186	171	157	139	108	107	104	83	84	68	68	68	69	68	51
	屋島ﾄﾞﾗｲﾌﾞｳｪｲ	高松市	千台	253	358	310	285	282	277	258	217	210	199	179	198	176	156	157	151	156	138
愛媛県	道後温泉旅館組合宿泊者	松山市	千人	870	1,493	1,235	1,119	1,287	1,189	1,129	974	1,068	1,016	979	1,096	1,353	1,018	890	850	855	816
	松山城ﾛｰﾌﾟｳｪｲ・ﾘﾌﾄ	松山市		643	1,005	908	840	946	869	807	669	716	696	651	1,200	1,264	1,079	924	929	880	758
	とべ動物園	砥部町		－	－	795	692	707	700	662	563	677	621	597	486	493	514	512	460	453	450
	マイントピア別子	新居浜市		－	－	－	－	－	617	636	572	496	450	329	323	377	329	325	327	328	239
	伊予かすり会館	松山市		320	550	434	353	400	346	318	277	322	282	273	311	360	254	217	193	198	155
	内子座	内子町		－	－	－	－	－	－	45	45	75	61	73	61	67	60	65	63	68	88
高知県	高知城	高知市	千人	231	299	239	257	281	347	315	235	238	234	235	215	196	181	190	165	166	149
	龍河洞	土佐山田町		390	497	454	449	481	588	476	386	353	339	308	254	194	182	173	165	154	134
	龍馬記念館	高知市		－	－	－	－	n.a.	n.a.	150	116	132	136	129	129	122	132	127	116	122	119
	牧野植物園	高知市		93	100	100	90	86	99	80	68	66	70	61	42	103	154	137	111	113	106
	足摺海底館	土佐清水市		81	80	86	97	101	103	100	121	134	121	101	102	86	80	73	71	75	55
	四万十川学遊館	四万十市		－	－	－	－	－	－	55	46	47	44	38	32	25	23	20	39	38	28
	桂浜駐車場	高知市	千台	167	215	222	229	256	316	287	247	235	233	235	237	221	207	199	190	199	179

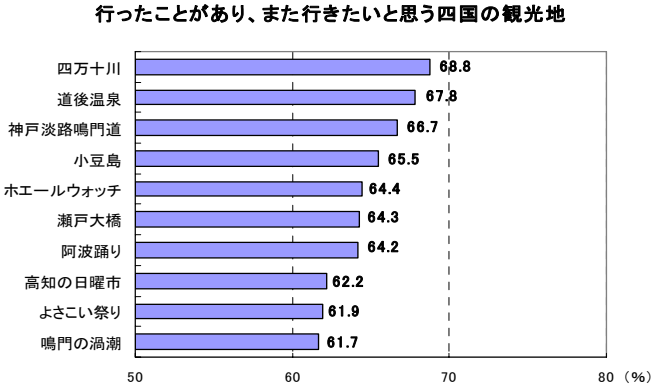
資料）四国運輸局「四国の主要観光地における入込状況について」を参考に当方作成

１－４．四国におけるエコツーリズムへの期待

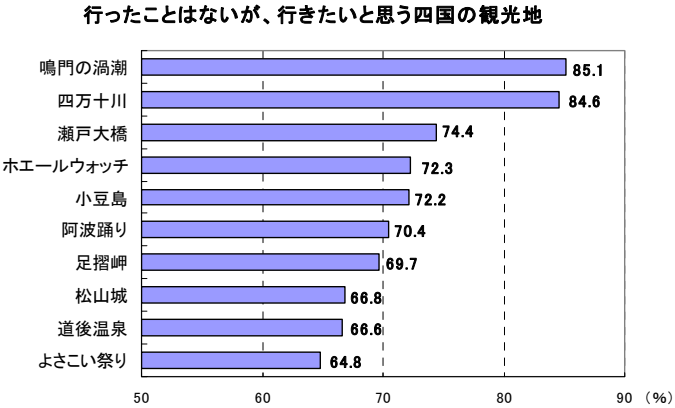
（図表 1-13）



（図表 1-14）



（図表 1-15）



では、観光客は四国のどのような観光資源に魅力を感じているのだろうか。03 年 6 月 1 日～30 日に「ウェルカム！四国」ホームページ上で行われたアンケートでは、四国の代表的な観光地 40 地点について質問をしている。ちなみに、このホームページは四国を一体のブランドとした認知度アップや観光客誘致を目的として設立され、運営は主に四国経済連合会が担っており、四国産学官連携推進会議が進める連携プロジェクトのひとつでもある。回答者の地域別分布は、ほぼ全国の地域別人口構成比にそっていると言える。インターネットを利用したアンケートのため 20～40 歳が 61.4%なのに対して 61 歳以上は 2.3%と年代的には偏りがあるものの、旅行者の関心の目がどういった地域に向けられているのかを考える上で参考になるものと考えられる。

同アンケートによれば、行ったことがある四国の観光地（図表 1-13）としては、瀬戸大橋や鳴門の渦潮、金刀比羅宮等の関西圏との関係が深い瀬戸内海東部への旅行経験が最も多い結果となっている。

こうした観光地はどちらかと言えば名勝旧跡を見て回る、見物型観光地と言える。

一方で、「行ったことがあり、また行きたいと思う観光地」（図表 1-14）や「行ったことはないが、行きたいと思う四国の観光地」（図表 1-15）としては、四万十川やホエールウォッチング、足摺岬等の自然や環境と関連する観光地が多く挙がっている。その他にも阿波踊りやよさこい祭り、高知の日曜市のような地域文化に根付いたイベントも上位にランクインしている。つまり四国観光に対する観光客の欲求は、有名観光地を単に見て回るような「見物型観光」から、自然や文化（イベント）を体感する「体験型観光」へとシフトしている状況がうかがえる。

こうした状況において、エコツーリズムは四国観光活性化の切り札となり得るのであろうか？

まず、旅行者のニーズが見物型観光から体験型観光へシフトしつつある中、エコツーリズムはまさにこうしたニーズに応えうるものであり、新たな観光客数の発掘に結びつく可能性がある。また、体験プログラムへ参加する結果として各観光地への滞在時間が長くなり、日帰り客の宿泊化が図られることや、体験型観光は見物型観光と比べその地域に対する深い印象を残すため、リピーターの増加につながることも期待される。

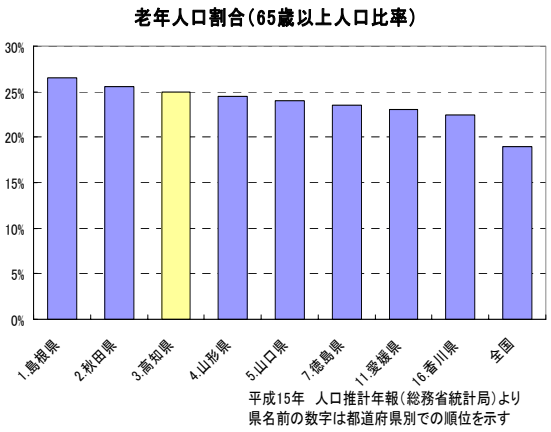
次に、域内観光の弱さという課題に対しては、エコツーリズムは近隣地域に住む小中学生の教育旅行（修学旅行・移動教室等）をターゲットにしやすいことから、有効な方策になるだろう。エコツーリズムは、地域の自然・歴史・文化を深く体感するという「学び」や「気づき」の要素があることから、こうした教育旅行には最適の素材である。

さらに、高齢化が進行し若者の少ないといった、地域の活力に係る問題に対してもエコツーリズムの効用があるものと思われる。例えば地域の農業従事者など住民自らが受入主体となることで、地元の魅力を再発見したり、地域に対する誇りを持ったりすることが可能となるほか、旅行者との交流が日常生活における刺激や生き甲斐づくりにもつながると考えられる。特に高知県における高齢化問題は深刻である（図表 1-16）が、地元に永年住み、地元の魅力を充分に理解している高齢者の経験や地元文化に関する知識は、ツーリズムを行う上での魅力あるプログラムを生み出す源泉となろう。また、今後は団塊の世代が高齢者となっていくことから、ツーリストとしての高齢者に注目が集まっているが、全国に先駆けて高齢化が進行している四国においては、受入側の高齢者が果たす役割も重要になると言えよう。

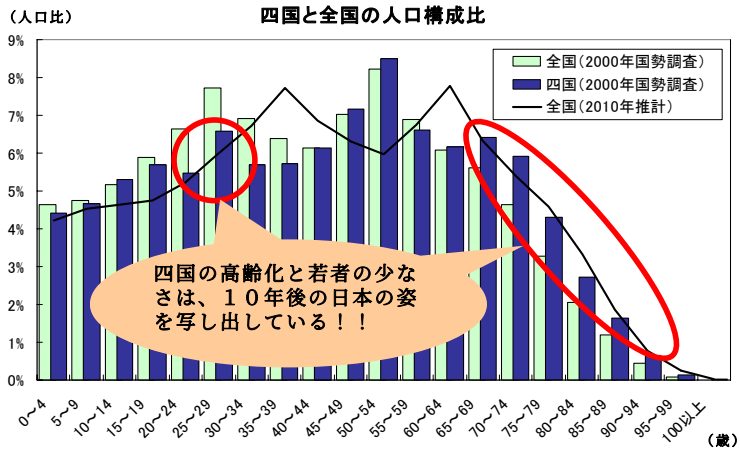
図表 1-17 の示すとおり、四国の高齢化は 10 年後の日本の姿を写し出しているとも言えることから、四国において高齢化に対応したエコツーリズムを実践することは、日本の観光の方向性を考えるうえで意味のあるものとなるであろう。

このように、四国観光の現状や課題に対して、エコツーリズムは解決策を提供できると考えられる。そこで、次章以降では四国におけるエコツーリズムに焦点を当てて、考えてみることとしたい。

（図表 1-16）



（図表 1-17）



（総務省統計局、国立社会保障・人口問題研究所資料より作成）

第２章　我が国におけるエコツーリズムの取り組み

２－１．エコツーリズムとは？

エコツーリズムというと、人によりイメージがかなり異なると考えられることから、まず認識の共通化を図るため、ここで概念の整理を行うこととしたい。様々な機関から、その定義付けがなされているが、代表的なものを以下に掲載することとする。

エコツーリズム ＝ 自然環境や歴史文化を対象とし、それらを体験し学ぶとともに、対象となる地域の自然環境や歴史文化の保全に責任を持つ観光のありかた
エコツアー ＝ エコツーリズムの考え方を実践するためのツアー
　エコツーリズムとは、自然環境などの資源を損なうことなく、自然を対象とする観光をおこして地域の振興を図ろうという考え方である。自然の成り立ちや歴史・文化が持つ深い意味をわかりやすく解説し、来訪者は大きな感動を得る。それが経済行為として成り立つ。そのことが、地域の自然環境や歴史文化を尊重し、守っていく行動にもつながり、成功すれば、環境と経済の好循環の一例となる。もともと途上国の自然保護のための資金調達手法として取り入れられたエコツーリズムの考え方は、持続可能な観光のひとつの領域として先進国でも展開されており、２００２年を国連がエコツーリズム年とするなど、国際的にも定着した用語(ecotourism)となっている。我が国においては、自然や野生生物だけでなく、個性的な地域ごとの文化も、ツアーの魅力の大きな要素となる。

（環境省）

エコツーリズムとは、
①自然・歴史・文化など地域固有の資源を生かした観光を成立させること
②観光によってそれらの資源が損なわれることがないよう、適切な管理に基づく保護・保全をはかること
③地域資源の健全な存続による地域経済への波及効果が実現することをねらいとする、資源の保護＋観光業の成立＋地域振興の融合をめざす観光の考え方である。それにより、旅行者に魅力的な地域資源とのふれあいの機会が永続的に提供され、地域の暮らしが安定し、資源が守られていくことを目的とする。

（日本エコツーリズム協会）

エコツーリズムとは、
旅行者が、生態系や地域文化に悪影響を及ぼすことなく、自然地域を理解し、 鑑賞し、楽しむことができるよう、環境に配慮した施設および環境教育が提供され、 地域の自然と文化の保護・地域経済に貢献することを目的とした旅行形態。

（日本自然保護協会）

環境が保全されており、地元民の福利に貢献している自然地域へ、責任をもって旅することをエコツーリズムとする。

（TIES：The International Ecotourism Society）

これら各機関のエコツーリズムに対する定義づけから、①地域資源である自然や文化の活用、②地域資源の持続的な保護・運営、③地域社会との連携、の３点がキーワードと考えられる。これらのうち特に②、③は、従来型の単に名勝旧跡を眺めたり、新しく建設された施設を訪問したりする観光にはない新たな視点であると言える。

２－２．観光地としての持続可能性

観光地にとっては観光客数の増加や経済効果こそが至上命題のように捉えられることが多々あるが、観光客数の増加により、観光地の財産とも言える環境を破壊してしまうなど、さまざまな弊害が起こる可能性があることを理解しておく必要があろう。エコツーリズムにおいてはこうした弊害が発生しないよう管理し、自然環境を保持し、保護教育を徹底する必要がある。具体的には入域者制限を設ける等の対策も考えられよう。例えば、ニュージーランドや小笠原では、１日のツアー客数に上限を設けることにより、エコツーリズムの人気が高まった後も環境への負荷を抑制している。

一方で持続的な発展のためには経済的な側面も無視することはできない。無償ボランティアのみに依存したり、受入時の補助金をあてにしたりするようなエコツーリズムでは継続は難しいと言わざるをえない。つまりツーリストの満足を得られるような付加価値創出の取り組みと、受入側となる地域住民に資金が還元される仕組み作りが必要となろう。このようにツーリストと地域住民の双方に便益をもたらす仕組み作りによって、エコツーリズムの供給側である各地域の持続的発展が可能になると言える。

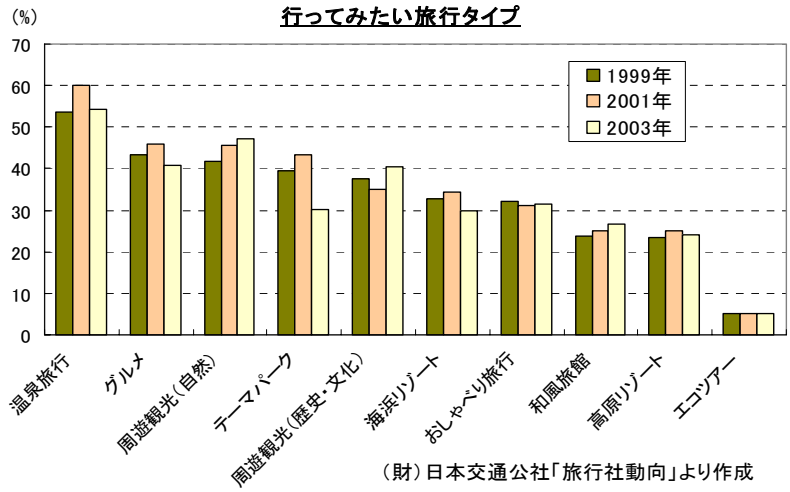
２－３．観光のあり方の変化

需要側のツーリストはエコツーリズムをどのように考えているのだろうか。多様化・個性の時代と呼ばれて久しい昨今、旅行嗜好においてもその波が押し寄せていると言える。従来型のマスツーリズムだけではなく、少人数でのテーマに沿った旅行等、嗜好の多様化が進んでいる。

「旅行者動向 2004」（(財) 日本交通公社）によれば、行ってみたい旅行（図表 2-1）の一位は温泉旅行（57.9%、複数回答）であり、続いて自然や景勝地を見て回る観光旅行（周遊観光）の45.7%であることから、テーマパーク（41.0%）や周遊観光（歴史・文化）（39.2%）、グルメ（37.4%）以上に、自然に対する関心があるといえよう。

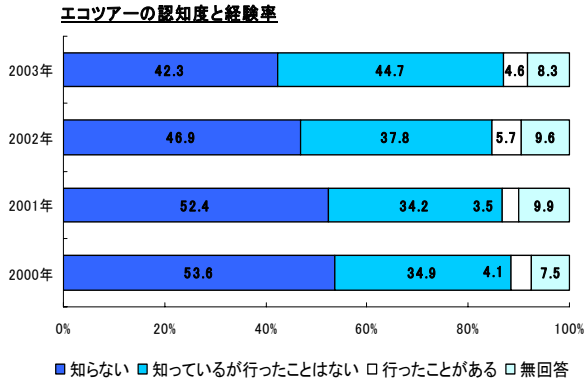
一方で、「エコツアー」という観光形態を選択した割合は低い（4.7%）が、これはエコツアーに関する認知度が低いことと関係しているとみられる。上述のような自然に関心のある層の一部はエコツアーに対する認識を深めることによって、将来的なエコツアー参加者にもなりえるものと考えられる。

（図表 2-1）

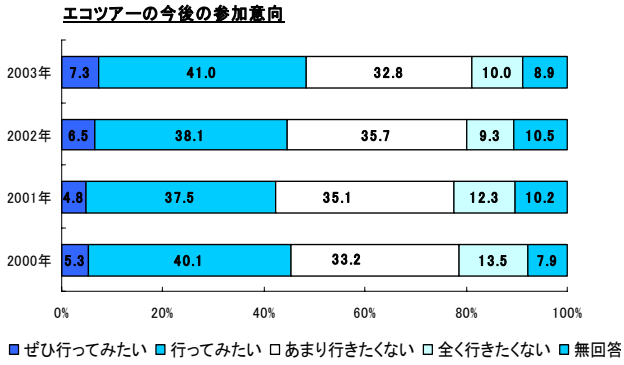


エコツアーの認知度は、年を追って上がってきているものの、５割程度に留まっている（図表 2-2）。一方で今後の参加意向に関しては約半数が参加したいと回答している（図表 2-3）。従って、今後の認知度向上により潜在的なエコツーリズム参加需要が喚起されることが見込まれる。なお、この調査では「エコツアー」とは“自然を楽しみながら、自然や文化、環境などに対する理解を深める旅行“と定義している。

（図表 2-2）

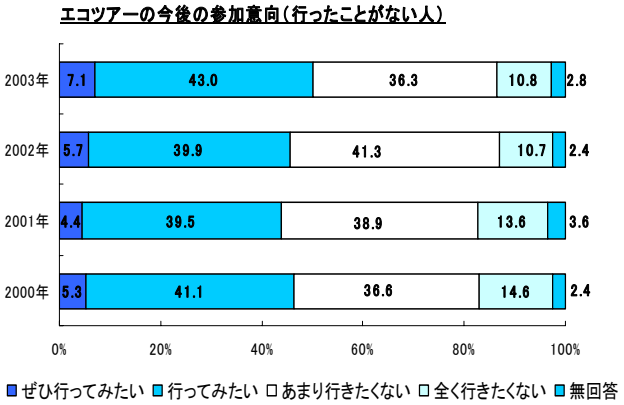


（図表 2-3）

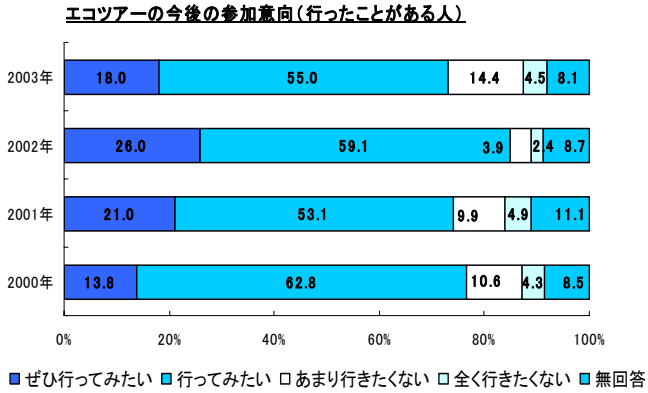


これまでエコツアーに「行ったことがない人」の、今後の参加意向については、約半数が参加したいと回答している（図表 2-4）のに対して、「行ったことがある人」の参加意向は高く、「ぜひ行ってみたい人」と「行ってみたい人」を併せて７割を超えている（図表 2-5）。このような「行ったことのある人」の参加意向の高さから、エコツアーについては相応のリピーター率の確保が可能になるものと考えられるのではないだろうか。

（図表 2-4）



（図表 2-5）



２－４．エコツーリズムモデル事業実施地区

近年全国では、飯田市以外にもエコツーリズムに取り組む地域が増えてきている。今後のエコツーリズムを考える上で参考となるような取り組みとして、環境省が平成 16 年 6 月に選出したエコツーリズムモデル事業実施地区を紹介することとしたい。このエコツーリズムモデル事業実施地区とは、「エコツーリズム推進会議」（議長：小池百合子環境相）が、エコツーリズムの普及・定着に向けエコツーリズムの推進に意欲的な自治体を支援するために設けたモデル地区であり、全国の 53 地域から応募があった中から、小笠原（東京都）や知床（北海道）、鹿児島県屋久島（鹿児島県）など計 13 地域が選出されている（図表 2-6）。モデル事業は平成 16 年度から 3 年間実施されることになっており、まず地域の自然や文化資源の利用について基本計画が策定され、次に、専門家が継続的に資源を監視し、保護する一方、エコツアーのプログラムの作成やツアーガイドの育成などが図られ、最終的にこうした体制整備を踏まえ、具体的なエコツアーの意義やプログラムの販売促進が図られる予定である。

（図表 2-6）

環境省エコツーリズムモデル事業実施地区

類型	県名	地区名	概要	地区内事業者等	備考
豊かな自然	北海道	知床	知床の豊かな自然環境と農業、漁業などの地域産業を活かした滞在型のエコツアーを推進。世界自然遺産地域に登録。	知床財団（斜里町が設立）	自然保護・管理と、エコツアーガイド業
	青森・秋田	白神	ガイドによる自然観察会、トレッキング、ガイド付き観光路線バスの運行などを実施。 世界自然遺産地域に登録。	白神山地きみまち舎	原生ブナの森の保護
	東京	小笠原	ホエールウォッチング、植生回復ボランティアツアー。 東京都が南島、母島石門の2地区を対象に、利用調整とガイド同行の義務化を柱とした都版エコツーリズムを開始。	小笠原ﾎｴｰﾙｳｫｯﾁﾝｸﾞ協会	絶滅が危惧される動植物の観察
	鹿児島	屋久島	登山、沢登り、カヌーなど。約100名のガイドが活動。ルールの策定と特定の場所への集中回避が課題。 世界自然遺産地域に登録。	屋久島環境文化財団 屋久島野外活動総合ｾﾝﾀｰ	エンターテイメント性の高いエコツアーを提供
多くの来訪者	福島	裏磐梯	平13/9国際エコツーリズム大会開催。エコガイド組織設立。 自然体験を中心としたエコツアーを実施。	裏磐梯トレイルクラブ 裏磐梯ｴｺﾂｰﾘｽﾞﾑ推進協議会	滞在型観光の推進
	山梨	富士山北麓	年間2千万人の来訪者。樹海エリアでのガイドツアーが盛んとなりつつあり、県がルールの策定を実施。	ホールアース自然学校	自然体験プログラムの実施
	兵庫	六甲	年間5百万人の来訪者。展望中心のマスツーリズムで発展した地域。NPO等による体験プログラム提供がボランタリーに開始。	日本エコロッジ協会	エコロッジの運営
	長崎	佐世保	多島海景観を呈する九十九島とその後背地。シーカヤック、ヨットセーリングなどを実施。ハウステンボスとの連携の可能性も。	させぼパール・シー㈱	九十九島遊覧の運営ほか
里地里山	宮城	田尻	マガンの有数の飛来地として有名。蕪栗沼（ｶﾞﾝｸﾘﾇﾏ）の環境保全活動、農業体験ツアーな		
	埼玉	飯能・名栗	古くからの林業地でもある大都市近郊のレクリエーションエリア。 NPOや地元住民などによる自然観察会、森林管理体験、カヌーなど。		
	長野	飯田	グリーンツーリズム事業などによる都市農村交流が盛ん。体験プログラムの開発、受入を官民一体で設立した南信州観光公社が実施。	㈱南信州観光公社 飯田市エコツーリズム推進室	体験型エコツーリズムの推進
	滋賀	湖西	「湖西森と里と湖のミュージアム」計画に基づき、地域が主体になった取り組みを展開。		湖国まるごとエコミュージアム構想
	三重・和歌山	南紀・熊野	熊野古道と山地の自然環境を活かした取り組み。語り部と歩く熊野古道、丸山千枚田の水田体験、地引き網体験など。 世界文化遺産地域に登録。	東紀州エコツーリズム研究会	エコツーリズム事業主体への支援

（環境省ホームページを参考に本行作成）

２－５．四国でエコツーリズムに取り組む地域

では、四国において現在どのようなエコツーリズムの取組があるのだろうか。

例えば先述のアンケートにおいて、四国の「行ってみたい観光地」として上位に位置づけられた四万十川流域では、「幡多フィールドミュージアム構想」という取り組みがなされている。高知県西部の幡多地域（中村市・土佐清水市・宿毛市・佐賀町・大方町・大月町・西土佐村・三原村）は、四万十川の他にも足摺岬や鯨の住む黒潮の海などの自然に恵まれている。そこで幡多地域をひとつの「博物館」と捉えた取り組みが「幡多フィールドミュージアム」である。

その中核を担う砂浜美術館では、何もない砂浜を美術館に見立てて“Ｔシャツアート展”の会場としたり、砂の彫刻を展示したりするほか、ホエールウォッチングや各種イベントの運営を行っている。また同美術館事務局は「幡多フィールドミュージアム」の中核として同地域におけるエコツーリスト受入の総合窓口になりつつある。

（砂浜美術館のイベントが開催される大方町の海岸：当方撮影）

その他、幡多フィールドミュージアムには、廃校を利用した体験交流・宿泊施設の四万十楽舎や、とんぼとふれあうことができる体験型施設の四万十川学遊館、海の自然とふれあうことが出来る高知県西南端の柏島の黒潮実感センターなどが含まれている。また、幡多地域の中心資源となる四万十川に関しては、高知県が四万十川保全のための条例（四万十川条例）を策定し、保護する一方、四万十川財団では四万十川ブランドの認証や流域保全のためのリバーマスター認証制度を行うなど、地域が一体となった活動が行われている。

対外的なＰＲやコーディネーター機能については、上述の砂浜美術館が一般のツーリスト向けの広報を行う一方で、幡多広域観光推進連絡協議会において、修学旅行生を中心とした誘致活動を行っている。同協議会には常勤者が１名おり、毎年約 20 校（約 2,000 人）の修学旅行生受入の窓口となっているほか、100 近い体験プログラムを設定し、修学旅行誘致のための営業活動を積極的に行っている。

四万十川流域以外でも四国においては図表 2-7 に整理したように様々な取り組みが見られる。これらの地域は、独自の海や山や川の自然資源を有し、且つ独自の文化、産業、歴史を育んでき

た。また、各取り組みは、内閣府が選定した観光カリスマ（参考資料 3 参照）に代表されるように、地元を愛する観光のプロや有志が中心となって作り上げられたものが多い。こうした各地域独自の資源を活用し、それぞれに特徴ある体験型観光の取組が始まっている。今後はこれらの地域の取組が、四国におけるエコツーリズムの中核資源・プログラムとなりうる可能性を持っていると言えよう。

（図表 2-7）四国における主なエコツーリズム対象資源

四国における主なエコツーリズム対象資源

県	地域名	主な資源	中心事業者	備考
徳島	竹ヶ島	海洋資源	宍喰町	**海洋資源を活用した観光振興** 竹ヶ島海中公園やシーカヤック事業等を活用し観光振興を図る。（環境省エコツーリズムモデル地区申請）
	牟岐町	海洋資源	㈱ノアむぎ2000	**漁業者と観光ベンチャー（ダイビング事業）の連携** これまで禁止してきたスポーツダイビングを解禁し、ダイビング事業者と漁協が協力してダイバー誘致・啓蒙による環境保護と地域活性化を推進。
	美馬市 （旧脇町）	文化資源	美村が丘	**うだつの町並みとグリーンツーリズムの融合** 都市と農村の交流によって新しい農業を育むため、グリーンツーリズムの交流促進宿泊施設「美村が丘」を整備。そば打ち、かずら細工、田植え、野菜づくり、山菜採り等の体験プログラムを実施。農村地域の振興、活性化を図る。また江戸期から明治中期にかけて栄えた”うだつの町並み”を活かしたまちづくりの取組みもなされている。
	上勝町	森林資源	上勝町	**農業等、体験プログラムの実施** 上勝町は”葉っぱ”を使った製品開発で有名。上勝町をフィールドとして自然・ゴミ関係のシステム・農作業・森の遊び等体験プログラムを計画。下記3点につき構造改革特区の申請をおこない、環境に関する体験プログラム実施を模索している。 ①有料民泊をすすめるための消防法の規制緩和 ②少量の地酒製造のための規制緩和（どぶろく特区） ③小規模農地の貸し付けを認める農地法の規制緩和
香川	豊島・直島	その他	直島町	**産廃処理課程を通じた環境学習** 香川県豊島に不法投棄された産業廃棄物処理事業（中間処理施設）が直島に建設されたことを契機に開始。循環型社会のモデル地域を目指し、「エコアイランドなおしまプラン」を策定。平成14年に「エコタウンプラン」承認（経産省、環境省）。不法投棄現場となった豊島等と連携したソフト事業として、エコツアー誘致を計画。
	広域	文化資源	香川県	**瀬戸内地域でのアートツーリズム構想** 直島の家プロジェクトやベネッセアートサイト（地中美術館）、丸亀市の猪熊弦一郎美術館、牟礼町のイサム・ノグチ庭園美術館、坂出市の県立東山魁夷美術館等の連携させるアートツーリズムをPR。瀬戸内海を隔て岡山側の大原美術館等との連携も模索している。
	内海町	海洋資源	内海町	**海辺の教室エコツアー実施** 平成15年夏に、内海町と五島産業汽船が主催し「小豆島・海辺の教室エコツアー」を開催。阪神－小豆島間の航路PRと同時に、島ならではの体験学習を通じて観光振興を図った。
	東かがわ市	農業資源	東かがわ市	**ニューツーリズム（田舎暮らし体験）の促進** 観光振興と地域活性化を一体的に進める「ニューツーリズム基本計画」を策定（平成16年）。市内にある有形無形の観光資源の活用や、既存産業の再生、新規産業の育成を通じて持続的観光開発をおこなう。従来の観光協会を「ニューツーリズム協会」に改組し、「田舎暮らしツアー」を実施したりする他、同市引田地区の空き屋敷（築約200年）を交流施設（讃州井筒屋敷）として復活させて、周囲の古い町並みと併せたPRを展開。
愛媛	内子町	文化資源	内子町 ﾌﾚｯｼｭﾊﾟｰｸからり	**”町並み保存”から”村並み保存”へ** 農村風景や生活、文化を保存しようという内子町「村並み保存」モデル地区を制定。 「石畳の宿」では田舎暮らし体験を提供。また産直施設「フレッシュパークからり」では、農業者が主体的に参加する仕組みを整備、都市農村交流拡大を実現している。
	大洲市	文化資源	大洲市	**昭和30年代の雰囲気をテーマにした”ポコペン横町”** 地元住民グループが中心となり昭和30年代の雰囲気をテーマに、露店が軒を連ねる「大洲まぼろし商店街一丁目ポコペン横町」を形成。平成16年には内子・大洲・宇和を中心とする南予地域ではまちづくり型観光博覧会として「えひめ町並博2004」を実施し、イベント参加者数は見込客数を3割上回る約170万人に達した。
	伊予市 （旧双海町）	海洋資源	伊予市	**しずむ夕日が立ち止まる町** 双海を夕日がきれいな町としてアピール。下灘駅のホームをつかった「夕焼けプラットホームコンサート」等のイベント開催や、「夕日のミュージアム」、「ふたみシーサイド公園」等の施設整備を実施。町の観光振興を図っている。
	新居浜市	文化資源	新居浜市	**別子銅山跡等の地域産業資源を活用した観光振興とまちづくり** 観光カリスマにも選出されている森賀氏（新居浜市職員）を中心に、地域資源である別子銅山跡を中心とする近代産業遺産を観光等のまちづくり資源として活用。さらなる産業観光振興のために、環境、地質、大気との関連を含めて「ジオ・ミュージアム都市」を目指す。
高知	幡多地域	河川資源	四万十楽舎 四万十川財団 四万十の宿	**四万十川源流域の自然資源保護と活用** カヌーツアーや、地元漁師による伝統漁法講義、山師による四万十川流域の森林の役割に関する講座等実施。（環境省エコツーリズムモデル地区申請）
	幡多地域	海洋資源 河川資源	砂浜美術館 四万十川学遊館 黒潮実感ｾﾝﾀｰ	**幡多地域フィールドミュージアム構想** 幡多地域沿海部（足摺岬等）はホエールウォッチングエリアとして、また四万十川流域地域として有名。しかしプログラム実施地点や宿泊施設が分散している状況にあることから連携を模索。幡多フィールドミュージアム構想では、参加者（砂浜美術館、柏島黒潮実感センター、四万十川学遊館等）が連携した上で、砂浜美術館が中核施設となり、各プログラム間の連携を支援。また幡多広域観光推進連絡協議会では各プログラムのPRと教育旅行誘致活動を実施。
	本山町	河川資源	本山町 mont－bell	**吉野川源流域でのグリーンツーリズムと自然体験** 廃校での体験教室や農業体験等、町内資源を活用したエコツーリズムを模索。吉野川支流の汗見川流域においては広葉樹植林や人工林の間伐体験を実施。また、民間事業者のmont－bell（モンベル）が事務所を構え、ラフティングやカヌーなどのアウトドア体験を提供している。
	いの町 （旧本川村）	河川資源	いの町	**山村の自然と文化を活用した体験型エコツアー** 吉野川源流域地域。山村の自然と文化を活用した体験型エコツアーの実施、人工林の手入れ等の環境保全活動の推進。（環境省エコツーリズムモデル地区申請）
	室戸市	海洋資源	室戸市	**室戸岬でのホエールウォッチング** ホエールウォッチングツアーを実施。また当地は自然資源を活用した海洋深層水でも有名。海洋深層水を活用したタラソテラピー施設も建設中。
	馬路村	農業資源	馬路村 JA馬路村	**ゆず農家でのグリーンツーリズム** ゆずで有名な当地には、観光客が増加してきている。ゆずの生産量は年々増加しているが、村の高齢化も進んでいることから、収穫期には人手不足となる。そこで旧営林署の建物をグリーンツーリスト向けに改修、収穫期の農業体験としてグリーンツーリストを受け入れる構想。

（ホームページ、新聞記事等を参考に本行作成）

２－６．エコツーリズム先進地域（長野県飯田市）からの報告

四国地域の自然は北海道や沖縄のような大自然ではなく、文化や歴史、人々の生活と密着した自然であると述べてきた。従ってエコツーリズムの手法も北海道や沖縄よりもむしろ、文化や歴史があり、自然条件が比較的似ている地域が参考になるものと考えられよう。

南信州の長野県飯田市では、エコツーリズムに関する取組が行われている。飯田市は天竜川を抱いた中山間に位置し、これらの自然に育まれた歴史・文化があるなど、四国地域に相通じるものがあると言えよう。

この飯田市のエコツーリズム事業の牽引役であり、内閣府の観光カリスマ百選にも選出されている、飯田市エコツーリズム推進室長の井上弘司氏を講師として招聘し、平成１７年３月２４日に本山町でご講演頂いた（「日本政策投資銀行高知フォーラム」として高知県本山町プラチナセンターにて開催）。以下に井上氏の講演録を掲載する。

～講師略歴紹介～
井上　弘司（いのうえ　ひろし）

1952年　長野県飯田市上郷（旧上郷町）生まれ
1971年　長野県県下伊那郡上郷町役場勤務
1993年　飯田市役所 農林部 農村整備課 主査
1997年　〃　産業経済部 農政課 経営相談係長
1999年　〃　農政課 農政係長
2004年　〃　産業経済部 エコツーリズム推進室長

現役職・委員
●内閣府第2次「観光カリスマ百選」（国交省）
●観光カリスマアドバイザー（日本観光協会）
●農業体験学習に関する情報提供体制の整備企画推進委員（農水省）
●都市農山漁村共生・対流推進会議 グリーン・ツーリズム専門部会委員（農水省）
●食と農の応援団団員（団長：木村尚三郎）
●地方中核都市物産展企画委員（電源地域振興センター）

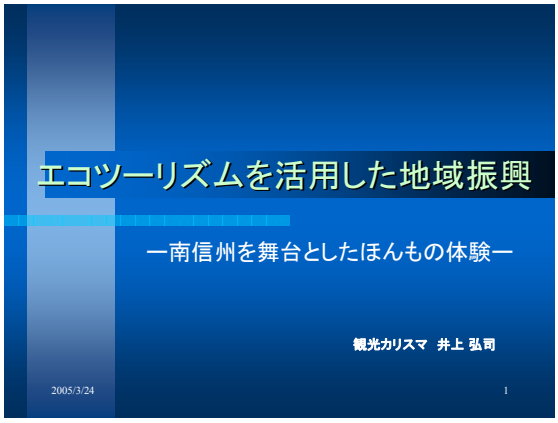
著書
- 「自然と人間を結ぶ164-食農教育で農都両棲の地域づくり-」(2002.4農文協)
- 「ドングリの森小学校物語(児童書)」(2004.1講談社)

共著
- 「自然と人間を結ぶ173 地域づくりとほんもの体験-」(2004.7)
- 「現代農業増刊おとなのための食育入門」(2004.8)
- 「自然と人間を結ぶ175 むらづくりと地域農業の組織革新-」(2005.1)

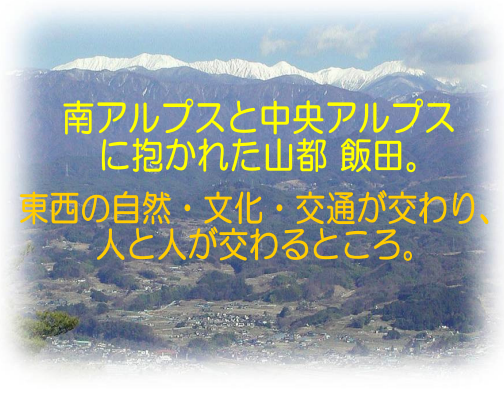
ほか教育・自治・環境・農業等の雑誌にて多数執筆

２－７．井上室長講演録「エコツーリズムを活用した地域振興」

（スライド１）



（スライド２）



①はじめに

皆様今日は、長野県の南の端からまいりました井上でございます。本日は講演を早く終わらせて、できるだけ質問時間を長く取ろうと思っております。そのため途中で飛ばしてしまう部分があるかと思いますが、足りない部分は質問していただきたいと思っています。質問していただくことが、足りない部分を補うのには一番良く、質問された方もその部分について理解していただけるわけですから、是非たくさん質問していただきたいと思います。

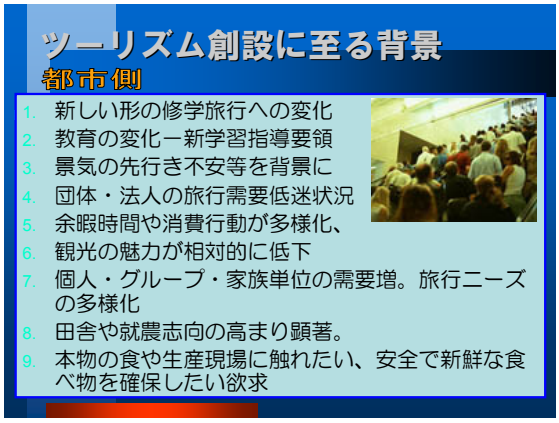
では、本題に入りたいと思います。本日は「エコツーリズムを活用した地域振興」という演題をいただきました。実は今日は私の部下が松山の方でも講演をしておりまして、四国でこの話を２箇所でしているわけでございます。私は現在、飯田市のエコツーリズム推進室という所に勤務しておりますが、本日付で内示が出まして別の部署で、もっと大きな枠組みの中で仕事をしろということになりました。観光分野だけではないものにも口を出して行かなければならないわけでございまして、電話で内示の話を聴いて、これまで飯田市にはなかったような新しい分野なので、飯田に帰ってからよく考えないと、自分が何をしたら良いのか分からないわけです。しかし 3 月 31 日までは現在のエコツーリズム推進室で仕事をすることになっているわけでございます。

飯田というところは、今丁度こういうような状態（スライド 2 参照）です。これは南アルプスですが、その反対側にあるのが中央アルプスで、今真っ白な山を観ることができます。つい先日市町村合併の調印が行われまして、あの山の頂上まで飯田市に属することになりました。反対側は一部岐阜県と重なるような、そういう所にあります。これを見ていただくとお分かりになると思いますが、高低差のある山間部では標高 300m くらいから人の住んでいる 800m くらいの標高の所まで、非常に起伏に富んだ地形をしています。飯田は天竜川の河岸段丘にあると言われておりますが、実は河岸段丘というよりも活断層でございまして、30 年以内にマグニチュード 8 以上の地震が起こるのではないかと言われている地域の中にございます。そのような所で私どもが何を考えているかについてこれからお話しをさせていただきます。

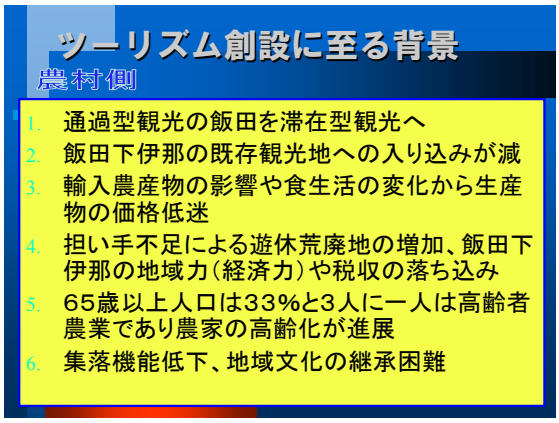
②エコツーリズムの背景

いわゆるグリーンツーリズムとかエコツーリズムなどいろいろな言い方をされておりますが、各省庁がいろいろな言い方をしております。最近では、経済産業省が集客交流という言い方を始めましたが、国土交通省も環境省も厚生労働省も、縦割りで同じことをやっています。しかしそういうことは国がやっていれば良いことで、実際に地元の皆様とやっていく時には、中央省庁のような縦割りではやっていけません。各省庁の美味しい所だけをいただいて、自分達のところでどのように組み立てていくかが大事になってきます。そういうことでやって来たわけですが、その背景としては新しい形での修学旅行、今までは奈良、京都や最近ではテーマパークへ行くというのが修学旅行だったのですが、修学旅行はもっとこども達に対する教育力のあるものでなければいけないということで、かつて行われていたスキー修学旅行が急激に減少してしまいました。もっと自然の豊かな所で人と関わりながらいろいろな体験をするという旅にシフトしましょうということで、文部科学省も大分前から言い続けて来たわけでありまして、実際に修学旅行の形態も変わってまいりました。大人の人達も、特に阪神・淡路大震災以降、都市部に不安感を持つ人達が増えて来ました。そういう人達の間で田舎に行きたいという希望が増えてまいりました。それから当然のことながら、旅行そのものも団体旅行から家族や友人達との旅行に変わって来ました。そういういろいろな変化がありました。それから一番良かったなと思われることはバブルが弾けたことでございます。バブルが弾けた結果、田舎に目を向けてくれるようになったわけでございます。さらに最近は食の安全･安心ということを非常に気にする人が増えてまいりました。そのような都市側の理由を挙げることができます。

（スライド３）



（スライド４）



次に、いわゆる農村側、私どもの地域の側ですが、飯田市は観光過疎地と言われて来ました。長野県は観光県と言われています。しかし長野県のどこでも観光で食えるというわけではありません。長野県で思い浮かべるのは善光寺、松本城あるいは白馬の北アルプスの山並み、それから諏訪湖、その辺が中心になります。私どもの市はそれらではなく、もっと南の方にありまして、観光の目が向けられて来ず、通過型の観光でした。通過型観光と滞在型観光（スライド４参照）

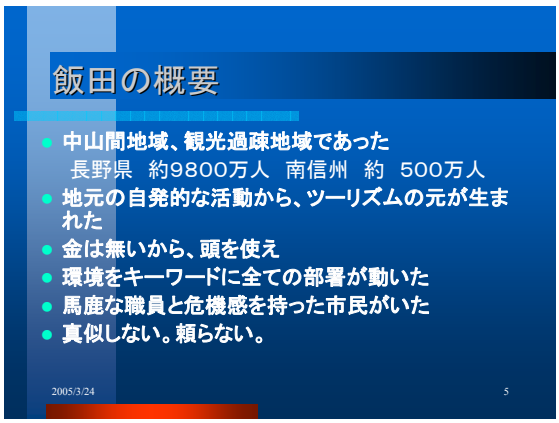
と書いてありますが、滞在型観光にするだけで地元に落ちるお金が全然違ってきます。泊まっていただいて何とか地元にお金を落としていただくためには、通過型ではなく飯田に来てもらい、泊まってもらうための必然性を作らなければなりません。それがエコツーリズムを推進した背景の一つでございます。当然のことながら既存観光地は、全国の有名観光地が落ち込んだように、飯田市にも天竜峡という景勝地がありますが、これは景勝地の中ではナンバーワンと言われておりますが、そういうところが全く駄目になってしまいました。今景勝地をどうエコ化してもう一回お客さんを取り戻すかということで今年から手を入れているところですが、既存観光地は駄目になってしまったということが飯田でも言えるわけでございます。

それから、農村で価格低迷や担い手不足という、これは日本全国どこでも同じですが、そういう状況になっております。山間部へ行きますと 65 歳以上の高齢者しか住んでいないという集落もあったりします。当然そういう集落では、集落そのものの力が落ちてきます。そこで集落そのものの力を持続させるにはどうすれば良いかを考えてきたわけであります。そういうことがありまして、都市と農村の双方にメリットがあるようにするにはどうすれば良いだろうかということを考えたわけです。

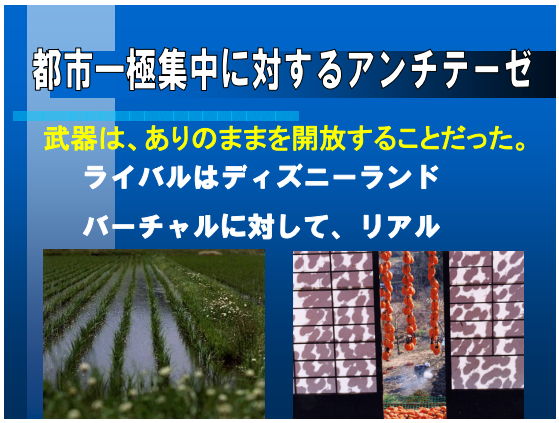
③エコツーリズムの理念

飯田の概要ですが、先程も申し上げたように、中山間地で観光過疎地であります。長野県は南と北では全然違います。飯田のある南信州と呼ばれる地域は、実は香川県よりも少し大きな面積でありますが、南信州には年間たった 500 万人しか来ていません。これを何とかしないといけません。しかし行政にはもうお金がありません。ふんだんにお金を投じて客を呼び寄せるということはなかなかできませんので、とにかく頭を使えということを有識者からも言われて考えたわけでございます。一つは環境をキーワードに全ての部署が動いていこうということでございます。その中には私のような馬鹿な職員や危機感を持っていた市民の人達がおりました。こういう市民の人達といろいろ話し合いをしながら進めてきたのが飯田のツーリズムでございます。

（スライド５）



（スライド６）



最初にこういうふうに考えました。いわゆる東京への一極集中、ヒトもカネも全てが東京に集中して行くという世の中で、最近また東京が土地バブルになりかかっているようですが、東京と同じことをしては駄目だということであります。というよりも同じことをしようとしてもできません。極端なことを言いますと、ディズニーランドは凄い集客力を誇っています。全国のテーマパークの中で一人勝ちの状況になっています。飯田で同じことを仕掛けても、ディズニーランドはできませんし、東京の都心部もつくれません。ですから逆の発想をしていこうということで、バーチャルに対してリアルということで、文明に対してウチは文化で行こうということで、本物志向を政策の基本にしました。「ライバルはディズニーランド」などと大それたことを書いていますが、ディズニーランドのリピーター率は 98%くらいあるといわれています。そういったリピーターの多いところは、すばらしいホスピタリティーで来た者を満足させてくれます。そういう所と競争するわけですから、ウチも相当努力をしなければいけません。しかもディズニーランドと同じやり方をすることはできません。

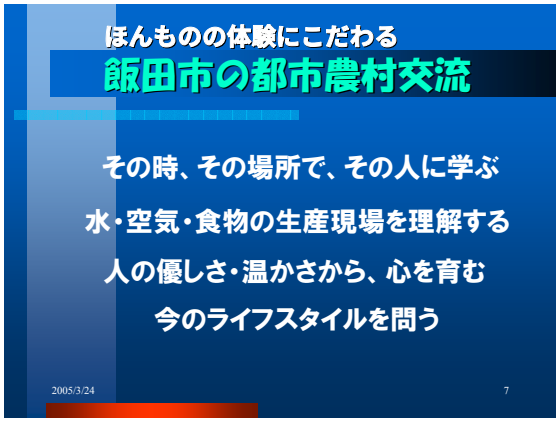
それから長野県は観光地だと言われておりますが、同じ長野県の北部が私どものライバルになるわけであります。こちらと同じで高速道路が通っております。中央自動車道という高速道路でありますが、北へ行く場合は長野自動車道になります。観光客はどうしても北に向かいます。オリンピックや今回のスペシャルオリンピックを開催し、どんどんインフラ整備をしてお客を呼んでいます。それに較べると南信には何もありませんので、どうしてもメディアに受けるのは北信の方が多いので、人々の目に触れることがありません。ですから北信と同じことをやっても駄目です。ウチは果樹が農産物として多いのですが、リンゴ、ナシ、桃、サクランボ、ブドウのような産物があるわけですが、中央自動車道の沿線には山梨県という果樹の大産地があります。ですから山梨県と同じことをやっても駄目なわけでございます。そして長野県でも北と同じことをしても駄目ですから、自ずと東京とも山梨とも、そして北信とも異なるやり方をしないと駄目だということで考えて来ました。それが先程申し上げた農村をありのままの姿で開放しようということであります。その基本が「ホンモノ体験にこだわる飯田市の都市・農村交流」であります。最近は余り「ホンモノ体験」という言葉にこだわらなくなりまして、「都市・農村交流」という言い方を良く使いますが、こだわっていた時期は農村が主役ということで「農村・都市交流」という言い方をしています。最近は余りこだわらなくなりましたが、どちらが主役かを明確にするために最初は「農村・都市交流事業」という言い方をしました。

その内容を示すのが次の「その時、その場所で、その人に学ぶ」という理念でございます。その時でないと観ることができないものやその時でないと食べられないものが、必ず何かあるわけでございます。そしてそういうものがある場所も決まってしまいます。そして一番大切なものは「その人」という部分であります。人というのはそれぞれ全員が違うわけであります。ですから「その人」に会いたいということで旅行にやって来る人が出てくれば、こんなに強いことはありません。あの人に会いたい、だから何回も通うということでリピーターが発生します。物だと同じ物が別の場所にあるかもしれません。しかし人の場合は、全くのオリジナルということになり

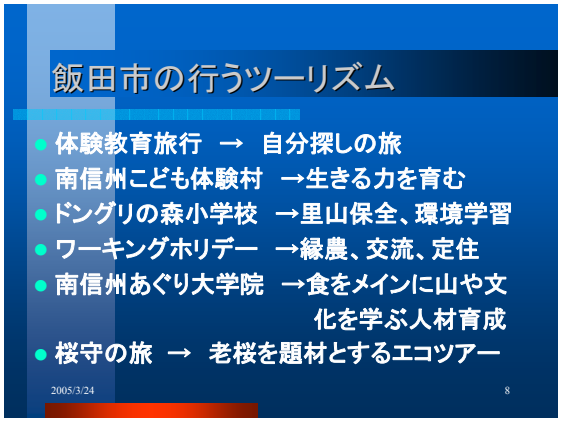
ます。ですからこの「ヒト」という部分が大事になってまいります。

それから「水、空気、食べ物」の生産現場を理解してもらおうということであります。ホンモノは来ないと食べることができない、東京では食べることができないということを理解してもらおうということであります。新鮮な食べ物そのものの味や周りの景観を来てもらって味わってもらおうということであります。高知にも吉野川の源流には良い水があると思いますが、こういうものをきちんと理解してもらうということを大事にしたわけであります。優しさや暖かさの中で交流を深める環境を作っていく。それから今の皆さんのライフスタイルのままで良いのですか？ということを問わなければいけません。そういうことを中心にやってきたわけです。

（スライド７）



（スライド８）

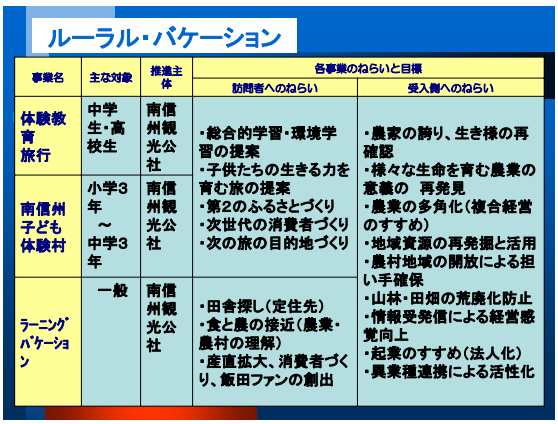


④飯田市が実施しているツーリズム

飯田市がやっているツーリズムにはいくつかあります。その一つが「体験教育旅行」で、これは中学生を対象に行われています。非常に多感な時期の中学生を中心に自分探しの旅を提案しております。それから「南信州子供体験村」というのがあります。これは小学生から中学生までを対象としておりますが、体験によって生きる力を育もうということでやっております。また「ドングリの森小学校」というものもあります。これは環境学習をやりましょうということであります。それから「ワーキングホリディ」は援農や交流、定住をやっていきましょうということであります。それから「南信州アグリ大学院」は山や里、農村の文化などいろいろなことを学んでもらい、その中で何か人材育成ができるのではないかと考えているわけであります。それから「桜守の旅」というのは、飯田や下伊那に 80 本くらいの桜の古木があります。この桜をエコツアーに採り入れております。

こういった各事業について、来てくれる人のことを考えてどういうふうにやっていくか、それから受け入れる人達にどう変わってもらいたいかを常に考えながら進めています。どちらの側にもメリットがあるようにと考えています。メリットといってもお金の面だけではなく、いろいろなメリットがあります。

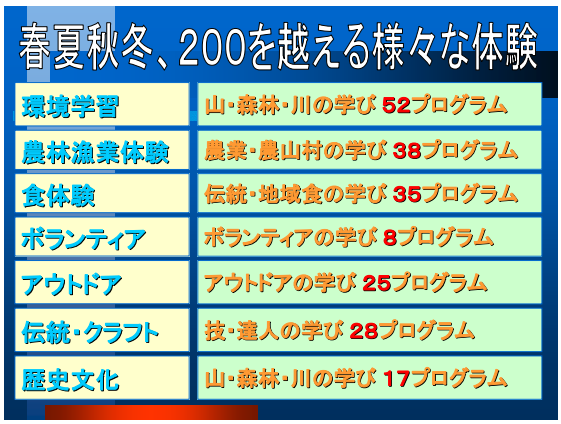
（スライド９）



ルーラル・バケーション

事業名	主な対象	推進主体	各事業のねらいと目標	
			訪問者へのねらい	受入側へのねらい
体験教育旅行	中学生・高校生	南信州観光公社	・総合的学習・環境学習の提案 ・子供たちの生きる力を育む旅の提案 ・第2のふるさとづくり ・次世代の消費者づくり ・次の旅の目的地づくり	・農家の誇り、生き様の再確認 ・様々な生命を育む農業の意義の　再発見 ・農業の多角化（複合経営のすすめ） ・地域資源の再発掘と活用 ・農村地域の開放による担い手確保 ・山林・田畑の荒廃化防止 ・情報受発信による経営感覚向上 ・起業のすすめ（法人化） ・異業種連携による活性化
南信州子ども体験村	小学3年～中学3年	南信州観光公社		
ラーニングバケーション	一般	南信州観光公社	・田舎探し（定住先） ・食と農の接近（農業・農村の理解） ・産直拡大、消費者づくり、飯田ファンの創出	

（スライド１０）



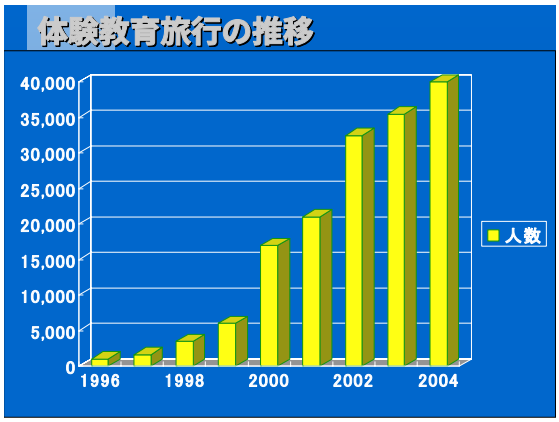
春夏秋冬、200を越える様々な体験

環境学習	山・森林・川の学び 52プログラム
農林漁業体験	農業・農山村の学び 38プログラム
食体験	伝統・地域食の学び 35プログラム
ボランティア	ボランティアの学び 8プログラム
アウトドア	アウトドアの学び 25プログラム
伝統・クラフト	技・達人の学び 28プログラム
歴史文化	山・森林・川の学び 17プログラム

この体験教育旅行には 200 を超えるプラグラムがあります。他の自治体にはこれほど多数のプログラムを持っているところはございません。しかしこれは別に自慢することでも何でもありません。こちらの町でもやろうと思えばできるはずであります。皆さんの町にもプログラムを作る素材はたくさんあるはずです。それをプログラムにできるかできないかは皆さんの力次第です。またプログラムがたくさんあるから良いというものでもありません。200 を超えるメニューがありますが、これらはいずれも体験旅行のためのツールです。これに関わる人がどう関わってくれるかという方が大事です。一番初めに言いましたように理念は「その人に学ぶ」ということであり、人と人が交流するということ、そして心と心の交流をするためにプログラムがあるということであります。「体験ができます」ということだけでは駄目なわけであります。どう交流するかということが大事になってくるわけで、あくまでも体験は体験に過ぎません。プログラムの数があれば良いとか、ウチにはこういうプログラムがあるということだけでは駄目だと言うことができます。

（スライド１１）

（スライド１２）



この写真（スライド 11）を見ていただけばお分かりになると思いますが、これは体験教育旅行であります。農村での体験旅行から沢登りまであります。沢登りは大小 20 余りの滝のある川を登っていきます。川を下るラフティングのプログラムがこちらにもあると思いますが、これは

結構危険なプログラムで、過去には人が死ぬ事故があったこともあります。それから囲炉裏を囲んでいる写真がありますが、これは自炊を体験してもらうプログラムです。小学生や中学生が中心のプログラムですが、ここで五感を震わせるような体験をしてもらうわけであります。それによって子供達が変わっていきます。来た時と帰る時とでは目の輝きが違います。特に農泊などをしますと、泣きながら別れるというシーンが毎日のように出てまいります。この体験教育旅行は1991 年から始めました。ですからそんなに昔からやっていたわけではありません。最初は年間たった3校が来てくれただけでしたが、2004年には100校を超え、110校くらいになっています。各プログラムへの延べ参加人数は4万人で、実数で表すと1万5千人くらいであります。
今後も参加人数が右肩上がりに増えていくかというとそうもいきません。最近の学力低下問題などで、ゆとり教育の見直しが行われています。ゆとり教育というのはマスコミが勝手につけた名前で、文部科学省はゆとり教育などとは一言も言っていない筈ですが、マスコミはゆとり教育の結果として学力低下が起こったと言っていますが、始めてから1年や2年で学力が低下するわけがありません。もっと別の所にその原因があります。マスコミにも学力を高めることが大事だという論調と体験が大事だという論調と2派あるようですが、それは文部科学省でも農水省でも同様のようで、両者が常に拮抗しています。大手マスコミも同様で本当の結果が出ないうちに一方を叩くということが行われているように思います。そういうことで今後は体験旅行にとって厳しい時代になってくると思います。学校の先生達は、はっきり言って能力がありませんから、学力重視になってくれれば、これでマニュアル通りにやれば良いという方向に動いていってしまうでしょう。総合学習の場合はマニュアルがありません。これをマニュアル化しようというような馬鹿なことを言っている人もいないわけではありませんが、体験学習にマニュアルはありません。マニュアルを自分たちで作っていくということはあっても、どこかにマニュアルがあってその通りにやれば良いというものではありません。現場々々によって中身は全部変わってくる訳であります。例えば、皆さんの中にもインストラクターをやっておられる方がいると思いますが、一年を通じて同じ体調でいることはできないと思います。その日その日によって体調が変わります。気分も変わります。そうするとそれによって時間が長く感じたり、短く感じたりします。来る人も、子供から大人まで、その時の気持ちによって変わります。ということは、それだけでプログラムも変わってしまうということなのです。それを理解していない体験教育旅行を引率してきた先生が次のようなクレームをつけました。その先生によると非常に飯田での体験は良かったが、どうしても納得できないことが一つだけある。それは体験時間が5分間延びたことだというのです。随分馬鹿なことを言っていると思います。体験学習は教室でやる授業とは異なります。天候の違いや自分たちの体調の違いもある中で、何時何分でぴたりと終了することが良いことなのでしょうか。皆さんお分かりでしょうが、決してそんな筈はありません。このような馬鹿な話がごろごろと転がっています。学校の先生達は一体何を考えているのかなということが、現場に入ってみると本当に良く分かります。

（スライド１３）

（スライド１４）

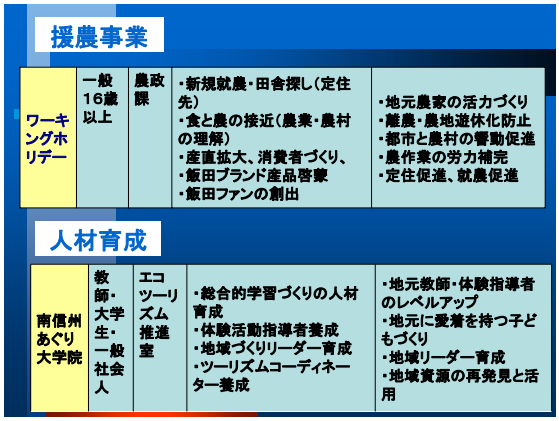
次に示しているのは「子供体験村」（スライド 13 参照）です。夏休みに長期滞在をしてもらうプログラムで、いろいろなことをしております。1 週間以上滞在してもらっていろいろなことを体験してもらうと、子供達は本当に変わります。スタッフは大変です。はっきり言って、言うことを聞かない子供達の親代わりになって、1 週間以上寝食を共にしていくと、ほとんどのスタッフは潰れてしまいます。最終的にはスタッフが一番成長するのですが、非常に辛い仕事です。大した儲けにもなりませんが、子供達が成長する姿を見てスタッフも救われます。来る子供達は、先程の体験教育旅行の場合は、引率の先生の下で一応統制されています。それに対して、子供体験村はそれぞれが全くバラバラに来ていますから、来ている場所も違います。スタッフが何日かの間に子供達をまとめ上げていくには大変な労力が必要です。また学校では見つからなかったいろいろな障害が体験村で見つかるということもあります。

そういう中で、子供を見ながら少しずつやっていくわけです。ウチでは毎日子供達にフィールドノートというものを書かせています。一つは体の絵を描いて、頭を使ったか、体を使ったか、口を使ったか、耳を使ったか、手を使ったか、足を使ったかというようなことを、毎晩反省しながら、その時々に自分が何を考えていたかを書いてもらうわけであります。それを毎日スタッフが深夜までかかって点検して読んで行くわけであります。ですから長期にわたってスタッフをしていると、人の健康にも留意しなくてはいけません。それから、必ず熱を出したり怪我をしたりする子供も出てまいります。毎年いろいろな子供達を預かりながら、いろいろな事件を起こしながら、やっております。幸い大きな事故などは起こっていませんが、いつもヒヤヒヤする思いをしております。例えば山登りをしていて、目の前に雷が落ちたこともございます。これで子供達に落雷したら俺たちはクビだなというような、かなり危険な中で体験村をやっているという部分もあります。

また、成人向けの冬場のプログラム（スライド 14）もあります。それからワーキングホリデイ（援農事業）という事業もございます。これまで観ていただいたものは、参加者からお金をいただいて体験をしてもらうプログラムですが、このワーキングホリディは、農家が忙しい時期にボランティアで手伝ってもらうということが基本です。それをきっかけにして飯田に住んでもら

ったり、新規就農してもらったりということも目指しています。今これに参加する人がどんどん増えています。それから「アグリ大学院」は、学校の先生達がろくな体験をしていないし何も知らないので、「総合的な学習の時間」が始まる前に、どうすれば「総合的な学習の時間」が作れるかということで行ったわけですが、実は１年でこれはできなくなりました。１年目は教師になりたい大学生をメインターゲットにしてこれを行いました。2 泊 3 日、年間 5 回のコースに 20 人が参加しました。その中に教師は 5 名おりました。このプログラムで、先生達は平日に出張旅費をもらわないと参加しないことが分かりました。このプログラムは土日にかけて行われますが、土日に自費で参加する先生はいませんでした。土日でも仲間内で自分たちの傷を嘗めあう勉強会は開きますが、外に出て自分で何かを掴み取って来ようということを一切しない先生が多いことが良く分かりました。そこで 2 年目からは対象を一般社会人にシフトして地域作りなどもやれるような内容に変えて行きましたが、このプログラムでは苦戦しています。17 年度からはまた少し方向を変えることにしています。これだけいろいろなノウハウを得たのですから、これを活かして企業の人材育成をしますという方向に持って行こうということで、来週、東京に出張し大手企業と打ち合わせをする予定になっています。これまでの経験からこのプログラムのネタは企業研修にも使えるということが分かってきたからであります。

（スライド１５）



援農事業

ワーキングホリデー	一般16歳以上	農政課	・新規就農・田舎探し（定住先） ・食と農の接近（農業・農村の理解） ・産直拡大、消費者づくり、 ・飯田ブランド産品啓蒙 ・飯田ファンの創出	・地元農家の活力づくり ・離農・農地遊休化防止 ・都市と農村の響動促進 ・農作業の労力補完 ・定住促進、就農促進

人材育成

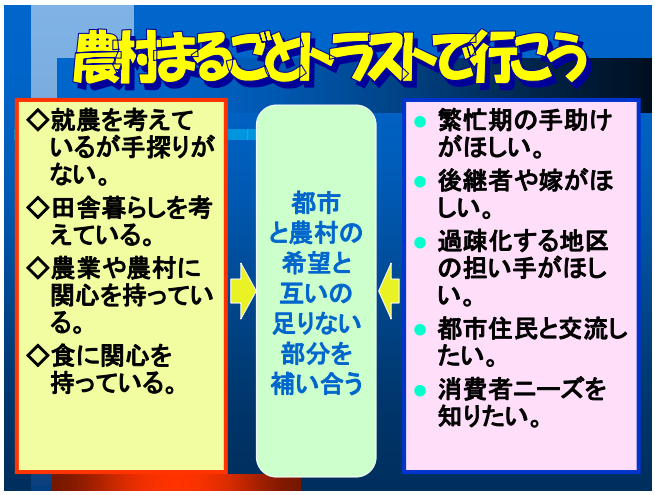
南信州あぐり大学院	教師・大学生・一般社会人	エコツーリズム推進室	・総合的学習づくりの人材育成 ・体験活動指導者養成 ・地域づくりリーダー育成 ・ツーリズムコーディネーター養成	・地元教師・体験指導者のレベルアップ ・地元に愛着を持つ子どもづくり ・地域リーダー育成 ・地域資源の再発見と活用

（スライド１６）

次にご覧いただくのがワーキングホリディです（スライド 16 参照）。これは市田柿という干し柿です。農協は「市田柿は干し柿の全国シェアの 70%を占めているので、これはブランド品だ。」と言っておりました。でも皆さん、市田柿という名前をご存じでしょうか。市田柿という干し柿を飯田市で作っていることなど誰も知りません。でも夕張メロンは誰でも知っています。JA は市田柿がブランドだと言っていましたが、何のブランドにもなっていないわけであります。都会の人は干し柿と言えば東北で作られるものというイメージしか持っていません。干し柿をそんなにたくさん作っていても、それを知ってもらわなければ何にもなりません。そこで干し柿を作っていることを都会の方に知ってもらうために、ワーキングホリディを始めた部分もあります。エンドユーザーに市田柿を知ってもらうという意図もあってこれを始めたわけでございます。農家の一番忙しい時に入ってもらいますので、今日はここに農家の方が何人おられるのか存じません

が、忙しい時に他人が入ってきたらかえって邪魔ではないかと普通は思うかもしれません。これを始めた時もそのように受け取られました。「そんな時期に他人を呼ぶなんて。第一タダで仕事をする人なんているのか。」という反応でした。それでも来れば引き受けてくれるという農家も何軒かあったので、始めることができました。「交通費も自己負担でタダ働きをしに来い」などと言っても、普通は誰も来ません。でもこういうことをやりたいというニーズが都会にはあったのです。私たちは最初、トラスト運動として、農村を丸ごとトラストしてしまおうと考えました。農村保全を都市の力を借りてやってしまおうということでございます。

（スライド１７）



私がこれを始めた時、既に阿蘇の「草原トラスト」や「草刈り十字軍」というものがあり、そういうものへ都会の人達がどんどんやって来ておりました。それならば手が足りなくて困っている農村へもやって来てくれるのではないかということでこれを始めたわけでございます。都市の人達の中には就農を考えている人がおります。飯田にも就農等にたくさん若い人達が来ておりましたから、こういう人達がいるということは分かっていました。それから田舎に住みたいということで相談に来た人もおりましたから、需要があることは分かっておりました。農村の方にも１年のうち１週間だけ働いてくれる人はいないだろうかと相談に来る方もいました。あるいは後継者が欲しいとかお嫁さんが欲しいという相談もございました。過疎化している地域としてはここに住んでもらえる人が欲しいとか、そういう相談も受けておりました。そこでこれらを結び付けたのが、ワーキングホリディというプログラムだったわけです。ですから都市と農村の希望を結びつけ、両者に足りないものを補い合うパートナーシップ事業として始めたのがこのワーキングホリディという事業でございました。

（スライド１８）

参加後の声（アンケートより）

- 始めてなのに本当に素朴で温かな田舎で家族の一員として心から扱ってくれた。
- ボランティアに行って、ボランティアされたみたい。
- 飯田に新しいお父さん、お母さんができた。
- 自分の祖父母といるような錯覚を覚えた。
- 両親から飯田市ならお嫁に行っても良いよと許しが出た。
- 農業に関する疑問など、夜遅くまで非常に丁寧に応えてくれた。どうしても農業をやりたい。
- 日常生活の中で、忘れていた思いや感謝の心を学んだ。
- 今は、自分の仕事の活力。時間に追われ、空や季節の変化もわからないビルの中で生活。昼ご飯と山々の景色が甦り、涙が出る。
- このままずっと、飯田にいたかった。
- 自分を見つめ直す良い機会となった。

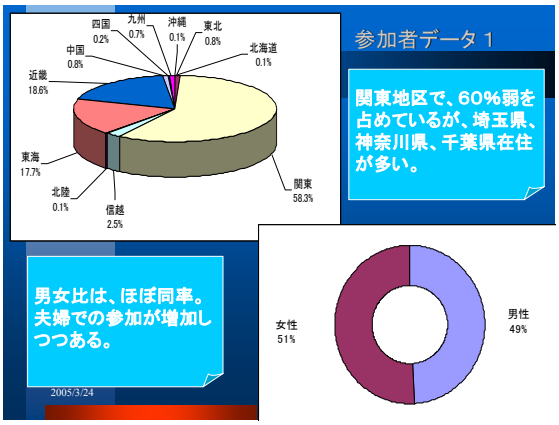
（スライド１９）

受入農家の反応

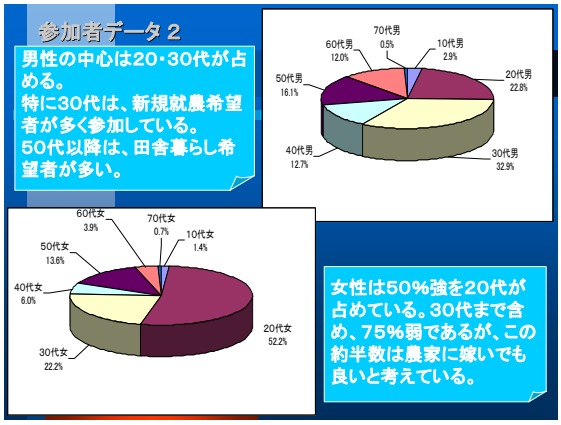
- これほど頑張って、仕事をしてくれて本当にありがたい。
- こんな良いことは、これからも継続して欲しい。
- 来年は離農しようと考えていたが、これなら来年も農業が続けられる。
- 自分の仕事が誇らしく、地域が素晴らしいと再認識。
- 飯田にはすごい資源があり、すごい人たちがたくさんいる。これを判ってくれる人をもっと増やしたい。
- 市役所がやる仕事で、はじめてありがたいと思った。役所を身近に感じた。
- 居ながらにして情報がやってくる。
- 隣からうちもやりたいと云われたから誘った。

皆さんのお手元にお配りした資料（スライド 18、19）を後でご覧になっていただきたいと思いますが、参加者の皆さんの感想として、「ボランティアに行ってボランティアを受けた感じ」とか「田舎暮らしができて嬉しかった」といったものもございました。中には「田舎に嫁に行っても良い」という両親の許可を貰ってきたという女性もいました。いずれにせよ、飯田を印象づけるのにとても良い事業になりました。逆に受け入れ農家の反応はどうかと言いますと、「本当に頑張って仕事をしてくれている」という反応がございました。「自分の仕事というのは凄いことなんだ」と改めて自分の仕事に誇りを持ったという農家の人達もどんどん出てまいりました。私は行政の職員ですが、一番嬉しかったのは、「市役所のやることで初めて有り難いと思った。」という感想であります。「道路や建物を作ってくれるというのは当たり前のことで、別に有り難いとも何とも思っていなかったが、この事業については、本当に市役所は良いことをやった。本当に有り難いと思った。」という感想をいただきましたが、私にとってこれほど有り難い言葉はございません。

（スライド２０）



（スライド２１）



次のデータ（スライド 20、21）を観ていただきます。これはワーキングホリディ参加者のデータです。参加者は北海道から沖縄まで分布しています。北海道や沖縄の方は飛行機を利用してやって来ます。何万円も交通費をかけて飯田市までタダ働きにやって来てくれているわけであり

ます。全体の 0.8%ですからちょっと少ないですが、四国からも来てくれています。私も飯田からここまで来るのに随分時間がかかりましたが、こんなに時間をかけて来てくれているのだということが良く分かりました。一番多いのは関東からの方で、それが中心になっていますが、関東といいましても山手線の内側からの参加者はおりません。山手線の外側の人達です。これらの人がどういう人達かと申しますと、昔から住んでいたのではなく、どこか田舎から東京へやって来て埼玉や千葉、神奈川などに住み着いた人達です。こういう人達が参加してくるわけです。その人達は農業をやっているわけではないので、農業をやってみようということで来るわけですから分かるのですが、そうではなくて北陸、近畿、四国、九州など、近くで農業をやっているような地域からも参加者が来るわけです。これらの人に訊いてみると、近くで受け入れてくれるところがないのだそうです。

男女別でみると、どちらも同じくらいの参加者がおり、バランスが取れています。一番面白いデータとしては、男性参加者は 20 代、30 代の方が非常に多く、農業や田舎に非常に関心を持っているようです。50 代以降の方は団塊の世代と言われていますが、これらの方は終の棲家として都会は嫌だ、農村に住みたいということで、夫婦でやってこられる方が多いです。30 代の方はほとんどが新規就農希望者です。大体学校を出て務めに出て 10 年くらいして、今の仕事が一生の仕事として良いのだろうかと考え始めるのが 30 代前半の頃です。そして転職を考える人が出てきますが、そのときに一番先に頭に浮かぶのが農林漁業のようです。他の同様の仕事に転職しようというのではなく、仕事の内容を全く違うものに変えてしまおうと考える人が多いわけです。女性の場合は 20 代が圧倒的に多く、30 代まで入れると全体の 75%をこれら若い女性達が占めています。このうち約半分は農家に嫁に行っても良いと言う方達です。私どもは別に農家のお嫁さん捜しのためにこれをやっているわけではありません。ワーキングホリディの期間中に「ねるとんパーティ」を開く等といったことは一切やりません。あくまで援農を目的にやっているわけです。実はこれら 20 代、30 代の女性は農業をやりたいと思っているのです。しかし新規就農したいのだが自分一人では無理だろうと判断しているわけであります。これに対して男性の場合は自分一人で農業ができると思っています。そこで女性達は一番良い方法として農家の嫁に入ってしまえばすぐ農業ができるということで、打算的と言ってしまうと語弊がありますが、農業をやりたいという気持ちをそういう方法で何とかしようと考えている女性達がいるわけであります。

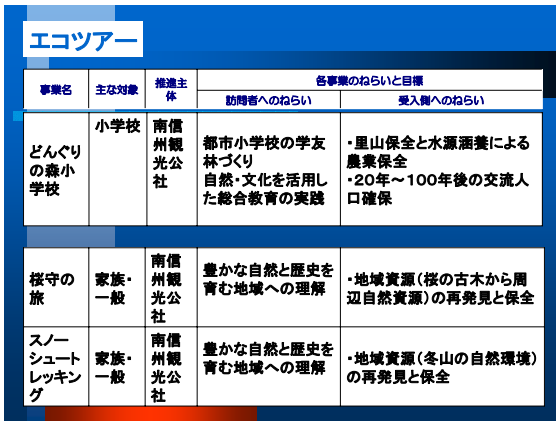
これを見た時、日本の農業の抱えている問題として担い手がいないと言われています。しかし担い手は山ほどいます。嫁さんがいない。どこがいないのですか。山ほどいます。ですから問題は、これほど希望する人がいるにも関わらず、それを受け入れる体制ができていないということであります。データで見る限り来たい人は一杯いるわけであります。でもどうやって受け入れたら良いのでしょうか。「俺の家には入れたくない」ということになってくるわけです。50 代になると女性参加者は少なく、男性の方が多くなります。一番良くないのは、「あなただけで行きなさいよ」ということで男性が一人で参加するパターンです。50 代の女性の場合は逆に都会指向

が強く、「誰があんな不便な所へ」という感じで、友達もいないしお洒落もできないというのが今の 50 代の女性の意識で、どうしても田舎で暮らしたいという男性は、別居あるいは離婚するというパターンになってしまうわけで、団塊の世代の男性達は大変だと思います。一生懸命働いた結果が、「あんた勝手に行きなさいよ」で放り出されてしまうというのが、近頃の現実のようであります。

皆さんお分かりだと思いますが、農業は一人ではやれません。最低夫婦揃っていて初めてちゃんと農業ができるのです。一人でやるとかなり効率が悪くなります。ですから飯田市でも新規就農を受け入れる場合には、最低 2 人というのが原則です。大体毎年 5 組くらいは新規就農が入ります。それは誰でも良いということではなく、飯田が好きになってくれた人しか入れません。就農を認めるまでに 1 年以上時間をかけます。何回も飯田に通ってもらい、地域の人と馴染みになってもらって、それからようやくあそこなら農地が空いているとかあそこなら空き家があるという紹介をしながら、新規就農を進めていきます。全国各地で新規就農や空き家の紹介が行われています。新規就農については、「ハウスを建ててそれをタダで差し上げます。これをすると 1 年で幾ら儲かります。」という形で進めているところがよくありました。しかし実態はそれでは食えなくて一家心中したとかいう話を昔よく聞きました。お金で定住してもらおうという方法ではうまく行きません。ですから飯田市では金銭的な支援は一切行っていません。その代わり就農後に職員がアフターケアで回ります。経済的な支援はしませんがどうしてもやりたいならおいでというのが飯田市の方針であります。それは嫌になったら直ぐに逃げてしまおうというような考えの人は最初から入れない方が良いと思っているからです。

（スライド２２）

（スライド２３）



エコツアー

事業名	主な対象	推進主体	各事業のねらいと目標	
			訪問者へのねらい	受入側へのねらい
どんぐりの森小学校	小学校	南信州観光公社	都市小学校の学友林づくり 自然･文化を活用した総合教育の実践	･里山保全と水源涵養による農業保全 ･20年～100年後の交流人口確保
桜守の旅	家族･一般	南信州観光公社	豊かな自然と歴史を育む地域への理解	･地域資源（桜の古木から周辺自然資源）の再発見と保全
スノーシュートレッキング	家族･一般	南信州観光公社	豊かな自然と歴史を育む地域への理解	･地域資源（冬山の自然環境）の再発見と保全

今ご覧いただいている（スライド 22 参照）のは「アグリ大学院」です。これはいろいろなことをやっています。この人達はここの卒業生です。この人達が飯田に勝手に来ていろいろなことをしています。私たちが企画を立ててそれをやってもらうというようなことはしません。勝手に卒業生達がやって来て農家の人達と一緒にいろいろな体験をしています。ですから 1 年間通ってもらうことで、一生縁続きになってもらうということが、このアグリ大学院の方向です。その他、「ドングリの森」「桜守の旅」「スノーシュー・トレッキング」といったエコツアーもやっており

ます。

これはドングリの森（スライド 24 参照）ですが、東京の小学校の生徒たちに都市の学校の学校林を作りましょうということで行われています。良い作物を作るには良い水が必要で、良い水を作るには良い山がなければならないということで、まず山作りから始めようということで始めました。この授業では民有地の山をお借りして学校林にしております。そしてそれに地元の人が関わってドングリの木を植え、ドングリの木を使っていろいろなことを体験してもらうということをやっています。山に木を植えて 20 年くらいすると木炭を作ることができるようになります。そして木炭用に木を伐採してその後でまた植樹をしていけば、20 年くらいのサイクルで更新が繰り返されて良い山を維持してゆくことができるわけです。小学生がせっかく作った山を放っておくわけにはいきませんから、普段の手入れは地元の人が一生懸命やってくれています。子供達が拾ったドングリは持ち帰って苗を作ってもらいます。小学校の 6 年生が毎年 10 月に来てドングリを拾って帰ります。そして 3 月の卒業式の日にドングリの実を 5 年生に手渡します。そして新 6 年生がドングリを 10 月まで育てて、ここへ持って来て植えるわけであります。ですから余所から持ってきたドングリを植えているのではなく、飯田のドングリが循環しているわけであります。したがって生態系の中に元々あった木です。こういうのも一つのエコツアーとして考えられるのではないかと思います。

（スライド２４）

（スライド２５）

次に「桜守の旅」（スライド 25 参照）ですが、老木や巨木ばかりです。しかし非常に枝振りの良い木が沢山あります。どれも何百年も経っている木ばかりですから、状態を保つためには手入れをする必要があります。そこでこの桜を守り、歴史を語り、案内をする「桜守」というわけですが、普段はボランティアでこの桜を守るために作業をしてもらっています。今まで桜の花見といえば、木の下で宴会をするだけですが、こういう枝振りの木の場合は、こういう所を踏み締めては駄目ですよといった環境学習をするわけであります。環境保全をするための活動そのものをツアー化したわけであります。この桜の木は民有地にあるものばかりで、それをこの時期だけお借りしてツアーを行うわけであります。桜の保全を第一に考えておりますが、まだいろいろな課題がございます。それを少しずつ修正していかなければならないと思っております。

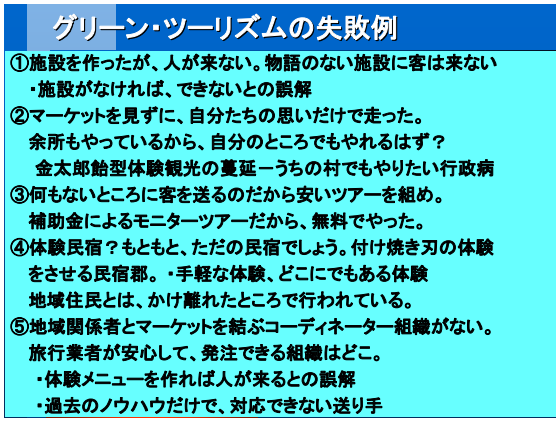
次にお話しするのは、グリーンツーリズムの失敗例（スライド 26 参照）です。一つは施設を作ったけれども人が来ませんでした。来るわけがないのです。作ったからといって直ぐ人が来るなどということはありません。施設がなければグリーンツーリズムはできないかというと、決してそんなことはありません。飯田市にはグリーンツーリズムのために作られた施設はありません。元からあった施設を活用しているだけに過ぎません。でも人は来ます。それは施設にストーリー性を持たせているからです。失敗した事例を見ていると、利用するお客様のことをちゃんと見ていません。自分たちにはこういうものがある、こういう施設があるということだけしか考えていません。しかし成功させるためにはマーケットをちゃんと見ていなければいけません。自分たちがこうすれば地域が活性化するだろうという思いだけでやっても駄目です。その点はやはり冷静に考えなければいけません。よくあるのは、余所でもやっているからウチでもやってみようという考え方です。行政はどうしてもそういう考えになりがちです。隣の町でもやっているからウチでもやりたい、では上手く行きません。各地域の独自性というものがあるわけですから、それをいかに活かしてやるかが大切です。それを考えないから金太郎飴型の体験観光が蔓延してしまうのです。それからモニターツアーというものが行われますが、モニターだからタダでよいとかモニターだから安くするとか、あるいは行政や国からお金が出るから安くできましたということでしょうが、いつまでもお金が出るわけではありません。継続して実施しなければ意味がありません。継続させていくためには正当な料金を取り、それに対して自分たちが提供したものがどう評価されるかを見るのがモニターです。そうではないと「タダだから良かったね。」になってしまいます。料金を安くすると「農村にはこんなに安く来られるのだ」と勘違いされてしまう恐れがあります。ですから、そういうモニターツアーは絶対にやるべきではありません。そういうのはモニターツアーではありません。この点をどうか勘違いしないようにしていただきたいと思います。

それから「体験民宿」ですが、これはあちこちで行われていますが、元々民宿だった所は、それが農村であれ漁村であれ、農家だった時期があるかもしれませんが、いつの間にか民宿を生業にしてしまっているところもあるわけです。実は 6 年くらい前に、農水省が民宿やペンションを体験民宿と称してやらせたのがそもそも間違いの元だったと思います。そういうことで失敗しております。民宿だけでは体験民宿とは呼べないものですから、一反にも満たない面積の田圃を借りて、「ウチでは田植えが経験できます」ということで宣伝をしますと、沢山お客さんが来ます。すると一反もない田圃は一回の田植えで終わってしまいます。そこでお客さんが帰ったら、トラクターでその田圃をもう一回起こし、新しいお客さんにまた田植えをさせるわけです。一つの田圃で何回も田植えをするわけです。これでは困ります。グリーンツーリズムの基本的な部分を忘れていると思います。やはり民宿がこれを始めたことがいけなかったと思います。農業・農村振興がグリーンツーリズムですから、農業や農村を理解してもらわなくてはなりません。その部分を忘れて、金儲けでだけやっていたからおかしなことになったのだと思います。

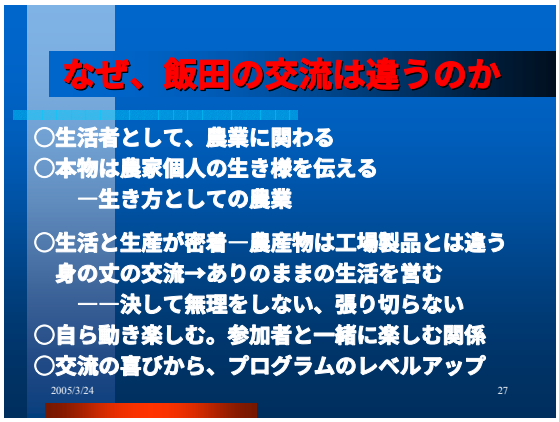
それから 5 番目として、地域の関係者とマーケットを結ぶコーディネート組織がないことが致

命的です。地域の関係者は物を持っていながらどうすれば良いか、どのように情報発信をして行けば良いのか分からない。旅行業者も誰それさんのところがやっている炭焼き体験旅行など分かるわけがありません。両者を結ぶいわゆるランドオペレーターないといけないわけです。飯田市はランドオペレーターとして南信州観光公社という組織を作ったのですが、そうしたものがないと旅行業者と対等に話をすることができません。旅行業者も受け入れ組織が明確なら、そこに発注すれば全てを手配してくれますから、安心してお客さんを送り込んでくれます。ですからシステムをきちんと整えないとなかなかお客さんは来てくれません。自分たちだけで売ろうなどという考えは決してしないで下さい。旅行業者の方達と信頼関係を作っていく中で地域振興を図るということを是非考えて下さい。今のところ旅行業者もまだこういうところへお客さんを送り込むノウハウを持っていないところが少なくありませんから、旅行業者の方も高めてもらわないといけませんが、それはともかく、皆さんがどう自分の地域を高めていくかを是非やってもらいたいと思います。

（スライド２６）



（スライド２７）



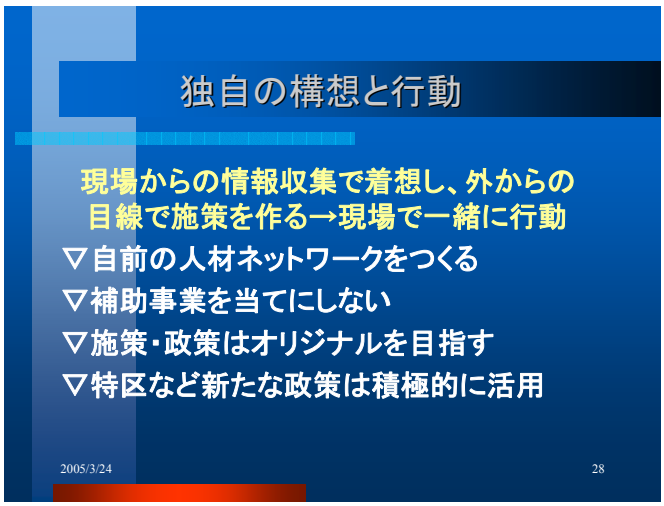
⑤飯田と他との違い

飯田の体験は、余所とどこが違うのかとよく訊かれます。自分たちのやっていることは暮らしに根付いています。ですから最初に申し上げたように本物を志向しています。生活に根付いている部分で体験活動や交流を行っています。そういうところから来た人に「ああ、これは本物なのだ」ということに気が付いてもらっているわけでございます。それから無理をしないで、身の丈の、ありのままの交流を行っています。頑張ろう等とは思わないようにしています。しかし農家の方にそう言って、「俺は頑張ってやっているんだ」と怒られたことがあります。しかし余り無理をしてしまうと継続できないのです。疲れたと思ったらもうやるのが嫌になります。ですからここにも書いてありますが、参加者と一緒に自らも動き楽しむような関係を作る必要があります。自分が楽しくないのに来た人にやらせて、その人が楽しいわけがありません。自分がウキウキしながらやっている体験だからこそ、やって来た人も面白そうだと思って参加するわけであります。ですから、そういうプログラム作りをしていかなければいけません。受け入れてくれる飯田の農

家の人達は８割が専業農家です。ですから１年を通じて非常に忙しく農業をやっています。その人達の誰も、この事業で幾ら儲かったなどということを言いません。何を言っているかというと、「俺たちがやらないと日本の農業が駄目になる」と言ってくれています。そういう気持ちで受け入れているので、今日は何人来て幾ら儲かったなどとは絶対いいませんし、来てくれた人も受け入れ側がどういう気持ちで受け入れているかを見透かしています。そこで本物か本物でないかの差が出るわけでございます。結果として地域活性化、地域振興にはなります。しかし受け入れをする時の気持ちを間違えてしまうと、その後「あそこは・・・」というふうに絶対に見られてしまいます。本物だと思ってもらうことは難しいです。難しいですが、是非そういうふうに考えていただきたいと思います。

⑥むすび

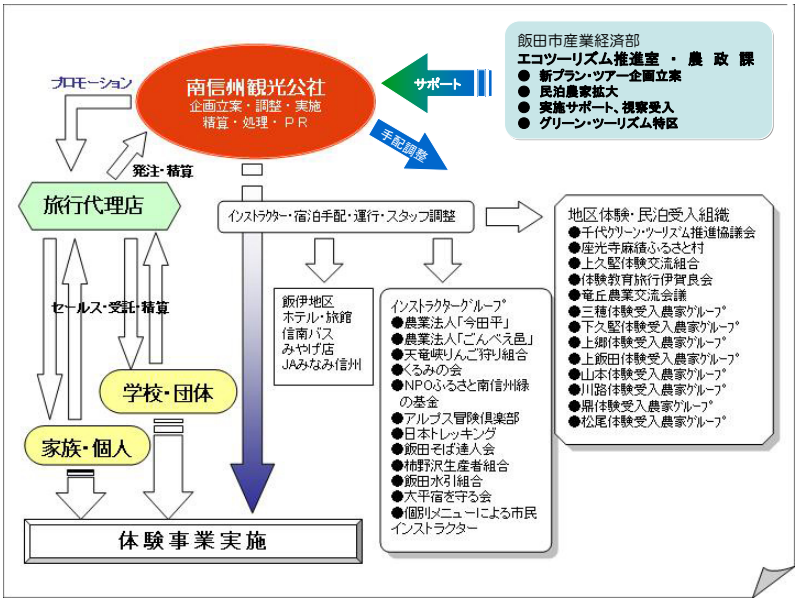
（スライド２８）



お話しをする時間がそろそろ終わりに近づいてきました。最後に私自身がこれまでどういう考え方でやってきたかをお話ししたいと思います。やはり地域の人達といかに話をするかです。その中で情報収集しながらどうすれば良いだろうという外からの目線で施策を練ってきました。そして施策を作るだけでなく、それを実施する際、現場では地域と協力しながらやっていくということであります。これは地域の人達と私との間の信頼関係を作っていく中で、特に農家泊のように外来者を個人の家に入れる場合には、私が保証人のようなものになります。「飯田市の井上がこの人を泊めてくれと言っているのだから、ウチに泊めてあげよう。」という関係で農家泊が段々増えていったのです。これは私だけではなく私のスタッフ達もそれぞれが農家の中に入っていって信頼関係を醸成していきました。そしてその範囲を飯田市だけでなく外側の下伊那にまで拡げています。最初は私たちのスタッフが市外にまで足を伸ばして、農家の方を説き伏せていきました。すると周辺の町や村の職員から「なんで飯田の職員が外部にやってきて話をしているのだ」とお叱りをうけました。そこでそういうことは止めましたが、良いことだったらどんどん拡げて

いって良いのではないでしょうか。行政同士の話し合いになるとなかなか上手く行きません。来てくれる人には行政界など存在しません。来てくれる人は良いところに行きたいと考えています。そういう考え方で拡げられるところはどんどん拡げていこうということでこれまでやってまいりました。現在農家泊ができるところが 500 軒あります。これは大きいですよ。一泊につき 1 軒最大で 4 人くらいですから下手なホテルよりも大きな収容能力があります。ホテルだと一旦作ってしまうと収容能力は決まってしまいますが、農家泊の場合は、受け入れ農家を市外にもどんどん拡げていけば限界がないのです。しかも受け入れ母体がどんどん広がっていくわけです。その効果を考えて下さい。それを実現するためには行政の枠を取っ払って行かなければいけません。この点については明日の意見交換の中でも話し合っていきたいと思います。それから外部の人材、内部の人材とのネットワークをどんどん拡げながらこの仕事をやってきました。それから補助事業を当てにしないでやってきました。私どもがやり始めてから、農水省が補助事業としていろいろな施策を始めたようですが、補助事業を待っていては遅いのです。苦しくても単独でやらなければいけません。そんなにお金をかけなくてもできるのです。これを始めた当初でも一つの事業に 1000 万円ものお金をかけたことはございません。職員が動くことで施策を行ったわけで、せいぜいパンフレット代くらいしか使っていません。ですから 100 万、200 万の世界なのです。それでも体験教育旅行では年間 3 億 5 千万円くらいのお金が飯田や下伊那に落ちていますから、費用対効果は非常に高いです。そういうことをやっていかなければいけません。オリジナルな施策を実行し、特区など新しいものをどんどん採り入れてやって来ました。

（スライド２９）



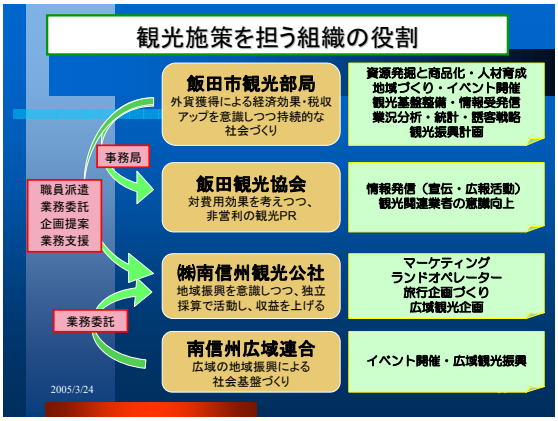
ここで先程申し上げた南信州観光公社についてご説明致します（スライド 29 参照）。観光公社自体は、企画立案、調整、実施、精算処理、そして PR を行っています。これをご覧いただけばお分かりになると思いますが、まず旅行会社とのやりとりがあります。そして発注を受けてから地元との調整が行われ、お金の精算まで観光公社が行います。飯田市は、こういうものをやった

らどうか、このようにやったらどうかというように、最初はこちらできっかけ作りをしながら新しいプランを進めています。そして採算が取れそうだと判断した段階で、それを公社に移管していくわけであります。それから公社の職員だけでは、一日に 5、6 校の生徒がやって来ますと、大型バス 10 台以上になり、いくつもの体験学習を同時に開かなければなりません。そのための車の手配もしなければなりませんから、公社の職員だけでは手が足りません。そこで飯田市の職員が公社をサポートします。隣の村であろうと市内であろうと飯田市の職員が連れて行きます。そのようにして事業を進めているわけでございます。公社の主な収入は手数料収入です。これで何とか生計を立てています。大した額の手数料は取っていませんのでギリギリの状態でやっています。

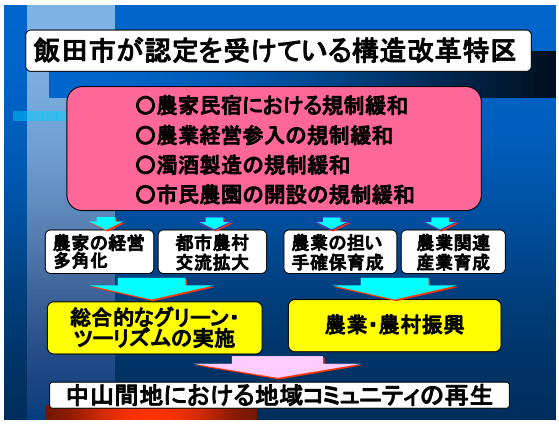
それから組織は役割分担をしていなければなりません。図の一番上が飯田市の観光関連部局であるエコツーリズム推進室です。これが 4 月 1 日から実は観光課になります。次は「外貨獲得による経済効果」ですが、税収アップを意識しながら持続的な社会作りを考えていくのが行政の考えている方向です。あちこちの自治体に観光協会というものがありますが、飯田の観光協会に何をやってもらっているかと言いますと、これは費用をかけても儲からないと思われることを観光協会にやってもらっています。事務局の仕事は飯田市がやっており、非営利の観光 PR を観光協会にやってもらっています。それから観光公社は完全独立の株式会社にしております。ここには市から出向の職員を張り付け、市から業務委託等をするなどして支援しております。公社の役割は「地域振興を意識しつつ独立採算で収益を上げる」ことであります。株式会社ですから収益を上げることは当然だと考えております。

さらに広域観光という考え方がございまして、飯田市は南信州広域連合に属しておりますが、これは飯田を含む周辺の 18 市町村からなっております。南信州観光公社は広域的な事業活動をしておりますので、広域連合にも業務委託をしてもらうようにしています。事業については、ここに示してあるようなことを考えておりまして、観光公社はマーケティングあるいはランドオペレーターとしての活動が中心になっています。これに対して観光協会は情報発信と地元の意識向上が活動の中心です。そして飯田市は新しい観光資源の発掘、人材育成、地域づくり、さらには情報受発信や分析、戦略の立案などを行っており、それぞれが異なった役割を担うことで棲み分けを行っています。それでも若干は重なる部分がありますが、それは互いの連繋を密にして調整しているわけでございます。

（スライド３０）

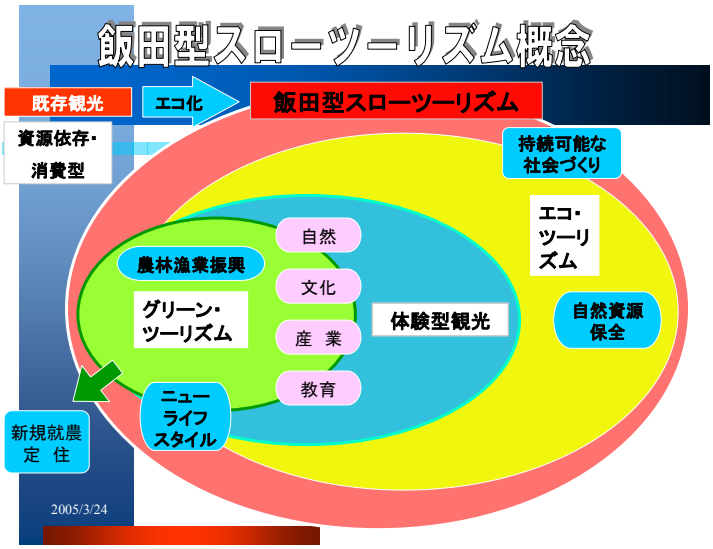


（スライド３１）



それから飯田市は４つの構造改革特区の認定を受けています。その一つが南信州グリーンツーリズム特区ですが、実際は農家民宿に対する規制緩和、それから株式会社の農業参入です。「濁酒」と書いてあるのは「どぶろく」です。それから「市民農園」、こういうものに対する規制緩和を図りながら、中山間地域のコミュニティー再生に向けて取り組んでいるわけでございます。最後に飯田型の「スローツーリズム」についてお話しします。私は飯田のツーリズムは「グリーン」でも「エコ」でもない「スローツーリズム」であるとこれまで言い続けてきました。グリーンツーリズムは農業・農村振興です。体験型観光というのはそれよりももっと大枠になります。エコツーリズムの場合は、さらに持続的な社会作りや自然資源の保全という考え方が加わります。これに対して「飯田型」は、既存観光もエコ化し、新規定住や営農も含めて考えようということでございます。商業にも教育にも福祉にも影響を与えるのが、実は新しいツーリズムになると私どもは考えているわけでございます。

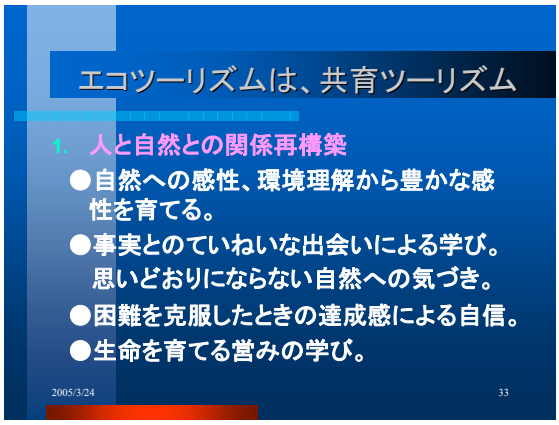
（スライド３２）



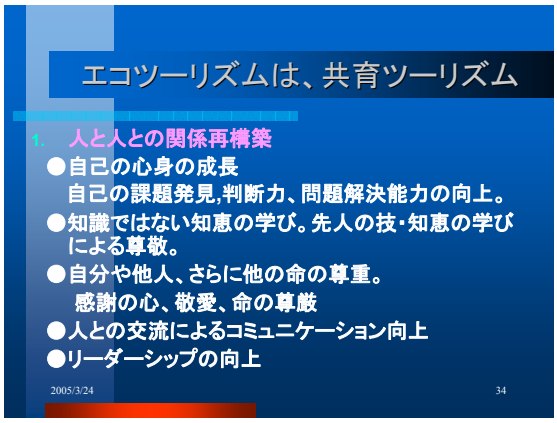
以上で私の話を終わりにしたいと思いますが、本日お話ししなかった「共育ツーリズム」等につきましては、配布資料（スライド 33、34）に書いてある通りでございますので、後程ご覧い

ただきたいと思います。ありがとうございました。

（スライド３３）



（スライド３４）



質疑応答

Q. エージェントと住民の間に入るコーディネーターを作るところで悩んでいるわけですが、飯田の南信州観光公社には飯田市の職員が派遣されているそうだが、それ以外に公社に直接雇われてスタッフとして企画立案等に携わる人材の育成をされているのでしょうか。それから、公社の組織構成はどうなっているのでしょうか。

A. 現在、社長は地元バス会社の OB が務めています。支配人は元大手旅行会社の社員で、この方をその旅行会社から引き抜きました。支配人には送り出しと受け入れの両方のノウハウを持った人材を充てました。市からは出向という形を取るとなかなか難しいものですから、市に在籍したまま公社担当ということで公社の仕事をやってもらっております。それから現在は県から職員を 1 名公社に派遣してもらっております。さらに JA から 1 名派遣してもらっております。また長崎から研修生が 1 名来ておりますが、その人はホテル経営者の息子さんです。それから公社のプロパーの職員を 1 名雇っております。さらに臨時社員が 1 名おります。以上が現在の観光公社の社員構成でございます。

Q. ワーキングホリディですが、通常は働きに来てくれた人に 1 時間幾らという形で時間給を支払うと思いますが、飯田市ではそういう形態を採らず、敢えて無報酬にしているとのことですが、食事代なども参加者が支払うのでしょうか。飯田市としては何らかの対価を参加者に支払うということはないのでしょうか。

A. ボランティアということが基本です。ですから受け入れ側もボランティアの気持ちで受け入れ、来てくれる方にもボランティアの気持ちで参加してもらいます。農作業を手伝ってもらうという労力と農家が家に泊めて食事を出すことを等価交換するという考え方でやっております。

Q. 私の本山町でも高齢化が進んでおり、高齢者の比率が 33%になっています。南信州でも高齢

化が進行していると思いますが、エコツーリズム等に関わっている方で最高齢者は何歳でしょうか。それから戸数にして何戸くらいが参加しているのでしょうか。また若者のどれくらいの方がやっているのか教えていただけるでしょうか。

A. まず年齢ですが、18 歳くらいの男性や女性も参加しています。特にラフティングのようなものは若い人が関わっています。それから上は 90 歳くらいの方もやっています。戸数ですが、先程受け入れ農家が 500 戸と申し上げましたが、これは農業体験部門で 500 戸ということです。その他にプラグラムが 200 ありますから、人にして約 2000 名の方が市民インストラクターとして関わっております。他に本業を持っている方が飯田のツーリズムを支えています。専門にやっている方もおります。これをやっている中でラフティングの会社を始めた方がおられます。その方はこれが本業になりました。それ以外は皆、他に本業を持っている市民インストラクターです。ですから本業そのものが体験プログラムになっているわけです。

Q. 資料の中で謙遜されて書いているのでしょうが「馬鹿な職員」と「危機感を持った市民」の方がいて、その方々の中から盛り上がっていったと書かれていますが、そのように多くの人を巻き込んでいった仕組み作りはどのように行われていったのかを教えていただけないでしょうか。

A. こういう事業をやるために敢えて巻き込んでいったわけではありません。地域作りを長い間やって来ましたが、その中で都市と農村の交流やその他いろいろなことをやりたいと思っている人をピックアップして、やってみましょうということで始めてきました。始めたところは、一番の過疎地域で振興策が最も必要とされている地域でした。出発点としては地域作りでした。地域作りというベースがある中で、ツーリズムという事業をその上に乗っけているだけなのです。こうやったらどうかと投げかけるとすぐに反応が返ってくるような状態が既にできているわけです。ですから何か新しいことを始めたいと思ったら、地域のリーダーにこういうことをやってみたらどうかと投げ掛けると、すぐにリーダーが地域の意見を集約して、行政の方に持ってきます。そういう信頼関係ができあがっています。地域リーダーの見つけ、地域リーダー育成を長い間やってきました。ですからこの事業が始まったのは平成 8 年ですが、それ以前から長い間、自分達の地域のことは自分達で考えましょうということで、集落複合経営ということで、課題を自分達で見つけ、解決策を自分達で発見し、お金を出して解決しようということをずっとやってきました。そしてこの部分までは自分達でするから、それから先は行政にやって欲しいということで行政が関わります。地域住民に実現の方法、解決策を自分たちで考えてもらい、優先順位を付けてもらっています。それを実践する際には、費用の 2 分の 1 以内、20 万円を上限として助成金を差し上げています。ですから 40 万円の費用がかかる場合には行政が 20 万円、残りは地元負担ということになります。最初に自分たちで考えようという意識があるから、こういう事業もできたのだと思います。

Q. 最初に地域作りが大事だと言われましたが、エコツーリズムを始める前から地域作りをされ

ていたのでしょうか。
A. 最初に地域作りありきなのです。エコツーリズムやグリーンツーリズムはその上に乗っかっているだけだということです。先程申し上げた集落複合経営というのは平成元年から始めておりまして、そのときには地域マネージメントという言い方をしておりました。政府が「食料・農業・農村基本計画」という新しい農業基本法をつくりましたが、そのとき始めて「地域マネージメント」という考え方が出されました。農村の方だけが農業を考えるのではなく、消費者まで含めて地域に住んでいる全ての人が農村について考えましょうということになりましたが、飯田市では政府がそういうことを言い出すずっと前から地域マネージメントを実践し、地域に住んでいる人が自分たちのことを考えましょうということをやって来ました。そこで女性のグループ作り、人作りなどをやってきました。そういう積み上げが既にあったということです。

Q. 私も持論として人と人とが交流することで地域が振興するという考えを持っています。元々消費者の立場からそういう考え方をしていたのですが、本山町でも JA が中心になって野菜の直売所の設置や生産加工グループの組織化などが行われ、行政も支援してくれていますが、飯田市でもそうした動きがあるのでしょうか。あれば教えていただきたい。
A. 地域マネージメント活動で作り出してきた生産加工グループが飯田にもございます。特に最初はモデル集落作りを 3 年ほど行ったのですが、次にグループづくりということで女性グループから始まっていろいろなグループを育成してきました。例えば直売所ですが、こちらでも作られていると思いますが、作る際にまず自分の口座を設けて、直売所に持って行く場合には誰のものを持って行って、売れた分だけ自分の口座にお金を入れるということにしました。それによって意識が違ってきます。ですから家族のそれぞれが自分の口座を持ちましょうということを最初に言いました。初めて直売所に野菜を持ってくる人で口座のない人には必ず口座を作ってもらいました。あるいは女性達が生産加工グループを作ったのだがお金がないので農協からお金を借りなくてはならない。それには保証人が要ります。そこで実印を作りましょうというアドバイスをしました。これまで女性達は実印を持っていませんでした。実印を作ってもらうことで、自分の責任でお金を借りるという意識を作ってもらったわけです。このような具体的な提案を一つ一つ提案してきました。

直売所を作るに当たってはマーケットがどうなっているかを見なければいけません。直売所を作るに当たっては、その周辺 1 ㎞圏内、2 ㎞圏内に人がどれくらい住んでいるかを調べる必要があります。地元の人に愛されない直売所は潰れます。地元の人達がいつも通ってくれる直売所にしなくてはなりません。外から来るお客さんを狙っていても、これは不特定多数で、来る時もあれば来ない時もあります。やはり毎日通ってくれる地元のお客さんが必要です。毎日来てもらうためには何か魅力がないといけません。行けば必ず何か面白いものがあるね、発見があるねという魅力作りをしなければいけません。地元の人で賑わっていれば、何があるのだろうということで外から来た人も寄ってきます。一軒あるいは数軒の農家ではなかなかそれはできません。私は

その直売所の規模を見ていませんが、規模によって何人の生産者がいるかが分かります。最低でも毎日野菜を出してくれる人を 5 人確保して下さい。あとは、週に 1 回、一月に数回出してくれる人を 100 人くらい確保して下さい。そうすると物が豊富になります。少数の人で沢山作るのは難しいですから、いろいろな人に出してもらうようにして下さい。農産物でも加工品でも良いですから地元の物を豊富に揃えて下さい。よくあるのですが、品数を増やすために、今の時期はウチにはこれがないからと言って余所から持ってきて売っている直売所がありますが、これは駄目です。これでは直売所ではありません。直売所ならもっと地元にこだわらなくてはいけません。そのこだわりが魅力になります。是非そうして下さい。

（講演会終了）

第３章　四国におけるエコツーリズムの方向性

３－１．エコツーリズム実施支援地域の選定

四国観光の現状からは、従来の見物型観光から体験型観光への転換ニーズが読み取れ、今後は観光振興を含む地域活性化の一手法としてエコツーリズムも有効であることが分かった。しかし、四国地域においてはさまざまな取組が始まっているものの、構想段階にあるものも多く、実際のツーリスト受入まで至っている地域は少ないのが現状である。そこで四国におけるエコツーリズム推進のため、特定の地域をモデル地域として取り上げて、エコツーリズム実施のための検討を行うこととした。

以下の理由から、今回はそのモデル地域として高知県本山町を取り上げることとした。

① 四国内の他の地域でも多くみられる、典型的な中山間地域に位置していることから、同地でのモデル事業実施は、他地域の参考となりやすいと考えられた。
② 早明浦ダムや吉野川など、四国において象徴的な自然・文化資源が存在し、その中で吉野川でのラフティング事業や、その支流である汗見川において清流を守る流域保全活動が行われている。
③ 同町は四国の中心部に位置し、高速道路を通じて四国４県庁からの移動が比較的便利であることから、四国域内からの誘客が期待できる。実際に香川からの水源を訪ねる教育旅行が同地域で実施されている。
④ 町役場では休校舎の利用方法を積極的に検討（参考資料 2 参照）し、農家民泊やエコツーリズムに関する勉強会を既に数度開催したりするなど住民機運が高まってきている。

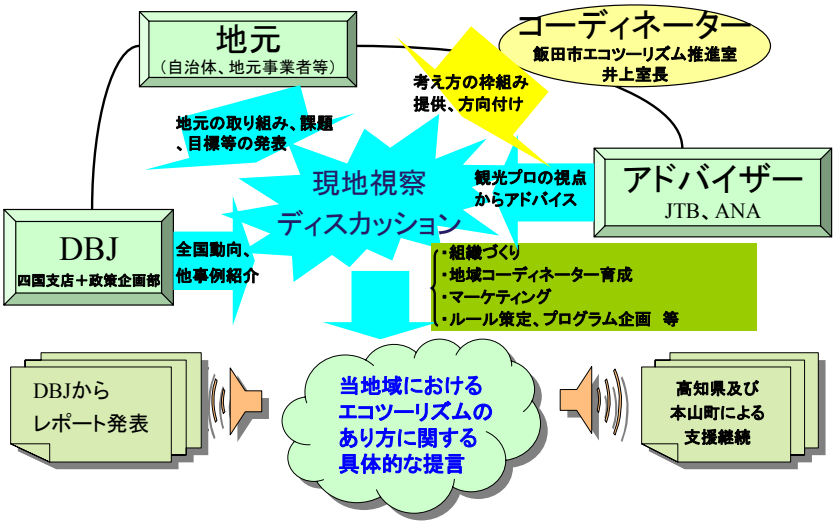
そして、これらの地域において、先行地域からの情報提供や、コンセプトを持ったマーケティングのサポート、地元の取組・資源に対する客観的視点の提供を中心に支援を行い、実際にツーリストを本山町に呼び込むことで、他のエコツーリズム推進を模索する他の地域に対する指針を示すことにも繋がると考えた。

具体的には先行地域からエコツーリズムに取り組み始めた地域への情報提供として、比較的似た自然条件（互いに吉野川と天竜川という大きな河川を有する、中山間地域である）にある長野県飯田市エコツーリズム推進室長の井上弘司氏を招聘しフォーラムを開催することで、地域住民に対してエコツーリズム先行地域の実情や経験に関する情報提供を行った。さらに地元のツーリスト受け入れ態勢整備のために、地域の自治体や住民グループ関係者に対して、エコツーリズム推進に向けての地域の課題や問題意識を、解決に導くための検討会の開催し、本山町のエコツーリズムの方向性を議論する機会を設けることとした。この検討会には前述の井上氏以外にも送客側の旅行代理店関係者や、本行関係者が加わることで議論の活性化を試みた（イメージ図参照）。

また本稿においては、本検討会内容について纏め、四国各地をはじめとしたエコツーリズムの推進を考えている地域に対し、情報発信を行っていくこととしたい。

次節以降では、検討会開催地である高知県本山町の概要を紹介し、同地でエコツーリズムを推進する上で重要になる自然観光や文化について紹介する。またその他にも本山町でエコツーリズムを実施する上で課題となりそうな部分に焦点をあて、解説を加えることとする。

検討会のイメージ



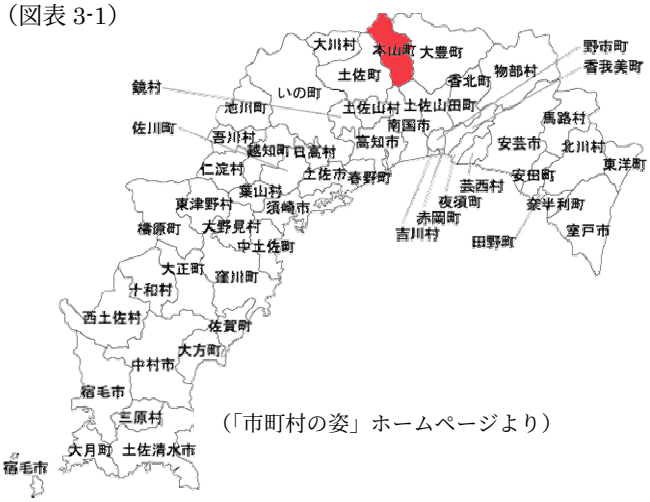
３－２．高知県本山町の概要

高知県長岡郡本山町（図表 3-1）は高知県北部、四国山脈の中心部である嶺北地域に位置し、北は愛媛県と境を接し、また南は南国市と土佐山田町、西は土佐町、東は大豊町と境を接している。高知県は全国でも森林面積割合が最も高い県（83.3%）であるが、本山町の森林面積割合は更に高い水準（89.1%）にある（図表 3-2）。集落・耕地は標高 250 m～740mの間に点在し、昭和 30 年頃には１万人を超えた人口が、45 年には 7,052 人、55 年には 6,011 人となり、平成14年には4,463人にまで減少している。また高齢化率は 3 割を超えている（図表 3-3）。

本山町を含む高知県は、全国的にみると、降雨量が多く気温も高い太平洋地区の気候に属している。一方で、四国の北部は降雨量が少なく比較的温暖な瀬戸内地区の気候に属する。

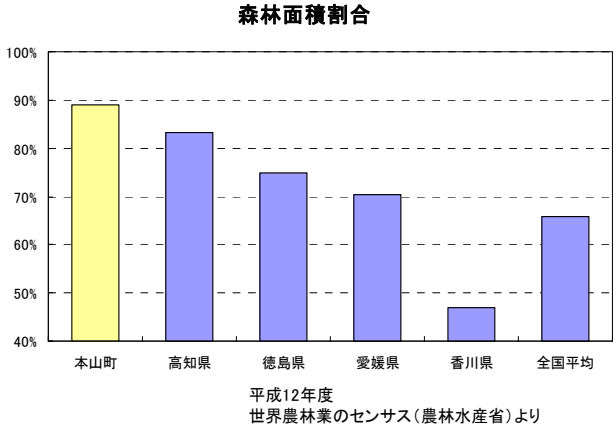
瀬戸内沿岸地区の年間降雨量は約 1,000～1,500㎜ であるのに対して、中央部山岳地区の年降雨量は約 2,500～4,000㎜、太平洋沿岸地区の年降雨量は約 2,000～3,200㎜ となっている（図表 3-4）ことから、四国北部では恒常的な水不足であり、一方で四国南部では大規模な洪水が多発していた。

（図表 3-1）

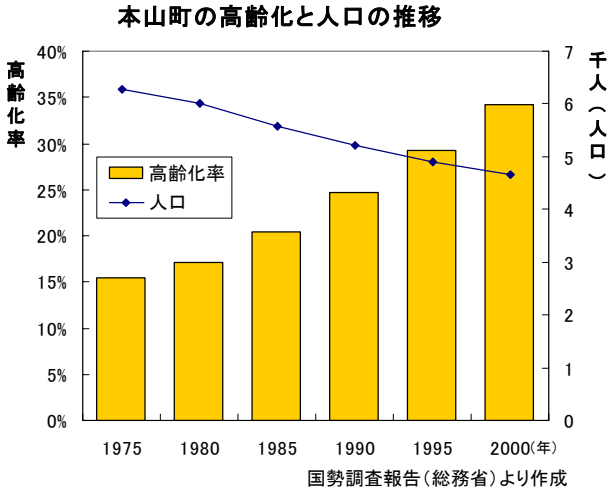


（「市町村の姿」ホームページより）

（図表 3-2）



（図表 3-3）



また、一方で高知をはじめとする四国４県では日照時間が長い（図表 3-5）ことから、観光地としては恵まれているものの、つまりは一時の降雨量が多いということの裏返しであり、これも洪水が多発する一因と言えよう。

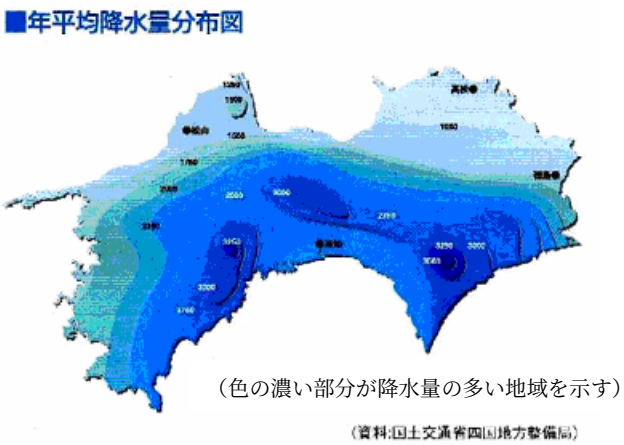
このように、雨の多い高知県（図表 3-6）においても、本山町を含む吉野川上流部はさらに雨量が多く、年間 3,000㎜ に達する多雨地帯に属していることから、日本でも有数の大河川となり得たのである。

本山町は交通の便としては、高松からは車で約２時間、高知市からは約１時間の距離にある。

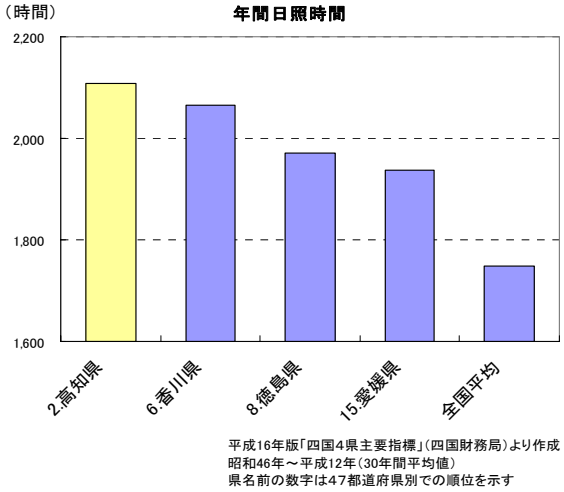
中心部には東西に吉野川が流れ、西には四国の水瓶である早明浦ダム、そして北からは吉野川へと注ぐ汗見川を有する町である。

近年は減農薬野菜や有機の里作りに積極的に取り組み、消費者から好評を得ているほか、高知国体を機に整備された「吉野クライミングセンター」や吉野川でのカヌー等、アウトドア活動施設も豊富である。

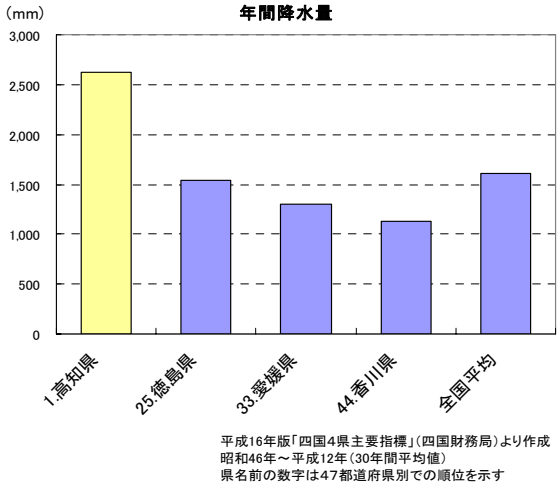
（図表 3-4）



（図表 3-5）



（図表 3-6）



３－３．嶺北地域の概要

（図表 3-7）

嶺北地域の概要(03年度)　（単位：㎢、人、％）

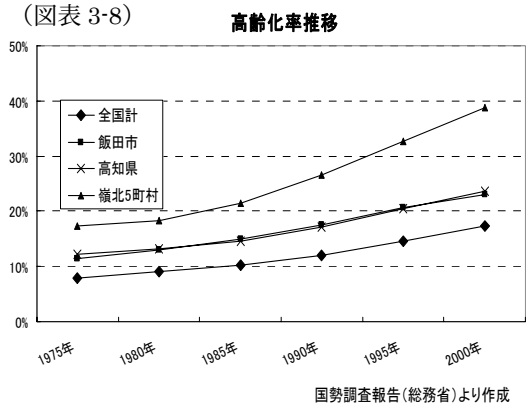
	長岡郡		土佐郡			合　計	（参考）長野県
	本山町	大豊町	土佐町	大川村	旧本川村*		飯田市
面積	134.2	314.9	212.1	95.3	208.7	965.2	325.4
人口	4,463	6,193	5,015	545	790	17,006	107,381
高齢率	36.7%	47.5%	35.8%	46.4%	41.5%	40.9%	23.1%

*本川村は2004年10月に伊野町、吾北村と合併し、いの町となっている。

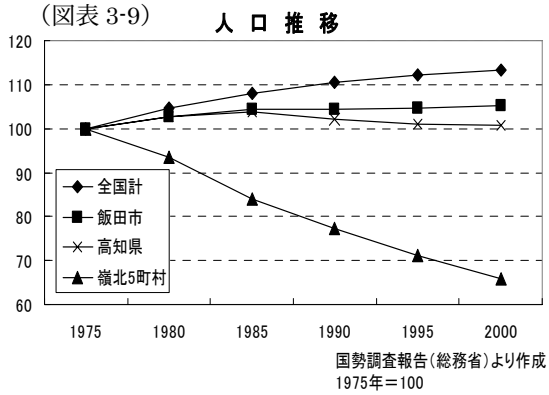
資料）国土交通省「全国都道府県市町村別面積調査」
総務省「国勢調査報告」「住民基本台帳人口」

「嶺北」地域とは、高知市の北の嶺のそのまた北、を示す言葉であり、この嶺北地域は吉野川流域を中心として、長岡郡の本山町と大豊町、土佐郡の土佐町、大川村と旧本川村（本川村は2004 年 10 月に伊野町、吾北町と合併し、いの町となっている）にて構成されている（図表 3-7）。嶺北地域の北西部には、四国中央部の吉野川源流点があり、そこから始まる吉野川の流れは嶺北地域の中心を抜け、北東の大歩危・小歩危を中心とした渓谷に流れ込んでいる。地域面積は 965 平方キロメートルと高知県の 13.6%。標高は 200m～1,800mの山岳地形にあり、土地利用状況は森林面積が 89.6%を占める中山間地域である（農用地面積 1.4%、宅地面積 0.4%）。現在の嶺北地域の人口は約１万７千人だが、高齢化が進行し既に高齢化率が４割を超えており（図表 3-8）、また人口減少も著しい（図表 3-9）ことがわかる。

（図表 3-8）



（図表 3-9）



嶺北地域では、日本の高度経済成長のなか、農山村をめぐる社会条件が変化してきたことに加え、早明浦ダムの建設、白滝鉱山の閉山等による人口流出や高齢化といった問題等に対応するため、「れいほくはひとつ」の認識のもと、町村のみならず地域一体となった取り組みを推進してきた。

具体的には、地域住民の生活環境の向上を図るため、消防・老人ホーム・給食・清掃・衛生等の一部事務組合を設立、昭和５４年にはこれらを統合し「嶺北広域行政事務組合」（図表 3-10）を発足させた。その後、火葬場に関する事務等が加わり現在に至っているほか、嶺北地域広域振興協議会、嶺北地域開発促進協議会、吉野川源流域町村観光振興連絡協議

会では、若者定住プランの策定や嶺北２１世紀プランの策定を行い、近時では高知県観光ビジョン作成においても嶺北地域が一体となりビジョン作成を行ってきた。

このように嶺北地域においては、古くから吉野川を中心とした生活や文化でのつながりが強く、これまでも様々な側面で一体的な取組がなされてきており、観光面でも「交流主体の体験交流をもとに広域が連携して多様な顔の見える嶺北ツーリズムを展開する」（嶺北交流ふれあい推進協議会）と謳われている。また、農産品や木材等に関する嶺北エコブランドの形成や、同地域に数多く存在する棚田を活用・保全管理する棚田ミュージアムの展開構想等、グリーンツーリズム対象資源となりうるような、地域の一体的取組がなされている。高知県の観光振興施策においても嶺北地区はグリーンツーリズムの推進地域として指定されている。

（図表 3-10）

嶺北広域行政事務の取組状況（平成16年10月）

内容	大豊町	本山町	土佐町	大川村	いの町
広域政策室	○	○	○	○	
介護認定審査会	○	○	○	○	
老人ホーム	○	○	○	○	○（旧本川村）
清掃センター	○	○	○	○	○（旧本川村）
最終処分場	○	○	○	○	○（旧本川村）
衛生センター（し尿処理）	○	○	○	○	○（旧本川村・吾北村）
火葬場	○	○	○		
常備消防・救急業務	○	○	○	○	○（旧本川村）
学校給食		○	○	○	

○ ： 参加自治体
（嶺北広域行政事務組合ホームページより作成）

３－４．本山町の清流「汗見川」

汗見川は本山町内を北から南に流れる河川である。川の全長は約 20㎞、愛媛県と高知県の県境でもある四国山地を源とし、南に下り本山町で吉野川本流と合流する嶺北を代表する河川である。平安時代に官道があった川沿いの山にはアセビ（馬酔木）の木が多く、旅の馬がその有毒の葉を食べて苦しんだという。その「アセビ」が「あせみ」に転じたという名前の由来も伝えられている。

(本山町内を流れる汗見川：当方撮影)

上流域は天然木の宝庫であったことから、かつては川沿いに森林軌道が敷設され、木材の運び出しが行われていた。林業で流域が栄えていたこともあり、汗見川には嶺北初の発電所が建設された。大正６年に住民の出資により電気会社が設立、同８年から１５年まで発電が行われていた。現在もかつての堰の石積みが残っている。

戦後、伐採の影響から森林保水力の低下等に危機感を感じた住民により約 20 年まえに「汗見川を美しくする会」が組織された。流域住民が参加しての清掃や、流域への桜の植樹など、清流保全の取り組みがなされている。

３－５．本山町を横断する吉野川の流れ

（図表 3-11）

（香川県庁ホームページ「かがわの水」より）

本山町の中心部を流れる吉野川は、これまでも独自の流域文化や歴史を育んできた。そして、吉野川は今後本山町においてエコツーリズムを実施していく際に、ストーリー性を加味する上で中心的な資源になると考えられる。

吉野川はその流域を高知県土佐郡瓶ヶ森に発し、本山町では汗見川と合流した後、祖谷川などを合わせ、大歩危・小歩危などを経て東の徳島平野に入り、旧吉野川を分派して紀伊水道に注いでいる（図表 3-11）。幹線流路延長は 194㎞。

流域は四国四県に渡り、流域面積は 3,750 ㎢（徳島県 63%、香川県 1%、愛媛県 8%、高知県 28%）におよび、四国全域の約 20%を占めており、板東太郎（利根川）、筑紫次郎（筑後川）と並び四国三郎と呼ばれる、日本でも有数の大河川である。

現在では吉野川流域内には 4 市 33 町 10 村、人口約 64 万人（H12 年）が生活し、上流山地では農林業、下流平野部では商工業や農業が主であり、流域では徳島市、鳴門市を中心に人口集中がみられる。さらに、香川用水や高知分水といった吉野川総合開発事業の受益地においては、四国の人口の半数の 210 万人が暮らしている。農業用水を受ける農地は、徳島県、香川県及び愛媛県で合わせて約 40,000ha にのぼる。なお、詳しい吉野川流域の文化や歴史に関しては、参考資料 1 をご参照頂きたい。

３－６．「水」をコンセプトとした他地域との交流

（早明浦ダムの全景：嶺北広域行政事務組合ホームページより）

（図表 3-12）

早明浦ダムの建設目的（抜粋）

①洪水調節：洪水調節を行い、吉野川沿岸の水害を防ぐ。

②維持用水の確保：吉野川の流水の正常な機能を維持するために必要な流量を確保する。

③新規用水の供給

（早明浦ダムにより年間 8 億 6,300 万 m^3（33m^3/s）の用水を開発して四国四県に供給）

④発電

（早明浦ダム左岸側の発電所にて発電を行う：電源開発）

吉野川を堰き止めて作られた早明浦ダムは「四国の水瓶」とも呼ばれ、太平洋側の水害と瀬戸内側の恒常的な水不足解消を主な目的として建設された。その貯水池面積は本山町、土佐町及び大川村を含めて 7.5 km^2あり、昭和 42 年 4 月から発電等の供用が開始されている（図表 3-12）。

昭和 43 年以降、池田ダム、香川用水、新宮ダム及び旧吉野川河口堰の建設が始まり、昭和 50 年前後に各施設が完成した。さらに昭和 53 年には高知分水が完成、平成 13 年には銅山川にある富郷ダムが完成した。これら 7 事業によって新たに生み出された水量は年間 9 億 2,200 万 m3 となり、四国 4 県に配分されている。 また、洪水調節においては早明浦ダムをはじめとした各ダムにおいて洪水流量の低減を図っている。

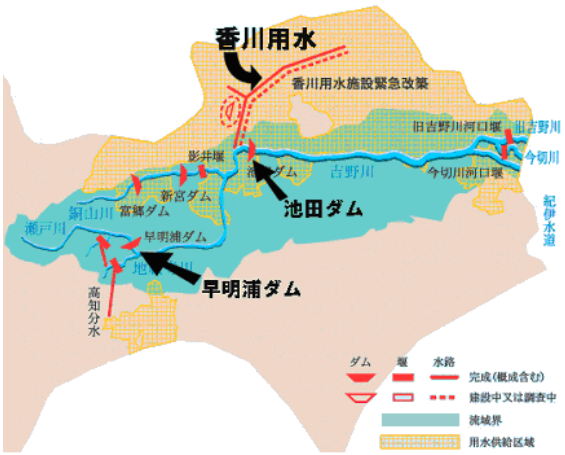
平成 6 年及び 13 年の異常渇水は記憶に新しいが、香川用水を利用した給水のおかげで香川を中心に水不足の影響は最小限に留まったとも言える。しかしダム建設に当たっては賛否両論があり、現在でもダム建設による環境への悪影響を唱える声がある。

平成 17 年 3 月、早明浦ダムは財団法人ダム水源地環境整備センターより、香川の満濃池（満濃池ダム）と共に「ダム湖百選」に選出された。様々な声はあるが、まさに早明浦ダムは、「ダム湖百選」選出基準となっている「地域に親しまれ、地域にとってかけがえのないダム湖」とい

えるのではないだろうか。

このように地域において重要な役割を果たしている早明浦ダムは本山町でのツーリズムをエコツーリズム化する上で重要な資源であるといえよう。上述の通り、香川用水で結ばれた嶺北地域と香川県との関係は深いものとなっている。香川県は雨が少なく、また大きな山や河川が存在しないことから、かつては恒常的な水不足状態におかれていた。弘法大師の時代にはすでに満濃池が存在し、841 年に改修工事がなされた、とする資料が残っている。溜池文化の発達により、県内には 1 万 4,000 ヶ所以上もの溜池が作られ水不足対策が講じられていたものの、抜本的な水不足解消には至っていなかった。そこで、吉野川の豊富な水資源を利用するため、昭和 43 年(1968 年)から昭和 49 年(1974 年)にかけて作られた全延長 106㎞ の水路が香川用水である（図表 3-13）。香川用水には農業用水・水道用水・工業用水が流れる共用区間と農業用水だけが流れる農専区間がある。年間給水量は 247 百万㎥あり、満濃池の約 16 杯分に相当する。また香川県の水道用水に関しては、その約半分を香川用水の利用に頼っていることから、同県の吉野川や早明浦ダムに対する関心は高い（図表 3-14～17）。

（図表 3-13）



（水資源機構ホームページより）

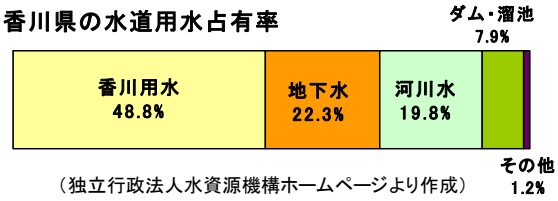
（図表 3-14）

香川県の農業用水占有率

（独立行政法人水資源機構ホームページより作成）

（図表 3-15）

香川県の水道用水占有率



（独立行政法人水資源機構ホームページより作成）

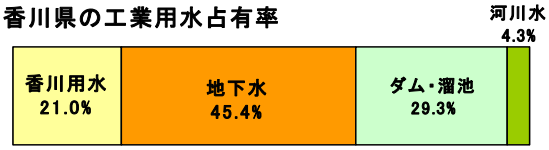
農業用水：7 市 22 町の農地に 98 万立方ﾒｰﾄﾙメートル/日[最大 11.3 立方ﾒｰﾄﾙ/sec]を供給している

面積別では水田：25.100ha、果樹園：5.600ha　計約 30.700ha

水道用水：香川用水の水は 4 ヶ所の浄水場で浄水し、香川県内の 7 市 19 町（人口の約 80%）へ供給している

（図表 3-16）

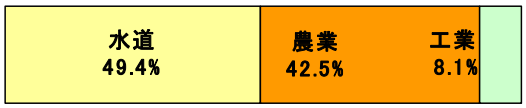
香川県の工業用水占有率



（独立行政法人水資源機構ホームページより作成）

（図表 3-17）

香川用水利用目的（合計2億4,700万t）



（独立行政法人水資源機構ホームページより作成）

工業用水：香川の中讃地域である坂出・丸亀地区工業地帯に供給している

上述のように香川県では吉野川及び早明浦ダムに対する関心が高く、毎年県下中学生を対象とした、香川用水の水源を日帰りで学習する「香川用水の水源巡りの旅」が行われている。 この事業は香川県の平成 6 年の異常渇水を契機として開催されている。平成 17 年 4 月には、17 年度第１陣となった善通寺市立西中学校の生徒 137 名が、早明浦ダム施設見学等を行った。17 年度は、4～11 月に香川県内の 46 校、生徒約 6,200 人がこの旅への参加を予定しており、早明浦ダム、池田ダム、香川用水東西分水工、香川県営浄水場の見学、体験学習（高知県土佐町）などがプログラムとして織り込まれている。

他に、香川と吉野川上流域の森林交流事業として「早明浦交流プロジェクト～交流の森づくり」を挙げることができる。これも異常渇水を契機に、水を守るためには水源地の森を守る必要がある、との考えから始まった交流や森づくりの事業である。ＮＰＯ法人どんぐりネットワークでは、平成 6 年 12 月に初めて高知県大川村（吉野川源流域）と交流の森づくりの協定書を締結し、村有林 0.83ha を無償で借り受け、その後、平成 12 年にはその面積を拡大している。このプロジェクトでは植林や下草の伐採を通して、高松を中心とした子供たちと、大川村を含めた吉野川上流域の自然や人々との交流が図られている。なお、同事業は香川の「どんぐり銀行」（香川県とボランティアから成る組織）により運営されている。

香川県だけではなく、吉野川の下流域にある徳島県も、上流域に関心を持っている。徳島県は国土交通省（建設省）と共同で、吉野川を活用とした魅力ある地域づくりの指針として「吉野川新交流プラン」を策定している。学識経験者、各種団体の代表者等で構成した「吉野川新交流プラン検討委員会」を設置する一方、住民参加型検討組織「吉野川新交流プランブロック懇話会」を徳島県内の吉野川流域の上・中・下流のそれぞれに設置しプラン検討を行った。平成９年９月に「吉野川新交流プラン検討委員会」から、これまでの検討内容を取りまとめた「吉野川新交流プラン」の最終報告がなされ、 以下のプロジェクトをはじめとする方針について、平成 18 年頃までを目途に具体的な取組を実施することとなっている。

「吉野川新交流プラン」（一部抜粋）
□県民参加による森林保全
住民ボランティアや民間団体等と行政が連携し、水源地への植林や間伐等、森林整備・保全を行うと同時に、水を育む森林づくり運動等を展開し、上下流域の連携を進める。
□統一的イベントの開催
吉野川流域のイベント同士が交流・連携を図ることで、より魅力的なイベントを創造し、集客力の増大を図り、吉野川流域における連帯感の強化や効果的なＰＲを行う。 ほか

特に河口にある徳島市に関しては、同市は吉野川沖積平野にあり、市内には大小 138 の河川が流れ、その流れを利用して物資の運搬、伏流水を使っての染色（藍染）、醸造、織物等が行われ現在も伝統が残っており、吉野川への思い入れは強い。同市では水とともに栄えた歴史を活かし、「水が生きているまち・徳島」として、新しい都市イメージの形成を目指している。また、市民と行政の協力により、新川の保全等“水の都徳島市づくり”が行われている。

３－７．「エコツーリズム検討会 in 本山町」の概要

本検討会は、高知県本山町において平成 17 年 3 月 25 日に次項のスケジュールにて開催された。参加者は、エコツーリズムに関する有識者として、前日のフォーラムでご講演（第２章参照）頂いた井上弘司氏をはじめとして、地元自治体や今後エコツーリズムプログラム実施上、重要な役割を果たすと考えられる地元事業者、また、客観的な視点や、ＰＲ・マーケティングに関する意見を述べるべく、本行の他にＪＴＢ，ＡＮＡ等の関係者にも議論に加わって頂いた（参加者リスト参照）。検討会午前の部では、まず本行より四国観光の現状について報告を行い、高知県からは今次策定・発表された「高知県観光ビジョン」についての説明がなされた。その後本山町から同町の概要及びエコツーリズム実施に際しての問題意識について報告がなされるとともに、午後の部での議論のたたき台として教育旅行受入を想定した「エコツーリズムモデルツアー」が発表された。午前の部終了後、エコツーリズムプログラムとなるような自然・文化資源を視察し、午後の部では井上室長のコーディネートのもと、本山町でのエコツーリズム実施に向けた議論を行った。以下に、議事録を掲載する。

（参加者リスト）

カテゴリー	視点	所属	検討会参加者	ｵﾌﾞｻﾞｰﾊﾞｰ出席
講師	先進事例紹介と検討会のｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ役	飯田市	井上弘司室長	
主催者	取り纏め、四国観光の現状認識	DBJ四国支店	石井吉春支店長	
			安藤均次長	
				三浦宏樹課長
				上嶋英夫調査役
			後藤明	
	他地域事例紹介	DBJ本店政策企画部	前田正尚部長	
自治体	地元自治体としての考え方や支援	高知県本山町	今西芳彦町長	
				高橋俊介助役
				澤田和広企画課長
		本山町ツーリズム推進室	大西千之室長	
	観光ビジョンについて	高知県観光振興課	小松仁視チーフ	
				坂田省吾主幹
		高知県森林局木の文化推進室	宮地辰彦室長	
				田渕史剛主幹
		高知県地域づくり支援課	金谷正文企画員	
				篠崎公一企画員
				窪内加代子企画員
地元事業者	現在の取組と今後の展望	汗見川保全活動	川村芳朗氏	
		女性グループ活動	真辺由香氏	
		椎茸農家、ツーリスト受入経験有	大石直哉氏	
		mont-bell本山	野村直哉氏	
		本山町観光協会会長	松葉晶夫氏	
		ｱｳﾄﾄﾞｱの里づくり委員会委員長		上村嘉寿彦氏
旅行業者	他地域からの修学旅行誘致	JTB西日本国内商品事業部	明神洋介部長	
	高知へのｸﾞﾘｰﾝﾂｰﾘｽﾄ誘致	ANA高知支店	永山丈久支店長	
その他	伯方塩業	伯方塩業		野本公夫取締役
新聞社	四国新聞	四国新聞		岩部（ｲﾜﾌﾞ）編集委員室長
	高知新聞	高知新聞		芝野本山支局長

３－８．検討会議事録

（1）．午前の部

司会【DBJ四国支店次長　安藤】

それでは「エコツーリズム検討会 in 本山町」を始めさせていただきます。私は日本政策投資銀行四国支店で次長を務めさせていただいている安藤と申します。よろしくお願い申し上げます。

まず開会に先立ちまして、主催者である今西町長よりご挨拶をいただきたいと思います。ではよろしくお願い致します。

開会挨拶【本山町　今西町長】

昨日の夕方より寒くなってまいりまして天候を心配しておりましたが、何とか良いお天気になり安堵しております。昨日に引き続き検討会にご参加いただき誠にありがとうございます。フォーラムの開催に当たって県をはじめご支援下さった関係者の方にお礼を申し上げたいと思います。

本山町は自然と地域資源を活かした地域活性化に向けた取り組みを進めておりまして、全国各地の地域資源を活かした取り組みについて検討する中で、皆様方との交流を行いネットワーク作りも進みました。本山町で地域資源を活用したどのような取り組みができるのか、できることから始めていこうということで、四国や嶺北の皆様との交流を活発にしていきたいと考えております。そういうことからも、今回の検討会から本町の進むべき道を探っていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い致します。

検討会の趣旨説明【安藤】

それでは僭越ですが、私の方からこの検討会の趣旨につきましてご説明させていただきます。近年、自然との触れ合いを意識した観光に注目が集まっておりますが、その代表格が看板にもありますように、エコツーリズムでございます。四国は四万十川や吉野川、さらには本山町を流れている汗見川に代表される清流のある自然の豊かな地域でございます。四国にはエコツーリズムを観光の柱として育てる土壌がございます。私ども日本政策投資銀行四国支店では、このエコツーリズムをテーマとした四国観光活性化のお手伝いができないかと考えて調査を開始しました。その中で四国の代表事例として一緒に研究していけるところを探してまいりましたが、高知県様からの情報提供などもあり、この本山町を調査の対象とさせていただきました。本山町は四国の重心とも言える場所にある上、四国 4

県を流域とする吉野川源流エリアにございまして、四国を代表するに相応しい地域でありますし、町自体でもエコツーリズムを推進しようという機運が盛り上がってきております。そこで何らかのご支援ができないだろうかと考えまして、今回の検討会の開催を企画させていただきました。

本山町におけるエコツーリズムを考える上で、中心的な資源は吉野川を除いて考えることは難しいと思っております。本山町を含む嶺北地域は、吉野川の源流域に位置するわけですが、吉野川は四国三郎と呼ばれる日本有数の大河であり、四国の水資源を支えるとともに流域での文化を発展させてまいりました。例えば吉野川の作った肥沃な平野部では中世以前から藍の栽培が行われており、その藍の流通の拠点となった川湊では脇町に代表されるような立派なうだつの街並みが形成されました。嶺北地域では昔から林業が盛んでございまして、戦国時代には大阪城築城のため豊臣秀吉に木材が献上されたという歴史もございまして、木材を運ぶ水路として吉野川が利用されておりました。そして今日では早明浦ダムにより香川や徳島の水資源を支えております。近年では本山町には有機農法の先進地として関心が集まっています。今後の体験型ツーリズムにおきましては、他地域との差別化も必要となることから、本山町では「吉野川上流域」や「有機農法」といったキャッチフレーズと組み合わせたり、吉野川の広域的な文化資源と組み合わせたりすることで、付加価値のある体験ツーリズムとして、対外的にアピールしてはどうかというふうに考えているところでございます。

この検討会には長野県飯田市でエコツーリズム推進室長としてご活躍され、内閣府の「観光カリスマ 100 選」にも選ばれている井上弘司さんをコーディネーター役としてお迎えしております。井上さんは地域の中心となってエコツーリズムの立ち上げを行い、南信州におけるエコツーリズム事業で中心的な役割を担っておられることは、昨日のフォーラムで十分に勉強させていただきました。この検討会でもそのご経験を踏まえていろいろな問題提起やアドバイスがいただけるものと考えております。皆様方におかれましても、この機会に活発な議論をしていただいて、実のある検討会とされることを希望致します。

次に、本行四国支店の後藤より本日のスケジュールと四国観光の現状に関する問題意識、さらに検討会開催に至った経緯についてご報告させていただきます。

スケジュールの説明【DBJ四国支店　後藤】

おはようございます。日本政策投資銀行の後藤でございます。よろしくお願い致します。まず本日のスケジュールをご案内させていただきます。既に本山町の今西町長の開会ご挨拶とこの検討会の趣旨説明が済みましたので、これから私の方から「四国観光の現状について」ということで四国が現在抱えている問題と何故エコツーリズムなのかということ、それから何故今回本山町で「エコツーリズム検討会」を開かせていただくことになったの

かについて、私どもの視点をご説明させていただきます。

それに引き続いて 10 時からは、高知県地域づくり支援課の金谷さんから、「高知県の観光ビジョンと本山町の位置づけ」ということで嶺北地域の観光ビジョンを中心にお話しをいただくことになっています。次に本山町さんの方から本山町の概要についてご説明をいただくとともに、エコツーリズム実施に当たっての問題意識についてもお話しいただくことになっています。続いて 11 時より視察ということでバスに乗って現地に行っていただきます。途中で本日ご参加いただいている方より所々でご説明をいただくわけです。最初に有機農法をされている山下農園をお伺いします。その後休校中の小学校の方へ行きまして「地産地消」を兼ねたプログラムにもなりうるということで、地元食材を使った手打ちそばと山菜すしをいただきます。それからこの沢ヶ内小学校はグリーンツーリズム、エコツーリズムのための宿泊施設として応用することを検討中だということですので、どのような施設か視察させて頂くことになっております。その後「ラフティングコース」を Mont-bell さんにご案内いただき、「棚田」の方は本山町さんのご案内で視察致します。そして最後に大石さんの「しいたけハウス」を見せていただくことになっております。これらも本山町におけるエコツーリズムの貴重な資源になると考えられますのでご案内させていただきます。

その後、今回のメインプログラムになるわけですが、午後 2 時から検討会ということで、先程ご紹介させていただいた飯田市エコツーリズム推進室長の井上さんにコーディネーターを務めていただいて、本山町におけるエコツーリズムについて検討し、5 時に今後の方向性についてまとめさせていただいた後、閉会というスケジュールになっております。

【エコツーリズム検討会 in 本山町スケジュール】

時間	内容
9:30	開会挨拶:本山町長　今西芳彦
9:35	趣旨説明:DBJ四国支店次長　安藤均
9:40	本日のスケジュール及び四国観光の現状について報告:DBJ四国支店　後藤明
10:00	高知県観光ビジョンについて:高知県企画振興部地域づくり支援課企画員　金谷正文
10:10	本山町の現状と問題意識:本山町企画課ツーリズム振興室室長　大西千之
11:00	【プラチナセンター発（マイクロバス)】
11:15	【山下農園着 】
	有機栽培農業視察＜説明者:山下農園　山下一穂＞
11:45	【山下農園発】
	移動中汗見川環境整備等につき説明＜説明者:本山町企画課　大西室長、汗見川活性化委員会　川村氏＞
12:15	【沢ヶ内小学校(休校)着】
	昼食:地元食材を使った手打ちそばと山菜すし＜汗見川生活改善グループ＞
12:45	沢ヶ内小学校施設案内
	校舎・体育館を見学＜各自＞
13:00	【沢ヶ内小学校発】
	ラフティングコース＜説明者:mont-bell 野村直哉＞
	棚田の視察＜説明者:大西千之＞
	しいたけハウス＜説明者:椎茸農家・農業体験プログラム受入　大石直哉＞
13:50	【プラチナセンター着】
14:00	意見交換論点説明＜説明者:飯田市エコツーリズム推進室室長　井上弘司＞
	意見交換＜コーディネーター:井上弘司＞
16:00	休憩・・・地元の手作りパン＜説明者:マムのパン　真辺由香＞
	意見交換
17:00	まとめ＜発言者:井上弘司ほか、参加者＞
17:20	閉会挨拶＜DBJ　四国支店長　石井吉春＞

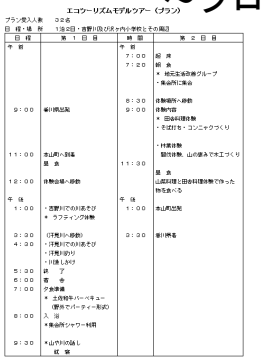
四国観光の現状について【後藤】

（既存観光地の現状やエコツーリズム検討会が本山町で開催されることになった経緯等については、本稿1章～3章に詳しく解説していることから割愛）

今日の議論の焦点

検討会においてどのような焦点から議論することが最良なのかについて、われわれなりに考えてみました。まず１番目の焦点「プログラム」については、本山町さんにご協力をいただいて、他の配付資料に付してございますが、モデルツアーとして 32 名、一クラス程度の人数で、一泊二日で吉野川の源流と水資源を訪ね、沢ヶ内小学校を宿泊施設として利用するツアーを組んでいただきました。エコツーリズムについては既に、皆さんそれに向かっているという現状がありますので、ツアーを叩き台にして具体的な問題点の抽出や地元に今後何が必要かというところを、飯田市で実際に立ち上げから関わってきた井上室長にご意見をいただければ、一番本山町にとってメリットのある議論ができるのではないかと思います。このモデルツアーの実現とさらなる充実のための具体策という視点から、井上室長のご意見が頂けるのではないかと思います。その他、農業体験プログラムや受入側として認識している問題、それからガイドの人選と要請方針など、これは外部の人間の視点ですが、こういったところが議論の焦点になるのではないかと考えています。そういうことを意識しながら、活発な議論が行われると良いと考えております。

議論の焦点①
～プログラム～


エコツーリズムモデルツアー（プラン）

プラン受入人数　○○名
日　程・場　所　1泊2日・吉野川及び沢ヶ内小学校とその周辺

日　程	第　1　日　目	時　間	第　2　日　目
午　前		午　前	
		7：00	起　床
		7：20	朝　食 ＊ 地元宝保存会グループ ・集会所に集合
		8：30	体験場所へ移動
9：00	振り開会式	9：00	体験内容 ＊ 田植え体験 ・そば打ち・コンニャクづくり ・村面体験 動力体験、山の麓みでホエコ（リ）
11：00	本山町へ到着 昼　食	11：30	昼　食 山菜料理と田舎料理体験で作った物を食べる
12：00	体験会場へ移動		
午　後		午　後	
1：00	・吉野川でのお遊び ＊ ラフティング体験	1：00	本山町出発
3：20	（汗流しの移動）	3：20	振り閉会
4：30	・汗流しでのお遊び ・汗流し終り ・川遊入り口		
5：30	終　了		
6：00	夕　食		
7：00	夕食会場 ＊ 土佐特牛バーベキュー （野外でパーティー形式）		
8：00	入　浴 ＊集会所シャワー利用		
9：30	＊山ケドの話し 就　寝		

（モデルツアーについては別途配布資料参照）

- モデルツアーの実現可能性とさらなる充実のための具体策
- 農業体験プログラム（有機農法）や吉野川を使ったツアーなどの取組内容
- 受入側として認識している問題点と解決策（提供できるもの）
- ガイド等、案内できる人材について、養成方針
- 今後用意しようと考えているプログラムとそれに伴う課題

またプログラム以外でどのような問題点があるかと申しますと、２番目の焦点「ツーリストの受入施設」であります。今回は一泊二日のモデルツアーを組んでおりますが、宿泊施設をどうするのかが本山町でも大きな問題になっているようですので、これも議論の焦点になるのではないかと考えております。休廃校をグリーンツーリズムの施設として活用することについて問題があるのかどうか、転用は可能なのかといったことについて、町の方針も含めて

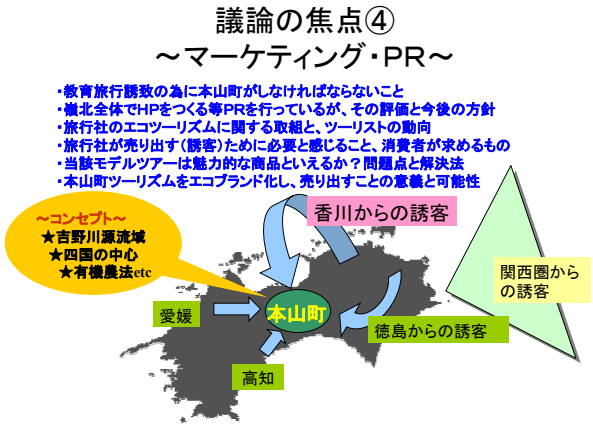
議論の焦点②
～ツーリスト受入施設（宿泊など）～

- 休廃校をグリーンツーリズムの施設として活用することについて
- 沢ヶ内小学校で開催した勉強会の内容について
- 沢ヶ内小学校の宿泊施設への転用可能性と運営方針
- 農家民泊の受入可能性と課題
- 飯田で行われている農家民泊について
- 農家民泊の農家女性による協力体制はあるのか？機運を高めていく方法は？

（休校となっている沢ヶ内小学校：当方撮影）

議論させていただければと思います。これについては沢ヶ内小学校で開催されている勉強会があるそうですので、後程本山町さんの方からご報告いただくことになっております。それから宿泊施設ということでは、農家民泊の可能性と課題ということで、消防法など各種法律に抵触する部分もあります。この部分をクリアーするために、飯田市さんの方では行政改革特区の申請をされております。こうした特区の取り組みや問題点の解決法については井上さんからアドバイスをいただけると思いますし、また疑問に思っていることについてはどんどん質問をぶつけていただきたいと思います。井上さんのお話に多く出てまいりましたが、農家民泊では女性の役割が重要であると以前から伺っていたことでございますが、農家に受け容れてもらうような機運をどうやって高めていくかということでも、本山町は飯田市と較べて大変人口も少ないわけですから、より強力な受入態勢が必要だと思いますので、これも議論の対象になるのではないかと思います。

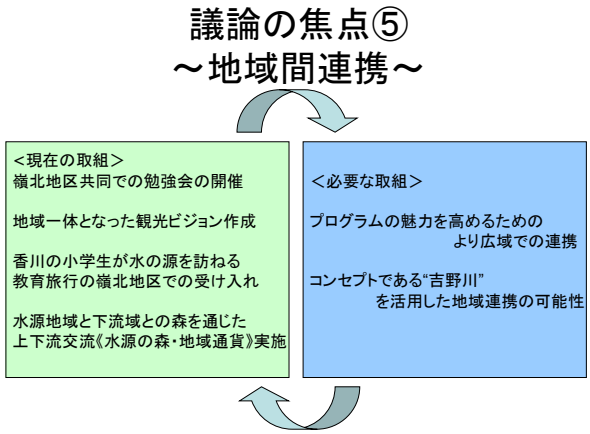
それから３番目の焦点としては､｢運営体制｣をどうするかという問題がございます。こちらの勉強会でも運営体制について多くの指摘がなされているようですが、町の支援態勢として、立ち上げは町が行う必要があるが、ゆくゆくは民間が主体となるとか、そういった方向性について具体的に議論できれば、本日の検討会が実のあるものになるのではないかと考えております。昨日の井上さんのお話では、観光協会は PR に徹し、南信州観光公社がコーディネーターの役割を果たしているわけですが､本山町さんの場合、観光協会がコーディネーターの役割を果たせるのかどうかという視点もあって良いのではないかと考えております。



次に４番目の焦点としての「マーケティング・PR」ですが、人が来てくれなければ意味がありません。ですからマーケットを疎かにしてはいけないということで、今回マーケティングのプロの方に来ていただきました。教育旅行誘致のために本山町がどのようなことをしなければいけないかについてお話しいただけると思います。嶺北地域としてのホームページを作っていらっしゃるとのことですが、その評価や今後の方針、旅行者の視点から見たエコツーリズムに関する取組や動向についてお話しいただいて、誘

客のために必要なもの、消費者が求めているものが何かを考えていきたいと思います。飯田市の場合でも、観てもらいたいものを観てもらえるようにするのは非常に大変だというお話を伺いました。こちらの売り出したいもの、そして旅行者の希望に応えるために最低限必要になるものを整えていかなければ、誘客は期待できませんので、その辺も議論の対象になるのではないかと考えております。具体的に今回のモデルツアーについても、本当に魅力的な商品なのか、ここはこういうふうに変えた方が良いのではないかという議論も出てくると思います。そのため、ツアーのこの部分についてはこういう差し替えが可能ですよ、という選択肢をいくつか資料に付してございますので、そういった視点からも議論をしていただきたいと思います。さらに、本山町ツーリズムをエコブランド化して売り出すことの意義と可能性ということについて、考えたいと思います。例えば飯田の場合は飯田のファンになってもらう、という活動をやっておりますが、本山町でも本山町のファンになってもらえるような取り組みが考えられるのではないでしょうか。本山町であれば有機農法で作った野菜があるので、食を通じて本山町のファンになってもらえるような可能性、それから他のコンセプトとして本山町は吉野川の源流域にあり、四国の中心に位置するということがありますが、これらのコンセプトを通じて本山町でのツーリズムをエコブランド化することの可能性を議論したいと考えております。

最後の5番目の焦点は「地域間連携」です。嶺北地域は非常にまとまりが良く、観光ビジョンの策定も嶺北地域で一体的に行っているという話は伺っております。しかし本当に嶺北だけで良いのかとも思っております。プログラムの魅力を高めるために、例えば吉野川の源流域をコンセプトにするのであれば、徳島や香川などの下流域と連携して、吉野川の上流と下流の地域連携の可能性を考えることも必要になってくるのではないかと感じております。これが今回の検討会に対するわれわれの考えでございます。以上で私の報告を終わらせていただきます。



司会【安藤】

どうもありがとうございました。続きまして、高知県企画振興部地域づくり支援課の金谷さんより、県が作成している高知県の観光ビジョンの概要と同ビジョンにおける本山町の位置づけについて、お話を伺いたいと思います。

高知県の観光ビジョンと本山町の位置づけ

【高知県企画振興部地域づくり支援課　金谷企画員】

嶺北地域を担当している県の地域づくり支援課の金谷でございます。よろしくお願いします。今回の本山町をフィールドとしたエコツーリズムの検討に当たりまして、県の観光ビジョンについて基本的な考え方を説明して欲しいという事務局からのお話しがございました。本来なら観光行政を所管する観光振興課が出てくるべきところですが、この検討会に冒頭から参加することができません。午後には観光振興課の者も出席する予定でございますので、ご容赦願いたいと思います。

そういうこともございまして私がご説明させていただくことになったわけですが、冒頭にお断りしておかなければならないことがございます。実は県の観光ビジョンの第 3 回目の検討会が昨日行われました。お手元に観光ビジョンの抜粋をお配りしておりますが、第 3 回目の検討会で、これが最終回になるわけですが、いろいろな意見が出されまして、まだ加筆修正しなければならない部分が大分残っております。こういった部分につきましては県の事務局の方に一任させていただくということでご了承をいただいておりますので、中身が大分変わる可能性がございます。今回の本山町のグリーンツーリズムのこともございますが、県内を 7 つのブロックの主立った方針を中心にご説明させていただきますが、内容については修正されることもあるということを念頭に置きつつお聴きいただきたいと思います。

観光ビジョン作成にいたる経緯

まず、県が観光ビジョンを作成するに至った経過について申し上げます。観光振興に対する行政の取組としては、平成 6 年に「観光アクションプラン」という行動計画を立てまして、これまで 500 万人前後で推移していた県への観光入り込み客数を 600 万人に増やそうという目標をたて取り組んでまいりました。残念ながら海外旅行の増加や旅行客のニーズの多様化などによって、思うような成果が上げられず、観光客数が伸び悩みました。加えて、最近ではプロ野球のキャンプなど地域経済に非常に効果のある催しやイベントが相次いで撤退しており、それに対する危機感もございまして、平成 14 年度に県議会が観光振興の一層の促進に関する決議がなされるなど、県議会を始めとして各方面から積極的な観光への取組や県の観光行政に対する叱咤激励が平成 12 年頃から大きなうねりとして出ております。そういった一連の動きの中で、平成 15 年の 7 月に自民党県議を中心として県の観光条例を作れという動きが出てまいりまして県議会を中心に観光条例チームが作られました。これには県の執行部も加わっており議会と行政の共同チームですが、ここで半年ほど

検討が行われました。そして昨年の 7 月議会で全会一致で「あったか高知観光条例」が成立しました。こうした条例は沖縄と北海道にもあるようですが、沖縄の条例は規制型のものであるというふうに聞いております。北海道のものは宣言型と言われているようでございますが、本県の場合はそのどちらとも異なり、住民が参加することを謳い、県民が皆、観光振興において役割を担っていこうという理念を盛り込み、一定の目標を掲げたものになっております。この条例に基づいて県の観光ビジョンの策定が進められているわけでございます。

高知県観光ビジョン

お手元に「光をあて、光り輝き、光を発する」というタイトルの資料をお配りしましたので、ご覧下さい。目次の次のページに「高知県観光ビジョンの基本理念」がございます。今回の県のビジョンの最終の目的は「地域が元気になる」ということと「地域経済が潤う」こと、大きく言ってこの 2 つでございます。そのために、どうするかということで、基本理念として、観光立県を目指していく上で必要な理念が観光条例の中で謳われております。それが「環境づくり」「人・心づくり」「態勢づくり」の 3 つの基本理念でございます。

理念と体系　この条例を体現するものが観光ビジョンでございますので、条例の基本理念をそのまま観光ビジョンの基本理念として持ってきております。そしてこの理念の具体的な方向を体現するためにどうするかということで「地域に光を当てる」「地域自ら光り輝く」「地区外へ光を発する」という 3 つを基本方向として、10 項目にわたる基本方針の分類整理を行っております。検討会でいろいろな意見が出た関係もございまして、まだ十分に整理されておりませんが、県下 7 ブロックの地域別ビジョンの検討の際に出てきた意見や県の全体会で委員各位から出た意見を中心にこの 10 項目の分類に基づいて整理しております。

推進体制　観光ビジョンの最も特徴的な点の一つとして、基本的な役割を県以下、市町村、県民、観光業者、関係団体へ応分に割り当てたことが挙げられます。押しつけにならないような形でそれぞれの役割を整理していきましょうということを条例の中でも謳っておりまして、それを受けて観光ビジョンで具体的に整理したわけでございます。現実問題として、ここ 2、3 年観光は重要だと言われてまいりましたが、県の場合には県と推進部隊であるコンベンション協会の役割が不明確だと言われてまいりました。逆にコンベンション協会を構成する各市町村の観光協会が負担に耐えきれずに脱会していくという状況もあり、県下一丸となった取組が十分に行われてこなかったという指摘も出てまいりました。そういうこともございまして、それぞれが役割を担うという整理がここでなされているわけでございます。

地域別観光ビジョンの概要

地域別観光ビジョンとして、県下 7 ブロックにおける基本的な取り組みの考え方を整理

してございます。後で詳しくご説明しますが、7 ブロックに共通しているのは、体験ツーリズムでございます。体験を通じて旅行者をおもてなししようということでございます。それも通年で受入が可能な仕組みを作っていこうということでございます。これが 7 ブロックに共通して流れているイメージでございます。

嶺北地域　嶺北地域のビジョンも示されております。今日はモンベルさんも来ておられますが、嶺北の観光ビジョン作成に当たっては、地元で実践されている方々にお集まりいただいて、中身を作っていただきました。内容は、実践者たちにより積み上げられたものであり、現実に自分たちがやっていけるであろうことがここに集約されていると理解しております。策定の背景には嶺北地域全体にグリーンツーリズムを展開しようという意気込みがあります。また、エコ・環境という面で言えば、県は全国に先駆けて森林環境税を導入しましたし、四国 4 県が連携して「四国山の日」を制定してこの嶺北の地で山や水の大切さをアピールするなど、官民挙げて、山や水の環境保全に力を注いでいます。今回、日本政策投資銀行さんの方からご提案いただいたエコツーリズムのフィールドとして、嶺北地域を推薦した次第です。特に本山町は体験ツーリズムを推進していこうという動きがあること、また汗見川の流域を中心に流域保全活動が盛んであることから、エコツーリズムの適地ではないかということで、県もできるだけサポートしていこうと考えているところでございます。

このように県の観光ビジョンは現在できつつあるということでございます。まだ最終的なものではございませんので、このような説明になりましたがご了承いただきたいと思います。私の報告は以上でございます。

司会【安藤】

どうもありがとうございました。続きまして、本山町の方から本山町の概要と町内におけるエコツーリズム対象資源、エコツーリズムに関するこれまでの取り組み、それからこれまで積み重ねられてきた勉強会の成果、今後の課題、問題意識等につきまして本山町企画課ツーリズム推進室の大西室長よりご報告をいただきたいと思います。ではよろしくお願い致します。

本山町の概要及びエコツーリズム実施にあたっての問題意識

【本山町企画課ツーリズム推進室　大西室長】

皆様おはようございます。よろしくお願いします。本山町ではツーリズムに取り組み始めたばかりですが、こうした形で県の支援をいただき、また飯田市で本物体験を推進されている井上室長にもご臨席いただき、いろいろご議論いただけるのは、まだツーリズムに取り組み始めたばかりである本山町にとって大変良い機会であると思っております。それでは本山町の概要についてご説明をさせていただきたいと思います。

本山町については、先程後藤さんがお話しされた時に地図等をご覧になっていただいたので、お分かりになったと思います。本山町の人口は 4,300 人でございまして、地理的には四国の真ん中の辺りに位置してございます。高知市や高松市から車で 60 分くらいでございますし、徳島市や松山市からは 2 時間くらいの位置にございまして、立地的には非常に来ていただき易い場所にございます。また高速道路の大手インターチェンジが隣町にございまして、そこでおりていただけば、15 分でラフティングやカヌーの体験をしていただける場所へ行くことができます。そういう面では非常にアクセスが良いと考えております。まだ具体的なプログラムを組んでツーリズムの推進を始めたわけではございませんが、本山町は平成元年頃からアウトドアスポーツを振興しようと取り組みを進めております。吉野川の源流域は非常に変化に富んでおりまして、町もカヌーに取り組んでおります。今日もモンベルの方がご出席されておりますが、モンベルの社長さんにご協力いただいて、日本初の「カヌー大学」を開校し、カヌー愛好者を増やしていこうという取り組みも行いました。現在では地元に指導者もおりますし、来て直ぐに指導してくれる会社もございます。ですから既に一定の指導者や受入組織もできたということで、特にイベントのようなものは実施しておりませんが、定期的なカヌー競技会やツーリング、川遊びなど、「カヌーのメッカ本山」ということで、来町していただいているところでございます。

また平成 14 年に高知国体がございましたが、そのためにクライミング施設の整備をしております。四国 4 県には本山町以外に、天候に左右されずにクライミングができる施設はございませんので、クライミングスポーツのメッカとして活用を進めていこうとしているところでございます。アウトドアスポーツ関連での来町者数ですが、平成 15 年の実績は、クライミングセンターに 1,590 人、カヌーでは、一般の船遊びでの来町者を含めればもっと多くなりますが、本山町に泊まってカヌーを楽しむ人の数は、年間 500～600 人という数字になっています。その他、汗見川等のキャンプ場に来た人の数は、年間 1,509 人ということで、アウトドアを楽しみに来てお金を落として行かれた方の総数は年間 3,000 人を超えております。それ以外にも遊びに来て泊まらずにそのまま帰る方もおられますので、実

際の来町者はもっと多いのではないかと思います。

こういったアウトドアスポーツへの取り組みもしておりますが、他にも各地域での地域づくりと体験交流に向けた取り組みも今日は紹介させていただきたいと思っております。

本山町の概要

本山町の地図を見ますと、真ん中を吉野川が流れております。そして地図の上方、北部地域には吉野川の支流である汗見川が流れております。今日視察に行っていただく沢ヶ内小学校という休校になった学校の校舎は、こちらにございます。この汗見川流域には行政区が 6 つありますが、流域に活性化委員会がございまして河川の環境保全や地域活性化に取り組んでおります。具体的な活動としては、河畔林整備を行っています。これは川から道までの間の植林を、これまでの杉から広葉樹に変えていこうという樹種転換の活動でございます。この整備をこれまでに 2ha 程行っております。平成 16 年から地元の青年達がボランティアとして自分たちの活動の中で、河畔林の下草刈りをやっております。川の岸辺が非常に綺麗なので、これを活用して体験ツアーの開催や健康づくり、森づくりなどを進めております。その他、地域外から木に関する団体の方が見えて木工をやったりする、そういう交流事業もこの地域で行われています。北部地域では、白髪山という山を挟んで行川という川があるのですが、その流域に上関と下関という地域がございまして、この地域には、活性化に取り組んで行きたいということで結成された活性化協議会という組織がございます。河岸の伐開（川が見えるようにする）のような活動もしております。また、跡継ぎがいないために耕作のできない遊休農地が地域内に出てきたということもありまして、農地の有効利用ということで都市との交流も含めた形で、貸し農園を今年の 5 月から開業しようとしています。

本山町のツーリズムに関する取り組み

他に本山町における活動と致しましては、吉野川の南の地域では、北岸はほとんどが森林地域ですが、南岸地域は稲作や施設園芸などが行われる農業振興地域でございます。大石、古田、吉延といった集落では、女性の方が農家民泊の取り組みも進めていきたいということで、研修などを行っております。皆さん施設園芸などで非常に多忙な方達ですので、農閑期の時間のある時期に研修などを行って、山中に自生する葛等いろいろな花を使ったリースづくりをしたり、正月には門松づくりをしたりという活動をしており、女性達が非常に元気な地域でございます。本日視察に行っていただきますが椎茸生産者が中心となって椎茸の収穫やこまうち（植菌）作業などの体験事業もこちらでは行われています。昨年は、一部ですが宿泊も可能ですということで農家民泊を受け入れており、今年も引き続き実施していこうということで検討されております。

本山町では地域づくりの一環としてアウトドアスポーツの振興に取り組み、「アウトドア

の里づくり」を進めております。総合的に地域振興をしていこうという方針のもとで「アウトドアの里づくり委員会」を平成 16 年 3 月に設置しまして、農家民泊や「農業体験の里」「青少年交流」「スポーツ・文化・合宿の里づくり」を目指して研修や検討を進めております。委員は実際に地域づくりを進めている方や体育会の会長さんなどからなり、直ぐできることから始めていこうということでやっております。これまでの協議の中で具体的になっているのは、クライミング施設は既にできておりまして、他に集会所での宿泊を併せた形でスポーツ合宿の振興に取り組んでおります。これは大学、高校、一般の山岳クラブをターゲットにして、スポーツ合宿の受入をしていこうということでございます。資料に付けてございますが、パンフレットも作りました。これに関しては知り合いの先生に相談したところ、山岳関係の合宿は受け入れてくれるところが少なく、非常に不便であるという話もあり、こういうクライミング施設があるのだから、それを売り物にしてダイレクトメールで売り込みをしております。事務局は地元の観光協会となっておりまして、これは一つの形になっていくのではないかと期待しております。

交流人口は増えておりますが、それでもまだまだ体験メニューが確立したわけではありませんし、農山村の魅力を活かした取り組みが十分に行われていないのが現状でございます。

エコツーリズムモデルツアー

次にモデルツアーの設定資料（右図）をご覧下さい。今回皆さんにご議論いただくモデルツアーのプランを作ってみました。設定人数は 32 名で一泊二日という話でございましたので、それに合わせて作成致しました。人数的には最大で 40 名まで宿泊可能でございますが、今回は中型バスで行動ができるようにということで 32 名という人数設定にさせていただいております。場所としては吉野川及び沢ヶ内小学校周辺での活動ということに致しました。香川県をターゲットにしたプランでございまして、香川県から見ますと本山町は水源地域というイメージが定着しておりますので、やはり吉野川を中心とした体験ツアーを行います。吉野川の眺めを楽しむだけではなく、皆で力を合わせて行う体験であることから教育的な意味も大きく、また吉野川をもっと良く知ってもらいたいという理由からラフティングを採り入れたわけでございます。約

モデルツアーの設定

○費用等料金設定について
① 宿泊料　2，300円（宿泊、布団）
② 食事代　5，700円
　1日目　昼食（弁当）、夕食（バーベキュー）
　2日目　朝食、昼食（そば打ち体験含む）
③ 体験料　5，000円
　・ラフティング、木工づくり
合計額　13，000円

設定
・本山町までバス（中型）で参加と移動もそのバス使用で試算

○体験メニューの実施主体
ラフティング　㈱モンベル
汗見川あそび　汗見川活性化委員会
バーベキュー　本山町観光協会
そば打ちこんにゃく作り　汗見川生活改善グループ
木工作り　汗見川活性化委員会、れいほくNPO

○継続性について
①食事について
・1日目の昼食の検討が必要
・バーベキューは夏場限定となる
②体験について
・ラフティングや川遊びについては5月から10月までが限界か検討
・自然景観を楽しむ点では、この季節となる
③その他
・連続での実施は、受け入れ側で負担が生じる
・宿泊施設の風呂等がなく（シャワー1基のみ）不充分さがある

７㎞の川下りを行います。このラフティングの所要時間は約 3 時間ということで検討しております。吉野川でのこうした川遊びの体験が終わった後は、淵や瀬がありいろいろな魚のいる汗見川へ移動していただいて、ここでも川遊びを体験していただきます。汗見川での川遊びでは、仕掛けを作って魚を獲っている人が地元におりますので、その方にガイド役になっていただいて「川漁しかけ」を楽しんでいただきます。これは透明のテグスに針をつけて夜のうちに仕掛けておきます。そして翌朝行くとウナギなどの魚が獲れるわけですが、そういうしかけ漁の体験もしていただくことになっています。その後宿舎の沢ヶ内小学校に向かいますが、夕食は８人１テーブルで土佐和牛や地元の野菜、米などでバーベキューを楽しんでいただきます。バーベキューパーティーが終了後、入浴していただきますが、集会所シャワー室を利用していただきます。そのために現在１基だけしかないシャワーの増設を早急に行うことを考えておりますが、近隣の協力家庭の風呂に４人一組で入れていただくというプログラムも考えております。入浴後、お子さんにはあまり面白くないかもしれませんが、山や川の恵みなどの物語のビデオがございますのでそれを観てもらうか、あるいは直接話をする方が良いか、まだその辺は煮詰まっておりませんが、そうしたことを考えております。これが１日目の日程でございます。周りには街灯も何もありませんから、電気を消すと真っ暗になります。そうした真っ暗な状態というのも一つの体験ではないかと思っております。

エコツーリズムモデルツアー（プラン）

プラン受入人数　３２名

日　程・場　所　1泊2日・吉野川及び沢ヶ内小学校とその周辺

日　程	第　１　日　目	時　間	第　２　日　目
午　前		午　前	
		７：００	起　床
		７：２０	朝　食
			＊　地元生活改善グループ
			・集会所に集合
		８：３０	体験場所へ移動
９：００	香川県出発	９：００	体験内容
			＊　田舎料理体験
			・そば打ち・コンニャクづくり
			・林業体験
１１：００	本山町へ到着		間伐体験、山の恵みで木工づくり
	昼　食	１１：３０	
			昼　食
１２：００	体験会場へ移動		山菜料理と田舎料理体験で作った物を食べる
午　後		午　後	
１：００	・吉野川での川あそび	１：００	本山町出発
	＊　ラフティング体験		
３：３０	（汗見川へ移動）	３：３０	香川県着
４：３０	・汗見川での川あそび		
	・汗見川釣り		
	・川漁しかけ		
５：３０	終　了		
６：００	宿　舎		
７：００	夕食準備		
	＊　土佐和牛バーベキュー		
	（野外でパーティー形式）		
８：００	入　浴		
	＊集会所シャワー利用		
９：３０	＊山や川の話し		
	就　寝		

２日目は７時に起床して前日汗見川で行った「しかけ」を上げに行くことを考えておりま

す。上手い具合に魚がかかっていれば昼食のテーブルにそれが並ぶわけですが、獲れない場合、それはそれで仕方がないということで、子供達に仕掛けを上げに行ってもらうことにしております。朝食は休校中の小学校の給食室で取ることを考えております。朝食後の午前中は、まず「林業体験」ということで山林の間伐を体験していただき、その後木工を体験してもらいます。その後、そば打ちとこんにゃく作りを体験してもらい、作ったそばやこんにゃくなどを昼食に食べてもらいます。そして後片づけを行った後、午後本山町を出て帰路につくという日程を設定させていただきました。よろしくお願い致します。

なお、このツアーの料金設定は合計で 13,000 円でございまして、先程申しましたが 32 名ですと中型バスで行動可能でございますので、中型バス使用という前提で試算をいたしました。それから体験メニューの実施主体でございますが、ガイド役を引き受けてくれる方がいるかどうかということですが、今提案した体験メニューにつきましては、ラフティングについては、モンベルさんはラフティング関連の商品で実績がございますので問題はなかろうと思っています。それから汗見川での川遊びやそば打ち、木工などにつきましても、これまでの体験授業や交流事業で回を重ねておりますので、実施可能でございます。実施主体は名前が幾つかございますので、受入の総合的な窓口になるところとして、観光協会あるいは汗見川活性化委員会を窓口としたいと思いますが、できればコーディネーター役も決めたいと考えております。また食事については、バーベキューは夏場に限定されます。体験は通年できますが、ラフティングについては、対象が小学生ということもあり、5 月から 10 月までということで検討しております。自然景観を楽しむということについては、この時期ではないかと考えております。ですからこのモデルツアーは 5 月から 10 月までの商品になるのではないかと考えております。それから連続的なツアーの実施は、いろいろな行事もありますので調整が必要だろうと考えております。それから宿泊施設の風呂の問題がございます。これは明らかに不十分でございますので、来ていただいた方に負担にならないよう、早期に解決しなければならない問題でございます。

次にモデルプラン以外の体験交流プランですが、昔から行われている伝統行事や文化等を採り入れた体験プログラムが実施されております。これまでに実施されたプログラムについて紹介させていただきますと、まず椎茸体験ができます。それからカヌー、クライミングなどがモデルプラン以外のものでは体験が可能でございます。平成 17 年度に体験メニューの素材としてどのようなものがあるか、聴き取り調査を行い、どのようなもので受入可能であるのかを把握し、メニューの幅を拡げることを検討中でございます。

テーマに沿った町の問題意識

次に「テーマに沿った町の問題意識」ということで、内容が整理されておらず大変恐縮ですが、ご説明させていただきます。まずテーマ①の「プログラムーモデルツアーの実現可能性と更なる充実のための具体案」ですが、吉野川を活用したラフティングやカヌーに

つきましては、実践している体験メニューですので問題はなかろうと思っております。それ以外のものの受入については、まだ検討もしておりませんので、説明や振興について研修やマニュアル作りが必要だと考えております。

ツアーを定期的に期間限定で実施するにしても、やはり受入窓口やコーディネーター役が必要であると考えております。本日視察する沢ヶ内小学校には、今年の 7 月に 2 回、小学生が体験ツアーで宿泊することになっております。一般の方も 5 月と 8 月に体験ツアーで宿泊することになっておりまして、計 4 回の体験ツアーを受け入れることになっております。こうした経験を踏まえて、研修を行いたいと思っております。また受入ができるように講習会もやっていきたいと考えております。今回は受入可能施設として沢ヶ内小学校での宿泊を提案させていただいているわけですが、校舎を宿舎として活用する場合には、制約もございます。現在は休校中で管理は本山町教育委員会が行っていますので、一時的な宿泊であれば全く問題はございません。仮に目的外使用に当たるとしても、それは規則を変更すれば問題はなくなると考えておりますので、宿泊施設としての使用について、余り大きな制約はないと考えております。ただ、先程も申しましたがシャワーについては、現状では対応が困難になるのではないかと思っております。ガイド役については、資源や活用できるメニューの掘り起こしをしながら、ガイド役のプログラム研修を行う必要があると考えております。まだ体験ツアーで実践をするだけで、ここでどういう話をするかといったマニュアルは全くございませんので、作成する必要があるのではないかと思っております。

また今後用意しようと考えているプログラムとそれに伴う課題ですが、豊富にある森林資源と川遊びの体験をツアーとして確立していきたいと申し上げましたが、今年の 4 月と 5 月に汗見川で仕掛け漁を実際にやっておられる方とプログラム担当者の研修を行いたいと考えております。それから、川での遊びに加えて、山が近くにあるわけですから体験で何か木を使って物づくりができないか検討しております。スプーンや鉛筆など木で自分だけのオリジナルな物を作るという体験ができないか、どうすれば良いか現在検討中であります。その他、農業体験プログラムや吉野川を使ったツアーなどの取り組みでは、ラフティングを行っておりますし、カヌー等の体験教室については、既に受入を行っております。「アドベンチャーキャンプ」でありますとか「山の丸ごと体験祭」などを町が主催または共催して行っておりますが、農業体験プログラムについてはまだ全く着手されておりません。

次にツーリストの受入施設ですが、昨年 11 月に沢ヶ内小学校で休校シンポジウムが行われ、先進地事例の紹介などが行われました。参加者は地域の皆さんが中心でしたので、学校施設を使ったツーリズムの取り組みという研修を行いました。また大学生の皆さんから校舎の活用方法に関する提案をいただきました。かくれんぼをしたらどうかとか、お化け屋敷を作ったらどうかといった幅広い提案がございまして、最優秀賞を取ったのは「わゝワールド」という提案でした。これは「和み」「笑い」を始めとする５つの「わ」を拡げて

いこうということで、一階を給食レストランにしたらどうかとか、二階、三階を家族向けの宿泊施設にしたらどうかという提案でございました。

なおシンポジウムの前段で 280 人の方にアンケートを採りまして、8 割の方に回答していただきました。このアンケートで一番多かったのは、高齢者のためのふれあい施設のような、安心して生活できる施設として活用するのが良いのではないかという意見でございました。また地域外との交流に使っていこうという意見もございました。今後も大学生に参加してもらって、自分たちの暮らす地域をどうしたら良いかを考える場を作って行きたいと考えておりますし、施設のツーリズムでの活用について考えていきたいと思っております。モデルツアーの受入施設としては、本山町が直ぐに対応できる施設は沢ヶ内小学校であると考えております。木造ですし、自然に囲まれておりますので、自然を活用した体験施設として活用していきたいと思います。またスポーツ合宿のための施設は「プラチナ」周辺にございますが、そういう集会所を利用したスポーツ合宿を受け入れることができます。人数で言うと大体 50 人くらいの受入ができますので、合宿の受け入れもやっていきたいと思います。現時点で受け入れ態勢ができているのは、今申し上げた沢ヶ内小学校と集会所の 2 カ所でございます。農家民泊につきましては現在研究をしているところでございますが、様々な環境づくりが重要だと考えております。

今後の運営体制ですが、モデルツアーにつきましては観光協会、あるいは汗見川活性化委員会と協議しながら受け入れ窓口と運営体制の確立を進めていきたいと考えております。スポーツ合宿につきましては、観光協会が窓口となって案内をしていこうという整理ができております。もちろん町も一緒になってこれを進めていきたいと考えております。モデルツアーでもスポーツ合宿でもコーディネーター役の養成が必要でございますので、町も一緒に取り組んでいこうと考えております。

マーケティングにつきましては、少し的外れになるかもしれませんが、マーケティングの対象は香川・高知などが中心になると思っております。香川からは毎年中学生がバスで全員であったと思いますが、嶺北地域へ「源流ツアー」で訪問しています。また「ドングリ銀行」など様々な交流が行われており、嶺北地域は吉野川の源流地域としての知名度が香川や高知などで高いわけでございまして、マーケティングの対象は香川や高知が中心になるのではないかと思うわけでございます。最近は、本四架橋ができた関係で近畿圏からも流入がございますので、近畿圏からの来客の検討もしたいと思っております。そのために「本物」「ここにしかないもの」の商品化が必要であると思っております。また PR はまだまだ不足していると思っております。

最後に地域間連携ですが、これまで嶺北地域で「子供交歓会」をはじめとして連携のための取り組みを行っています。嶺北は香川県との関係が深い地域でございますが、最近吉野川の「上下流」交流ということで徳島県の皆様がこちらへ来て、下刈りをしてくださるということも行われています。本年度は、土佐町と本山町は、近畿圏をターゲットとして

一泊二日の農作業で棚田の米作りを体験してもらうツアーを春と秋の 2 回計画しております。また夏場に川を利用した体験など、両町の資源を活かして体験交流事業を実施することを計画しております。

非常に分かりにくい説明で申し訳なかったのですが、今日はモデルプランを中心に、後程ご意見をいただけると思います。今回厳しいご意見やご提案をいただくことで、私たちの取り組みも磨かれると思いますので、検討会の中でご指摘やご指導をいただければと思っております。よろしくお願い致します。以上で説明を終わらせていただきます。

司会【安藤】

どうもありがとうございました。日本政策投資銀行、高知県、それから本山町という順番で、非常に駆け足でございましたが発表していただきました。本来ならここで、ご質問等をお受けしたいところですが、時間の関係もございますので、ご質問等は午後の検討会の場でお願いしたいと存じます。

＜検討会（午前の部）終了＞

（2）．現地視察

①山下農園

本山町内で有機農法を営む山下農園を視察。現在ネギが栽培されている畑にて、土の持つ本来の力を活かした、無農薬栽培に関する説明があった。また、18 年度には本山町で有機農法の学校を立ち上げる計画もあり、ツーリズムを通じた食の安全意識が高まればいいとのコメントがあった。また吉野川流域の保全を考えるためには、有機農法による農地の環境保全が必要である等の意見も述べられた。修学旅行生等の受入にも前向きであり、住んでいる人が楽しい地域づくりを考えていきたいとのこと。

（有機農法について説明する山下一穂氏）

（説明を聞く視察会参加者）

②沢ヶ内小学校（休校中）

本山町でエコツーリズムを行う際の宿泊施設等としての活用が検討されている、休校中の沢ヶ内小学校を視察（参考資料 2 参照）。汗見川生活改善グループによる、地元食材を使った昼食の提供がなされた（手打そば、山菜すし、煮物等）。こうした地元食材を使った昼食も、エコツーリズムのプログラムに組み込むことが可能であるが、グループ参加者の高齢化といった問題もある。

（汗見川生活改善グループによる昼食提供）

（地元食材を利用した昼食）

続いて校舎内及び体育館を視察。地理的には汗見川に近接し、また校舎内は木材がふんだんに使われており、状態は非常に良い。浴室設備がほとんどない（シャワーが１台のみ）ものの、宿泊施設への転換等、活用が充分に可能な状態にあることを確認した。

（沢ヶ内小学校内部）

（沢ヶ内小学校近くを流れる汗見川）

沢ヶ内小学校の校舎は外観も遜色なく、また内部は地元木材をふんだんに使った、木のぬくもりを感じさせる造りである。また立地面でもグリーンツーリズムの資源となりうるような汗見川の清流沿いにあり、併設されている体育館も利用が可能な状態にあることから、エコツーリスト向けの宿泊施設や自然体験施設としての転用は充分に可能であろう。

浴室施設が不足していること等問題点はあるものの、エコツーリズム実施の中核施設となりうるものと考えられる。

（沢ヶ内小学校の体育館）

（体育館内部）

③吉野川ラフティングコース

５年前より本山町に事務所を構える Mont-bell が運営している吉野川のラフティングコースを視察。大歩危地区で実施しているラフティングと比べて参加者は少ないが、流れが比較的緩やかであり各年代層が参加できることから好評である。但し、早明浦ダムの放流時間に併せて運営をしなければ水量が足りないことから、放水のないゴールデンウィーク中は運営できない、といった問題点もあるとのこと。

また、ラフティングの途中で汗見川に寄って、川遊びをする体験も好評であることから、川遊び等を加えたメニューも考えているとのこと。

（写真左側吉野川と右側から合流する汗見川）

（ラフティングを行う吉野川）

④棚田

本山町内大石、吉延地区の棚田を視察。棚田は管理がなされており、美しい棚田の景観を保たれている。また眺望も良くエコツーリズム対象資源として活用できる可能性が高いものと感じられた。

（本山町内の棚田）

⑤椎茸栽培農家視察

しいたけ栽培を行っている、大石氏のビニールハウスを視察。同氏は農業体験プログラムの受入実績があり、今後は滞在型観光で同施設を活用したいとのこと。しかし、集客や現地までの交通手段の確保等につき、問題点を感じているとのこと。

（椎茸栽培ハウスの内部）

＜現地視察終了＞

（3）．午後の部

コーディネーター【飯田市エコツーリズム推進室井上室長】

午前中はお疲れ様でございました。最初に午前中に視察して、ご説明を受けたことについて申し上げます。視察させていただいて、これは良い素材がたくさんあると思いました。特に川や先程見てきた棚田など本当に良い地域資源があるという感じを受けました。これらは誰しも分かる資源でございまして、さらに深めていくともっともっと面白いものがあると思います。私どもが見ると、こんなに凄い資源があると思うものが、きっとあると思います。しかしそれらの資源の活用は、それぞれがバラバラに行われているのでは駄目で、今日お集まりの皆さんが住民の方を巻き込んで、資源探しを行い、それを上手くプログラムにして、きちんと PR していくことが大切です。そういう中で、実際にモデルツアーのプランなどがあるわけですから、午後の検討会では、それを参考にしながら方向付けをすることができたら良いなと思います。

私はこのようなことが不慣れでございますが、皆様のご協力を得て、方向付けができるところまで持って行きたいと思います。本日はテーマ 1 からテーマ 5 までの論点を設けました。上から順番に申しますと、①がプログラム、②ツーリスト受入施設、③運営体制、④マーケティング・PR、⑤地域間連携となっております。

①プログラム

では早速テーマ①に入らせていただきます。ここでは数名の方のご報告をいただくことになっております。よろしくお願いしたいと思います。最初の報告者は真辺由香さんでございます。具体的なプログラム等を考えていく中で、あるいは自分たちで実践していく中で、考えられたことについて、お話しいただきます。では真辺さんお願いします。

【女性グループ活動　真辺氏】

いきなりご指名を受けまして、ちょっと戸惑っておりますが、先程視察してきたものが、私のやって来たことと上手く噛み合うかどうか自信がありませんが、お話しをさせていただきます。

私は地元の食材を使ったパンとケーキの製造販売を行っております。私たちの「マムのケーキ」は地元で獲れたお米を粉にして、米粉のパン、米粉のケーキ、そして米粉のお菓子を作っております。実は一昨年地元にたった１軒しかなかったパン屋さんが廃業しました。そこでその機械を貰い受けまして、昔ながらの小麦で作る「東京パン」の作り方を習いまして、それと併せて米粉のパンやケーキ等を製造販売しているわけでございます。地元の食材を活かして、安心・安全なものを子供達や地域の人達に提供し、さらにはそれを地域外にも拡げてゆきたいということで取り組んで来ました。

本山町はエコツーリズムに力を入れて取り組んでおりますが、ツーリズムに私たちも乗っかって、体験、交流、そして物作りでの体験・交流を皆さんと一緒にやっていきたいと考えております。

今までの活動としては、JA 土佐れいほくの「フレッシュミズ部会」で地域の人を巻き込んだイベントをやってまいりました。とにかくイベントを行うのが大好きということもありまして、地元の食材を使った料理、例えば嶺北八菜（ハッサイ）を使った料理を出すビヤホール、それから JA 土佐れいほくの土佐町の田井支所のとなりに「れいほく八菜館」という直販の店がございます。そこを使って女性部が月に１回、「田舎祭り」というイベントを行っています。そこでは嶺北ビーフを使ったバーベキューを売ったり、嶺北ビーフハンバーガーを売ったりしております。もちろんこれらの料理には地元で獲れたトマトやレタス等を使っております。こういったイベントの中で外部の人達に嶺北の良さを感じてもらうために、以前土佐の里へビラを配りに行きましたが、その結果いろいろな人達が市内から来てくれました。このような田舎にどうすれば人を呼ぶことができるかということで、いろいろチャレンジをしてまいりました。

この検討会が開かれ、ツーリズムに対する取り組みが大きく広がってくれればと、大変嬉しく思っております。これからもこういう試みに大いに関わっていきたいと思っております。まとまりのない話で申し訳ありません。

最後に私どもの PR をさせていただきます。今日召し上がっていただくお菓子は、地元のお米で作ったパンでございます。できる限り地元の食材を使って作っております。牛乳も卵もすべて地元のものを使っております。それから先程申し上げた「東京パン」も持ってまいりましたが、地元で獲れた小麦を使ったパンでございます。それから本山町で獲れた小麦を使ったクッキーもございます。是非食べてみて下さい。

【井上室長】 どうもありがとうございました。今お話ししていただいたことはそのままプログラムになると思います。パン作りのプログラムとして作業場ではなく露天で焼くこともできますか。

【真辺氏】 もちろんできます。今日持ってきたパンとは少し違ったものになりますが、ピザパンなどいろいろなものが作れます。石釜などを使ったり、簡単に直接火の上にかけてパンを作ったりすることができます。

【井上室長】 そうすると生地を練るところから始まってパンを焼くところまで、所用時間 3 時間くらいのプログラムがもうできているということですね。ハンバーガーやピザなども入れれば、これで 2 つのプログラムができます。ところで真辺さんのグループは何人おられるのですか。

【真辺氏】 正式メンバーは 3 名です。常時活動しているのは 2 人で、もう一人は仕事を持っているため、時々参加します。その他パートで来ていただいている方が 4 名ほどおりまして、交代で仕事に入ってもらっています。

【井上室長】 そうすると、先程おっしゃっておられたあちこちのイベントに出ておられる方を含めれば、何十人にもなるわけですね。

【真辺氏】 はい、フレッシュミズ部会には下部組織があります。私たちはまた別の部会を作っておりまして、JA 土佐れいほくの他支部の方が 4 名、土佐町と本山町の者が 10 数名おります。これはフレッシュミズ部会とは別に、女性部に属していてイベントがやりたいメンバーが集まって作られた会でございます。そういう方を加えればもっと人数が増えます。それから、本山町で 5 年ほど前に、農家の嫁が集まって後継者の会を作ろうということになりました。それは「ローズマリーの会」と申しまして、10 数名のメンバーがおります。他に本山町内だけで組織した女性達のグループがもっとございますので、そういう人達も巻き込んでいければ、もっと多くのイベントができると思います。

【井上室長】 是非そういう方達を、これは楽しいからということで、どんどん引き込んでゆくと良いと思います。お話しを聴いていると既に 10 数名のインストラクター候補がいるということですね。今日お昼を作って下さった生活改善グループの人達もそうですし、こういった若い方達のグループもあるということですから、プログラムを作っていく上で食は絶対に外すことができません。インストラクター候補がもう何人もいるわけですから、基

礎が既にあると思います。後は、どういうプログラムを作っていくかということだと思います。

続いて、川村さんに、今日の視察の内容と今後の課題について、お話しを伺いたいと思います。

【汗見川保全活動　川村氏】

今年 4 月 24 日に岸ツツジ体験ツアーを計画しております。これは過去 5 年間実施してきたのですが、参加者の確保に苦労しています。料金設定についても、新聞などを見ますといろいろなイベントがおこなわれており、地域では 3,000 円に設定しています。ウォーキング、木工体験、もちつき体験など、中身の濃いものにしようということで、3,000 円で実施しています。参加者にアンケート調査を行ったところ、「自然が美しい」とか「地域の人と交流できて非常に良い」、あるいは「また来てみたい」というように、参加した方には大変満足して帰っていただいております。しかし、参加人数が年々増えるという傾向にはございません。地域女性グループも高齢化が進んでおり、今後は若い女性の参加の時期にあると言えます。地域には田舎料理、そば打ち、味噌造りなどでも優れた技術を持っている皆さんがおりますので、そういったものの伝承を通してイベントにも参加していただきながら、地域の活性化に取り組んでいきたいと思っております。

もう一点は、現在休校中の沢ヶ内小学校の有効活用について地域全体の取り組みで、宿泊の受け入れ態勢を勉強しながら、進めていかなければいけないということで、本年度から勉強会を作って進めていこうという動きが出ております。

【井上室長】 ありがとうございました。課題としている生活グループの高齢化ですが、高齢化は全国的に進んでいます。なかなか次の世代が入ってこないわけです。本山町にはあるかどうか知りませんが、「婦人会」とか、昔はよく「若妻会」という組織があったのですが、そういうものへの参加がどんどん少なくなって、自然消滅してしまっている地域が多いわけです。是非一つ参考にしていただきたいのは、地区だけでは維持するのが難しいわけですから、町全体として女性達の勉強会で伝統料理の伝承などをやっていただきたいと思います。女性達が受け継いでいかなければならないものは多いと思います。それができるような勉強会をできるだけ多く作っていただいて、若い人達に参加してもらい、運営をしてもらうと良いと思います。町が中心になってやると参加者の自主性が失われてしまいますので、町がおこなうのは参加する機会を作ることにとどめ、後は参加者に自主的に運営してもらうというやり方を採ると、女性達が元気になってくるというところがあると思

います。

私どもの市では、レディース・ファーム・カレッジというものを、かれこれ 15 年やってまいりましたが、それによって女性の方達の社会参画が増えてきました。カレッジには 100 名くらいの方がいたのですが、カレッジという名前があるからには、卒業させたかったのですが、皆卒業しませんでした。いつまでも留年していると新しい人が入って来られなくなります。留年している人が余りにも多くなりすぎまして、実は一昨年強制的に卒業させてしまいましたが、現在「アグリ女学院」というのをつくりました。これは農家の若いお嫁さん達を育成していこうということでございます。ただ、皆さん中で仲良くなると内部では団結するのですが、外部から新しい人が来るのをなかなか受け入れなくなってしまう傾向があるので、新しいグループを次から次へとどんどん作り、それらのグループを何かイベントなどがあったらその機会に連携させることもできます。ですからこういったやり方が良いのではないかと思っております。また後程「学校」についてはまとめてお話ししたいと思います。

続きまして、ラフティングの関係で先程説明していただいた野村さん、お願いします。

【Mont-bell 本山　野村氏】

「実現の可能性と更なる充実のための具体策」ということでお話しをさせていただきます。これまで大西さんはじめ、何回か町の活性化のためのプランをだされ、現実に実施されているプランもあるのですが、実現のための具体策というところでいつも手詰まりになっているというのが現状です。その一番の問題点は、ここにも記されているように「受入から最終までのコーディネーター役が必要であり、人づくりや組織作りが重要」とういことであります。そこで飯田市についてお伺いしたいのですが、飯田市ではどのような形でコーディネーター役の人間や組織の育成をしてきたのでしょうか。

【井上室長】 受入組織についてですか？

【野村氏】 例えば、今回プランとして出されていますが、ラフティングツアーが入っていて、その後、汗見川での川遊びや沢ヶ内小学校での宿泊などが入っていますが、私どもはラフティングを商品としてツアーを販売していただいて、運営していただくわけです。当然、私どもの方も窓口として受け付けの人間を雇用しているわけです。今回このプランを詰めていくと、どこが窓口になり、その費用をどこが負担するかが一番問題になると思うのですが、いつもその問題が棚上げになったまま、こういう会が行われて実施に移されて

いくというのが現状です。正直言いまして、もうそんなことではやっていられないだろうというのが本山町のおかれている現状ではないでしょうか。先進地である飯田市ではこの問題をどのようにして解決したのかを、ここで伺ってみたいと思っております。

【井上室長】 飯田市では、最初は行政がきっかけ作りをするということで、行政が全部やりました。ですから受け入れから精算まで全部行政がやりました。現在は、南信州観光公社という組織を作り、ここがそれをやっています。飯田市で行われているラフティングは、趣味の会にお願いしてやってもらいましたが、そこが現在は会社としてラフティングを運営しています。現在ラフティングの会社が 3 社できています。こういう形でラフティングのビジネスが伸びたことで地元の人達が新しい会社を作ってきております。もちろんツアーの販売は公社を窓口とした販売です。ですから受付等も全て公社を通して行われ、手配等はすべて公社がコントロールしており、個別の販売・精算ということは飯田市では一切発生しておりません。そういうことになっております。

【野村氏】 そういう意味で考えると、本山町でもこのツアーをどこが主導権を持ち運営するのかということが重要で、それが決まればすぐにでも運営できる状況にあると現在私は考えています。

【大西室長】 その点については、今すぐに答えられるという話ではありませんが、野村さんのおっしゃる通りで、スポーツ合宿の話でもそうでしたが、どこが受け入れるかということだけで、何回も会合を開いたという経過もございます。役場が最初から最後まで関わるのではなく、どこかにお願いしたいという話もあったのですが、なかなかそれだけでは解決できないので、目途が経つまではかなりの部分で行政が表に出ていかなければできないのではないかと、考えております。常に行政が表に出るということはなかなかできないとは思いますが、観光協会や活性化委員会などと役割を分担しながらやっていこうということで、形が見えてくるまでは行政が積極的に関わっていこうということで、現時点では問題点の整理をしています。

【井上室長】 一番手っ取り早いのは行政が全てを行ってしまうことです。しかし、いつまでも行政がそれを続けていては決して地域振興のためになりません。飯田市でもある程度、態勢が整備された段階で、新しい民間組織ができた段階で、そこに全ての運営を担当してもらうという形にしていきました。行政ができる範囲というのは、最初のきっかけ作りだと思っています。最初にやる時に、将来は民間に全てを委せられるような基礎作りを意識しつつ行政は運営をしていかなければならないと思います。将来は民間が受入を担当できるような将来の態勢作りを行政は目指していかなければいけないと思っています。

【野村氏】 もう一点お訊きしたいことがございます。始めるに当たって飯田市の場合は行政主導で動いたわけですが、採算面でどうだったでしょうか。事業を興すに当たって採算面では、最初は赤字だったと思います。もちろんそれは予め計算されていたと思いますが、現在は黒字に転換しているのでしょうか。収支についてどのようなお考えも持って事業を進められたのでしょうか。

【井上室長】 やってもらう人達の側には、赤字は一切発生させておりません。最初の PR をはじめとして、行政が手を出した部分を赤字と考えるならば、赤字がでていると言えると思います。実際に個々のプログラムをやってもらう人達は誰も赤字になりません。

【野村氏】 私たちはエコツアー事業を、利益を追求するビジネスとしてやっているわけで、採算面を厳しく問われています。行政が介入して運営する段階で赤字であるとはっきり分かっていれば、民間の人間が仕事としてそれに関わっていくというのは、厳しいわけです。将来的にエコツアーを行うことによって、最終的には地域への経済効果がどうなるのか、長期的には採算の取れる事業になるという見通しがないと、継続することすら難しいのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

【井上室長】 要は、最初の立ち上がりで不採算になってしまうというリスクを負えるのは行政です。いきなり民間の方に不採算な部分を押しつけるというわけにはいかないと思います。そういう考え方で飯田市は、不採算になる部分を担ってきたわけです。しかし赤字とはいってもそんなに大きな額ではなく、上手くコントロールすれば大きな赤字を出すことはありません。単品のプログラムを個別にやっていたら赤字幅が大きくなりますが、本山町さんが持っている様々なプログラムをネットワークさせながら、上手く組んでいくことによって赤字になるリスクを低減させるということはできると思います。採算面を考える時には、本山町の人間だけで売ろうと思っても売れません。今日もお見えになっていますが、やはりマーケットのことを良く知っているプロフェッショナルに来てもらうこともやっていかなければなりません。行政の立場からの PR、観光協会の立場からの PR など、それぞれが自分の領域でやれることがありますから、そうすることでリスクを分散できますし、PR の効果も上げやすいと思います。

最後にもうお一方のお話を伺いたいと思います。先程の視察で椎茸栽培を見せていただきましたが、大石さん、椎茸以外で、飯田でもヒラタケ、ナメタケなどいろいろなキノコを栽培していますが、椎茸は菌が木に回るまでに大分時間がかかります。飯田では、原木に菌を植え付けて、キノコができるまでに 2 年くらいかかってしまいます。ヒラタケやナメコなどだと、春に菌を打てば秋には収穫できるくらい成長が速いのですが、そういう成

長の速いものを増やすということは考えていないのでしょうか。

【椎茸農家　大石氏】

組合として取り組んでいる中では椎茸をメインにしていますが、私のところでもヒラタケやナメコの栽培をしております。交流は、生産者が誇りを持って生産していることを伝えるために始めた事業でございまして、採算ベースに持っていくといった段階はまだこれからだと思っています。ですから、椎茸の栽培以外にも活動を拡げて、消費者との交流を深めていくというのは今後やらなくてはいけないことだと考えています。

【井上室長】 体験をしてもらうということになると、やはりハウスの中で栽培するのではなく、山の中で栽培しているものを採ってもらう方が良いと思います。天候によっては、椎茸が出たり出なかったりということもあるとは思います。できることなら、山にある木を持ち込むような工夫も考えられると思います。飯田市の場合は、最初から山にあるものだという考え方でやっております。そのため椎茸の場合だと天候によっては生えたり、生えなかったりします。

【大石氏】 椎茸の場合は、いつでも栽培施設内で生えているものを自然の中に持っていくことは可能です。ヒラタケやナメコの場合は、自然の中で適した気候や環境にならないと生えて来ませんので、時期の設定などで問題があると思います。雨の時は、過去２回ほどございました。しかし幸いにも施設内で栽培したものがありましたので、それで対応しました。自分たちの体験事業に限らず、本山町が掲げている体験プログラムの中でも川遊びやラフティングなどでは、雨期の対応をどうするかなどの問題点があります。天候によっては実施できない場合も出てくると思います。そういうことも想定していかなければならないと思います。

【井上室長】 飯田では基本的に「雨番組」を作っていません。しかし川のような場合、身の危険があるような時にも、「雨番組」がないから強行するのかというと、それは判断の要るところだと思います。今日の川の流れは、もっと増水した方が面白くなるだろうと思われるくらい優しい流れでしたが、やるかやらないかはその川を熟知している人の判断に任せなければならない部分だと思います。

雨番組は、「本来のプログラムはできなかったけれど、こっちの方がかえって面白かった」と言わせるぐらいのものでないといけません。「こっちの方をやって良かった」と思わせるくらいの内容でないといけません。「今回はできなかったので、また来て体験しよう」と思

わせるくらいの余韻をのこして雨番組を終了できるのが一番良いと思います。

私どものところでは沢登り体験のプログラムがありますが、沢登りの場合、水が出る箇所があります。滝なども登るわけですから、足を滑らすとそのまま滝壺に真っ逆さまというかなり危険なことをやっています。ですから雨の日には沢登りはできません。その代わり別のことをやってもらうのですが、それはその時々によって変わります。でも沢登りはしませんが、どういう場所を登るのか、場所を見てもらうところまでは行います。見せておいて、今日は増水しているのでできません。代わりに今日はこれをしますと説明すると、「次も来て、そのときは沢登りを絶対にやりたい」という人が必ず出てきます。やらせないことによってリピーターを生み出すということもあるわけです。天候条件によってできない場合にも、その対応の仕方はいろいろあると思います。キノコのコマ打ちでは、雨が降っていてもカッパを着ればできるのなら、雨天でも実施して良いのではないでしょうか。収穫体験は山の中でやれるのが良いと思います。

モデルツアーのプランを見せていただいて、いろいろ思うところはございます。全体としてみた場合のその実現可能性について考えてみたいと思います。まずツアー対象は小学生ということでございますが、実際の募集はどういう方法を採るのでしょうか。

年齢的には 5、6 年生を対象とされておりますが、当然障害児等も入ってまいります。これを排除するとできません。人数は 32 名、中型バスで移動するということですが、障害児が一人入るだけでスタッフの関わり方が全然違ってきます。安全面から始まっていろいろなところでいろいろと難しい対応があろうかと思います。その辺はやっていく中で考えていただいた方が良いのではないかと思います。これがこのプランを読ませていただいた時の私の感想でした。それから看護師なども常駐させておく必要があります。最寄りの救急病院にも、まず、こういうツアーがあるのでいつでも出動できる救急態勢を執っておいて下さいというお願いをしておくことが必要です。一泊二日ですから看護師が付いていなくても良いと思いますが、町の中で融通が効くのであれば、看護師を 1 名スタッフの中に加えておくと、安心感が非常に高まります。そういった意味で、看護師を確保しておくと良いと思います。

それから、中型バスに合わせて人数を 32 名にしたとのことですが、人数についてはもう少し詰めた方が良いと思います。要は、プログラム毎に適正な人数を決めていった方が良いということであります。ラフティングの場合、8 名一組ですから、4 挺必要になります。現在 4 挺が稼働しているとのことですが、それ以上の人数でも対応できるのでしょうか。

【野村氏】 お客さんの数に応じて、ボートの手配は調整できます。特に 32 名までなら大丈夫ということで出した数字ではありません。大西さん、この人数は役場の方で出した数字ですか。流れとしては香川県の小・中学生をターゲットにしたということは良いと思うのですが、一つの商品としてのクォリティをみたとき、食費等の費用や値段と中身の濃さ等

をみると、内容の割に値段が安いとは感じるのですが、金額は小中学生がお金を出して来ることのできる金額かと言うと、逆に高すぎるという感じがします。

【井上室長】 費用については、もう一つ別の資料を用意しているので、そのときにお話しをしたいと思います。ラフティングについては、柔軟に人数に対応できるということは分かりました。それからプログラムを見せていただきましたが、いろいろ盛り込み過ぎているというのが私の感想でございます。しかし、あちこちからやって来る小学生をこのスケジュール通りに動かしていくというのは非常に大変です。その辺がどうなのかと、これを見て思いました。それからプログラム上で、そば打ちをするというのがありますが、インストラクターの力量にもよりますが、5 人、10 人一組でやると、中には最初から最後まで全く手を出さない子供が出てまいります。できるだけ全行程で、子供達全員が手を出して体験できるように工夫をする必要があります。そのためには、ここでまたインストラクターの数を増やす必要が出てまいります。ソバを切るとなると包丁を使います。怪我をしないように注意をする必要があります。ソバを延ばすのは別に難しくはありませんし、自分たちで打ったソバを食べるわけですから、それなりの楽しさがあるので良いプログラムだと思いますが、怪我をする子供が出るという事態にならないようにしなくてはいけません。それからこんにゃく作りは余りお薦めできません。というのは余り面白がらないからです。こんにゃく作りは、余り人が集まりません。飯田でもモニターでこんにゃく作りの体験プログラムをやってみたことがあります。やってはみたのですが、全然面白がらないのです。こんにゃくについては、何故か感動がないのです。そういう飯田での経験がありますので、小学生向けのプログラムで、こんにゃく作りをして楽しいかというと、どうなのだろうかということを、ちょっと思いました。

ところで今日食事をした場所は、保健所の許可を取れているのでしょうか。そんなに難しくないと思いますので、実施する前に保健所の許可を確実に取っておいていただきたいと思います。町の実施するツアーで保健所の許可を取っていない場所で食事を出し、食中毒でもおきたら大変です。今後エージェントを使うようなことになったら、エージェントの責任問題にもなりますから、食事をする場所については、保健所の許可を必ず取るようにして下さい。

モデルツアーでは当地に着いて昼食を取り、午後 1 時から活動が始まるわけですが、子供達だけだとまとめ上げていくためのアイス・ブレーキング（注：氷のような堅い雰囲気を壊して、気軽に発言できる雰囲気を作ること）が必要です。一泊二日ですから、それぞれが体験して帰ってそれでおしまいということになると、結果的に何をやったのか印象が散漫なまま終わってしまうことがありますから、「良い町だったね。良い体験だったね。」という印象を付けるためには、少しアイス・ブレーキングのようなものが必要ではないかと思います。

後で川に入るわけですから、プロであるモンベルさんがするのですから上手くまとめるとは思いますが、親が付いていれば話は別ですが、いろいろなところから子供達がバラバラにやって来るわけですから、事故がないように内容を事前に相当まとめ上げておかないと、とんでもないところで事故が起きます。うちの職員でもソバ打ちに行って、足に縫うような怪我をして帰って来たという馬鹿がおりました。体験ツアーではこちらが全員をまとめていると思っても、一人だけ飛び出して行って怪我をするというようなことがあります。そういう点で、小学生は手間がかかるしまとめづらいですから、是非、設定の中身について熟考していただきたいと思います。バスに 2 時間乗ると、気持ちが悪くなる子が出ます。食事も摂れないという子供が出る可能性もあります。この辺の設定も工夫をした方が良いと思いました。

飯田にも子供だけを受け付ける「子供体験村」や「子供冒険村」というツアーがありますが、必ず親に対する事前説明会を行います。こういう場所でこういうことをやりますということを、親に来てもらって説明をします。そうすると親は安心しますし、親の方が来たくなります。そうすると、リピーターとして親子をつかまえることにもなるわけです。子供だけを対象にしたツアーの事前説明会で親の心もつかんでしまうということもできますから、是非こうした事前説明会のようなこともやっていただきたいと思います。

もう一つ気になったのは、ラフティングをやった後、場所を変えてまた汗見川で川遊びをするという流れがありますが、これはどうなのでしょうか。ラフティングの途中で降りて川遊びをして、それからまたラフティングというパターンなら流れがあると思いますが、ラフティング終了後にまた川遊びでは子供達は少し退屈してしまうのではないかとも思いました。但し当地の場合は、吉野川のラフティングポイントと汗見川の川遊びポイントが隣接しており、連続した実施も可能かと思われました。

次に費用ですが、先程も出ましたが、設定は継続できる単価設定なのでしょうか。細かく言うと宿泊代が 2,300 円だったと思いますが、布団はレンタルとしてクリーニング代がこれで出るのかどうか、食事代はどうなのか、あるいは体験料は非常に安い設定になっていますが、これで大丈夫なのでしょうか。先程お話しいただいたラフティングは 6,000 円だそうですが、内容と時間から評価してこれが正当な価格なのでしょうか。さらに木工まで入れると非常に安いような気もします。そうは言っても余り高くすると、子供の体験旅行にそんなにお金を出す親がいるかどうかとう問題もあります。実際には高くても子供のためならお金を出す親たちもいることはいます。そういう親たちにきちんと情報が伝われば参加する子供達も出てきますが、なかなか難しい点もあるし、逆に地元としてはこんなに安くては継続できないという問題もあります。それからバス代はどうなっているのか、この資料では良く分かりませんでした。昨日も申し上げましたが、モニターツアーは継続させるための実験ですから、1 万 3,000 円という料金設定が値頃なのか、きちんと評価しなければなりません。したがって単価の設定についてもう少し練っていただいた方が良いの

ではないかという気がします。皆さんいかがでしょうか。先程、モンベルさんの方からも単価の話が出たと思いますが、どうでしょうか。

【野村氏】 単純にこのプランで言うと、関わっている人に対する日当といいますか報酬は出ないだろうということが容易に想像できます。回数をこなすことで人件費はコストダウンできるとは思います。それから食材が結構豪華だと思います。ラフティングの費用に関しては、子供さんは一人 4,000 円という料金を設定しています。これは既に大西さんにもお話ししてあります。ですからプラス 1,000 円は、木工費用ということで算出しているのだと思います。

【井上室長】 そういうことであれば、体験料については何とかクリアーするわけですね。これのまま継続しても何ら問題のない単価設定だということですね。食事代や宿泊代はどうなのでしょうか。

【大西室長】 体験料につきましては、野村さんがおっしゃられた通りです。宿泊料はまだはっきりしていない部分があるため粗単価で出しております。布団はレンタルで一組 700 円ですのでそのまま使い、宿泊料は 1,050 円としております。残りは掃除等をする人の報酬として算出しております。夕食のバーベキュー代が 2,500 円、昼食のソバ打ち体験が 1,500 円、残りの 1,700 円は一日目の昼食代と二日目の朝食代という計算をしております。バスの費用は見ていません。現地でかかる費用が 1 万 3,000 円ということで余裕がないとは思いますが、赤字を承知で設定した単価ではないと思っています。しかし関わる人が何人いてその費用がどれくらいかという計算までは行っておりません。

【井上室長】 バスについては、チャーターするわけですか。料金を設定する際にはやはりバスの費用も含めてきちんと出しておかないと、後でクレームがつくということになりますから、バス代も含んだ金額設定を考えていかなければならないと思います。大人でもそうですが、子供達がおみやげを買う時間を是非作ってあげて下さい。おみやげを買うことで地元にお金が落ちますし、子供達の側からも何かおみやげを買って帰りたいという欲求が当然出ます。ですからおみやげを買う時間もツアーのスケジュールの中に設定しておいて下さい。それから就寝時間がちょっと遅いと思います。もっと早く寝かせて上げて下さい。川でいっぱい遊んできたら、もう話を聴くことはありません。しっかり遊んでくれば早めに寝かせて朝は早めに起こすということにした方が良いと思います。山や川の話は是非聴かせて上げた方が良いと思いますが、時間の設定はプログラムの流れの中で工夫して下さい。夜の暗闇で星空を見たりするのは大変良いのですが、いっぺんにあれもこれもと欲張らない方が良いと思います。モニターツアーは１回しかできないわけではなく、四季折々

に何度やっても良いわけですから、毎回地元の皆さんに負担をかけて、マイナスになっていくようなモニターツアーを組まない方が良いと思います。モニターツアーの回数を重ねていくことで、受入態勢が良いのかどうかを検証していくことが重要です。モニターツアーを2回、3回と行うことが必要です。その中で、プログラムの組み方を考えていけば良いと思います。ラフティングもできる季節とできない季節があります。できない時はどういうプランを立てるか、キノコがない時にはどういうプランニングをするかとか、その時々によって内容が違ってくるわけですから、プログラムを作る練習を兼ねてプランを幾つかつくって試してみて、最終的にどういうプログラムにするかを決めれば良いと思います。「最初からこれでいきましょう」ではなく、今回はこれでやってみようという姿勢の方が良いと思います。そしてできることなら、プログラムを作る時にはプロの方を入れていただいて、お客さんが満足するかどうかをきちんと評価してもらいながら作成していただきたいと思います。自分たちが良いプログラムだと思っても、売れる商品ではないということもあります。ですから是非プロの方を入れていただきたいと思います。今日もJTBさんに来ていただいております。きっと協力してくれますから、是非そういうことをやっていただけたらと思います。この話ばかりしていますと長くなりますが、重要なテーマだと思いましたので、少し時間をかけさせていただきました。

②ツーリスト受入施設

【井上室長】 続きまして、これに関連して宿泊等についてお話しをしていただきたいと思います。施設の管理権は教育委員会が持っているわけですね。指定管理者を特に定めるということは特に考えていないわけですね。先程も言いましたが保健所の許可、それから宿泊する場合は消防法上の許可、旅館業法の許可等が要りますので、その点は速やかに許可を取っておくことが必要だと思います。沢ヶ内小学校の校舎は古い建物だと思っておりましたので、耐震改修促進法への対応はどうなっているのか少し心配しておりましたが、あれならば問題ないと思います。それから、どうせならビジターセンターとしての機能や観光情報の発信基地のようなものを併設するのはどうでしょうか。スペース的には十分その余裕があると思いますので、地元の皆さんが協力して受入態勢を整えていくということも考えて良いのではないでしょうか。その辺を地元である川村さんはどのようにお考えでしょうか。

【川村氏】 沢ヶ内小学校の有効活用は、汗見川地域活性化の重要なポイントと考えています。汗見川の地域の美しい自然を活かした体験型のプログラムメニューを検討し、情報発信などについても積極的に進めていかなければいけないと思っています。

【井上室長】 将来的にはこういった機能も持たせることを考え、できるところから始めて

いけば良いと思います。それから、宿泊では農家民泊ということも考える必要があります。飯田の場合、農家民泊は僅か 3 軒からスタートしました。その人達が地域リーダーになり、民泊を受け入れてくれる農家を増やしながら進めてまいりました。集落や地域全体が農家民泊をしている数軒を支援するという格好で、認知されていったという経緯がございます。いきなり 10 軒押さえなければいけないとか、そういう話ではないので、やれるところからやってもらい、それを町も支援するということです。最初にやってくれる人達にトップリーダーになってもらい、それに対して次の人達が安心して付いて行けるという、そういう地域リーダーを作りだしていくということをやっていけば、農家民泊も進んでいくと思います。「あいつらが何か勝手にやっている」という感覚ではなく、地域で認知されるように行政側も支援をするという態勢を是非考えていただきたいと思います。意欲を持ってやろうとしている人達が、途中で梯子を外されるということになってはいけません。この意味でのコーディネーター役を行政が担う必要があると思います。

インストラクターについては、今日ご参加いただきお話し下さった方達にお願いしたいことがございます。それはインストラクターというような肩書きではなく、皆さん全てが「名人」になっていただきたいということでございます。「技を見せる、教える、一緒にする」という名人になっていただきたいと思います。ただ、「名人」だけでは駄目で、エスコーターと呼ばれる地域案内人も必要です。名人とツアー参加者を繋ぐ役割の人間です。先程の現地視察の際に大西さんと話をさせていただいたのですが、エスコーターがみんなに来てもらって話を聴きましょう、という形でツアー参加者をまとめていきます。「さあ皆さん集まって下さい。これから〇〇さんの話を聴きましょう。」というようにまとめていく役割を果たすのがエスコーターと呼ばれる人です。こういう人がいると、実際に指導をするインストラクターや「名人」の方達がすっと本題に入っていけます。そういう環境作りをする人達が別に要るのです。ですから名人級の人やインストラクターの他に、常に補佐するエスコーターがいないといけませんし、エスコーター達が次第に育っていってやがてはインストラクターとして活躍することになるわけでございます。インストラクターになる勉強の過程でもありますから、是非そういう人を周りが支援していくという態勢を取ると良いと思います。

それから、やはりアクセスが課題です。先程中型バスを借りてツアー参加者を運ぶとおっしゃっておられましたが、バスの添乗員として町のお兄さんが向こうまで行って連れて来るのか、あるいは現地集合で、こちらまでは親の責任で連れてきてもらうのか、どちらでも良いと思います。現地集合にすればバス代のことを考える必要がなくなります。飯田市では体験村を開く場合、現地集合にしています。行き帰りは親が面倒を見て下さいという方針を採っています。いろいろな場所から集まってくるものですから、一台のバスで集めて連れてくるのが難しいということも現地集合にしている理由の一つです。今回の本山町のツアーの場合は香川県の小学生に一箇所に集まってもらうわけですが、あちこちを回

って拾って来るのは大変ですから、一箇所に集合してもらう方が、安全面も考えると適当かと思います。

【JTB西日本国内商品事業部　明神部長】

今日は私も参加させていただいて、皆さんのご意見を伺ったり、いろいろなところを見せていただいたりして非常に参考になりました。しかし今の皆様のお話しを聴いていて、まだ入り口にも到達していないという段階だと思いました。そこで少し参考までに申し上げますが、わが社で「感動体験」という本を発行しております。これはガイドブックですが、これを持って各学校に営業担当者が回っております。井上さんが組織されている「感動体験－南信州」はこの本でも全部で 4 ページにわたって掲載されており、分量として一番多くなっています。高知県の例もこの本に入っています。それから徳島県の例も入っています。私どもも窓口になるところがないと、この嶺北地域については全く情報もありません。われわれ営業を担当する側も知識がゼロですから動きようがありません。営業活動をするために、まず必要なことは情報を発信するところを作るということです。井上さんのところは全国的に見ても非常に進んでいる場所です。高知県の場合、ある程度組織が整っている場所もございます。西部の四万十地域、それから東部地域も組織の整備が進んでいます。実はコーディネーターも、四万十地域に関しては、関東地区でも比較的名前の売れた方が既におられます。高知県でも別の地域を見ると組織が整っているところがございます。窓口として本山町の皆さんが一番活用できるところは高知県の観光コンベンション協会だと思います。これを窓口にするということを当面の目標として、高知県観光コンベンション協会の方に、嶺北地域のことを良く分かっていただくようにするのが大事だと思います。この協会が高知県の全国への窓口になっておりますから、当面はこの協会とのコンタクトが大切だと思います。将来、この地域に組織ができてくれば、この地域が直接情報を発信するのが一番良いのですが、当面の方法としては、やはり高知県の観光コンベンション協会を窓口にして、協会の皆様にこの地域を売っていただくためのヒアリングを徹底的に行えば、必ず今以上の全国発信を行うことができるようになると思います。また、学校の先生方はこの「感動体験」という本を見て参考にしています。私どもはこの嶺北地域を教育旅行の対象地の候補として捉えて、この検討会に参加し、皆さんのお話を伺っております。

【井上室長】 どうもありがとうございました。その辺については後程お訊きしようと思っていましたが、今のお話しで良く分かりました。やはりどこにターゲットを置くか、顧客は誰なのか、何を売っていくのかということを明確にしていかない限り売り込むことはできません。吉野川の源流域というような売り込み方もあると思いますし、有機農業をセール

スポイントにするという方法もあると思いますが、では有機農業を子供達にどう話をして、売り込むのかということになってくると、これは現実にはちょっと無理な話になります。子供達に売り込むためには、また別のノウハウが必要になります。それは別の形で勉強していく必要があるでしょう。いずれにせよ、どこに、誰に、何をという基準がはっきりしていないと物は売れません。これだけ資源がありますと言っても、それだけでは売ることができません。

③運営体制

【井上室長】 次に、運営体制の話に移りたいと思います。先程のお話しでは観光協会が受け入れの主体になっているということでしたので、観光協会自体は、このことをどのように受け止め、お考えになっているかを後程お訊きしたいと思いますが、行政と民間の役割分担をきちんとしておくことが必要です。ソフトのこの部分を誰が担当するのか、ツアーの企画は誰がするのか、マーケティングは誰が、人材育成は誰がするのか、こういうことについて皆が共通認識を持っていないと動きづらくなります。今日お集まりの皆さんの中で、こういうことを一つ一つ詰めて行くことが重要です。先程、飯田市がやっている観光公社の話をさせていただきましたが、これも参考にしていただければと思います。しかし嶺北には嶺北のやり方があるはずですから、是非それが見つかるまで模索を続けていただきたいと思います。全国には、いろいろなやり方を採っているところがございまして、財団法人が窓口になっているところもございます。先程のお話しでは高知県観光コンベンション協会というところがあるそうですが、県全体として捉えるならばそういう方法もあるでしょうし、地域に絞って NPO を作り、それを窓口にするという方法もあると思います。いろいろなやり方があります。しかし受入体制と運営体制がきちんとできていないとどうにもなりません。一つ一つ課題を克服しながらそれを作っていかなければなりません。この中にも書いてありますが、観光協会がやってくれるかもしれませんが、場合によっては、良い人材を外から連れてくるということも考えられると思います。観光協会としては、この辺りをどう考えているかについては後程お話しいただくことにします。

④マーケティング・PR

【井上室長】 マーケティングと PR というのは非常に重要です。今日は先程、明神さんにお話しを伺いましたが、他に付け加えることがございましたら、後程お話し下さい。今日は ANA の永山さんに来ていただいておりますので、マーケティングと PR についてご意見を伺いたいと思います。

【ANA高知支店　永山支店長】

全日空の永山でございます。今朝は朝早くからありがとうございます。このモデルツアーの行程表を見させていただきました。皆様方が「何を売り込みたいか」ということにもよりますが、一番大事なことは、本山町がこのイベントを行うにあたって、「誰がリーダーシップを取るのか」、「どのような方々が協力体制を敷いているのか」ということでございます。それと、本山町と嶺北地区の皆様が、何を売りたくて、どこの誰に来てもらいたいのか、といったところが大事だと思います。モンベルの方から質問がありましたが、個人型ですか、団体型ですかという話にもなります。この資料に書いてありますように、対象は吉野川及びその地域の水を活用している香川県や四国の小学生だということですので、具体的に小学校の 5 年生、6 年生に絞り、それもクラス単位だとか地域単位とかに括り、それをどのように PR すれば良いかがポイントになると思います。

それから明神さんもおっしゃっていたように、嶺北地域と言っても誰も知らないのではないかと思います。本山町も参画されていると思いますが、高知県の観光コンベンション協会を上手く活用されると良いと思います。この協会には誘致推進部会やスポーツ部会、それから広報部門など、いろいろありますので、活用すると良いと思います。先日 NTT の方から聞いたのですが、ヤフー等の検索エンジンで「高知県」を検索すると、高知県観光コンベンション協会のホームページがトップで出てきます。これを媒体として上手に活用し、そこへアクセスしてきた方のアドレスを、今度は本山町が「メルマガ」のようなもので整理し、ステーションコールではなくパーソナルコールで情報発信をしていく体制を採ると面白いのではないかと思います。

【明神部長】 今の永山さんのお話しの中で、ポイントを絞って誘客をするというお話しがありました。たまたま私は 95 年前後に高松で勤務をしておりましたが、丁度その頃、早明浦ダムの渇水が深刻になりまして、高松市内でも断水がずっと続きました。多分そのときの経験がきっかけになったのだと思いますが、ここにも書いておられますが、子供達の交歓会が始まったと私は理解しております。現在もこの交歓会は続いているのでしょうか。

現在どんな状況になっているか教えていただけますか。

【大西室長】 交歓会の参加者は高松市内の小学校を順番に回って集めております。小学校で募集をかけまして、約 30 人集め、そしてそれに数名の保護者を加えまして、こちらへバスで来て、場所によってはこちらの用意した車に乗り換えて、一泊二日でカヌーでありますとか、あるいは宿舎近くでいろいろなものを見ていただくという形で交歓会を行って来ました。この交歓会は渇水以前から行われてきたものであると記憶しています。渇水の前後からは、香川県の中学１年生が全員、一度はこちらを訪れるようになりました。実施日は各学校によって異なりますが、毎年夏になると凄い数のバスが早明浦ダムまで来て、食事をして、話を聴くということが行われています。

【明神部長】 私もその辺りの情報は掴んでいましたが、今行われているのは、早明浦ダムで食事をしてその日のうちに帰るという日帰りのツアーです。このプログラムに入っているような体験は行われていないわけですね。こういう下地があるわけですから、香川県、特に高松市の辺りは、売り込める可能性が十分あると思います。しかしこちらへ修学旅行として誘客するのはちょっと難しいと思います。やはり林間学校のような短期間の研修旅行として誘客するのが適当だと思います。今までの日帰り旅行にプラスアルファという形で、学校現場に提案することによって、例えば一つの学校が動きますと、次から次へと広がっていきます。ですから、一つの学校を突破するのが非常に重要だと思いますので、その辺りから始めると可能性は十分あるのではないかと思っております。

【井上室長】 実は飯田市も、初年度は１校来れば良いと思っていました。いきなり大勢来てくれることをのぞむのではなく、たった 1 校で良いから来てもらおうという発想で事業を始めました。1 校来てくれれば翌年は必ず増えるという確信をもって始めました。今明神さんがおっしゃった通りで、1 校獲得すれば次々に来てくれるようになると思います。

次に、これは再三話が出ておりますが、モデルツアーのコンセプトについてです。これがまだ曖昧で明確になっていないと思います。やはり川を売りたいのだろうという感じがするのですが、もっと川にこだわるべきなのか、あるいはそこまでなのかな、という感じもします。これも先程から言われていることですが、コンセプトが決まれば、自ずとターゲットも絞られてまいります。それによってプログラムの内容も決まってきます。ですからコンセプトをきちんと整理しないと失敗してしまう危険が大きくなります。今明神さんが言われたように、ターゲットが香川県ならば何とかなるだろうとは思いますが、そうではなく、大阪から修学旅行生を今後連れて来たいとかいう話になった時に、ではどうすれば良いかということが重要な話になってくるのだと思います。他の方のお話しを伺いながら、もう少しこれについて論議を続けたいと思います。マーケティング関係の方のお話し

も伺いたいですし、地元の観光協会の方のお考えも伺いたいと思いますが、その前に遠くからこの検討会に参加していただいた野本さんが、PR を少しさせて欲しいということですので、それを先にしていただいてから、先程の話に戻りたいと思います。

【伯方塩業　野本取締役】 愛媛県からまいりました伯方塩業の野本でございます。私は、個人的にこの 15 年来、健康・環境関連に関心を持っておりまして、伯方塩業の中でも、健康・環境部門担当として 10 数年来やらせてもらっております。その中で資料をいろいろ集めておりますので、ご関心がありましたら、きっかけ作りやご紹介、情報提供ということであれば、かなりのお手伝いができると思います。

先日、全国エコツーリズム大会南信州というのがありまして、私も行きました。そこで『体験型観光のすすめ』とか棚田関係の本などいろいろな資料を一通り買いました。実は 3 日間のこの大会では 12 の分科会が開かれましたが、私はツーリズム関係と棚田の関係の 2 つの分科会に出席しました。その際、販売されていた資料を買えるだけ買ってまいりました。この大会に出席して、飯田市をはじめとして長野県が非常に頑張っておられるのをみて私は感動しました。今回も昨日、今日と検討会に参加して、大変気に入りました。

健康関連では、私は 30 数年前から自然農法や有機農法を研究しておられるいろいろな先生方ともお付き合いしておりますので、そういう方のご紹介もできると思います。

最後に一つだけ提案させていただきたいと思います。四国の石鎚山と剣山は西日本でも有数の名山ですが、この 2 つの山の中間点にこの本山町は位置しています。正確に言うともう少し北ですが、中間点ということで正確な測量をして、例えばランチを食べる場所が中間点であったりすれば、意外に物語を作ると言う意味で、注目されるのではないでしょうか。探検というのも面白いのではないでしょうか。地図を見ていて頭に浮かんだのですが、どうでしょうか。以上でございます。

【井上室長】 ありがとうございます。野本さんに初めてお会いしたのは、国際ブックフェアという催しでした。その後、食育フェアでもお会いしたりとか、あちこちで野本さんとお目にかかっています。伯方の塩を広めることに大変熱心に取り組まれています。同じ四国で頑張っておられるわけですので、お互いに手を取り合いながらやっていくと良いのではと思っております。それでは、先程の論点に戻って議論を進めたいと思います。これからさらに 3 人の方にお話しいただきますが、まず観光協会の松葉さんにお話しいただきます。観光協会は本山町の PR の一翼を担うものと思っていますので、観光協会がエコツーリズムの受け入れの母体になるかどうかという点も含めましてお話しをしていただけたらと思います。

【本山町観光協会　松葉会長】

今年度、観光協会の仕事をさせていただくことになった松葉でございます。観光協会が受け入れ業務をしてはどうかという話は、先日も本山町の方からございました。やることについてはやぶさかではありませんが、やるに当たっては業務が落ち着くまでは役場職員の方を派遣していただいて常駐していただけないだろうかと思っております。私としては、本山町を案内するガイドづくりの方を考えておりまして、例えばラフティングでは、7、8、9 月はモンベルさんも多忙なので、町の人材を育てて繁多な時期には、お手伝いをさせていただいて、同時にお金を稼ぐことができる人間を作っていきたいと思っています。今のところ考えているのはそれだけでございまして、いかにも現場人間の考え方だとは思いますが、やって来る子供達をいかに楽しませるかということを考えております。

【井上室長】 ありがとうございました。続きまして高知県観光振興課の小松さんのお話しを伺いますが、先程高知県観光コンベンション協会の話が出ましたので、それについてもお話しいただけたらと思います。ではよろしくお願いします。

【高知県観光振興課　小松チーフ】

高知県観光振興課の小松と申します。まずコンベンション協会の概要をお話ししますが、平成 14 年 4 月に、当時ありました高知県観光連盟とコンベンション誘致のための財団法人高知コンベンションビューローを発展的に統合して高知県観光コンベンション協会が発足しました。今年で 4 年目に入るわけでございます。旅行会社からも職員を派遣してもらっておりますし、県と高知市からも職員を派遣しておりまして、主に旅行会社に対するコンベンション誘致活動とセールス活動を行っております。スポーツキャンプなどを誘致するスポーツコンベンション部門と大きな会議を誘致するセールス活動とコンベンション誘致活動を行って、さらに高知県の PR をする企画広報といった部門を柱にして運営しております。

お話しにありましたような地域でこういった情報を発信していく、あるいは地域で調整をして旅行会社さんとのつなぎの役割を果たすということについては、協会の方も情報を収集し、外に対して情報を発信し、セールスをするということをやっているのですが、実際のところ、例えば修学旅行で、この嶺北地域へエコツアーに行きたいというニーズがあった場合、その調整をコンベンション協会が全て担っていけるかというと、そこまでの態勢ができている組織ではございません。コーディネート機能を果たせる組織があって、コ

ンベンション協会が外向きに宣伝活動をして、それをその組織に繋いでゆくという役割を担っていこうということであります。

【井上室長】 はい、ありがとうございました。そういうことを踏まえますと、地元がどうまとまって受け入れ態勢を作っていくか、情報発信をしていくかを主体的に行わなければいけないわけで、高知県全体でまとまってやっていこうとするとなかなか大変なところがあるわけですか。

【小松氏】 この地域ではこういった形で受け入れができますということを、地元の方から観光振興課、あるいはコンベンション協会の方に教えていただければ、協会も振興課も地元に入らせていただいております。語弊があるかもしれませんが、どういうプログラムでどの程度できあがっているのかということを確認させていただきながら、助言をさせていただきます。旅行商品として扱えるものであればそのまま売っていきますし、もう少し練り上げる必要があれば一緒に育てていきます。ただ、実際に修学旅行で 300 人来るので、例えばモンベルさんにこの日のこの時間に 40 人お願いしますとか、汗見川は何人お願いしますといったことまでは、コンベンション協会は担えません。やはり地元がブロック単位あるいは町村単位でそういう細かな手配ができる窓口や受入態勢を整えていただきたいと思います。そういう態勢ができていれば、外に対して売り込めますし、またそうしたいと思っています。

【井上室長】 どうもありがとうございました。やはり本山町あるいは嶺北地域が、エコツアーをどのように売っていくのか、その商品づくりを地元でやっていかなければいけないということですね。その際にはお手伝いいただけるということですので、是非コンベンション協会をご活用いただきたいと思います。この辺りについて、DBJ 四国支店支店長の石井さん、いかがでしょうか。

【日本政策投資銀行四国支店長　石井】

本日は主催者としてこういった機会を持たせていただきましてありがとうございます。私どもは地域振興という観点から四国の観光を考え、活動して活動して参りました。冒頭でも問題提起させていただきましたが、四国の観光振興にとって、いわゆる域内交流、つまり四国の中での県外交流を発掘することが四国全体の活性化に繋がりますし、自らの観光資源の評価にも資するのではないかと考えております。そして何かそのための方策はないかということで、四国の自然に着目したツア

ーの開発についてアクションを起こさせていただいたわけでございます。本来、われわれが一般的に行っている調査では、あまり個別具体的なところまでは踏み込まずに、四国としてこうやったら良いという方向性を提言する形になるのですが、現実的にはやはり、ターゲットを絞ってまいりますと、個別具体的なモデルを採り上げることがどうしても必要になります。今、私自身も高松に住んでおりますが、いわゆる流域圏の中での交流は現実感もありますし、それが上手く定着できれば、非常に良い交流ができると思います。交流にも生活的な交流もありますし、それが経済的な価値の創出にも繋がるということで、非常に期待できるのではないかと思っております。香川の地元の新聞社である四国新聞社に、そういう切り口も含めて、今回の一連の問題提起を踏まえて、一面広告と言えるような記事を書いて宣伝していただきたいとお願いして取材してもらいました。こういうことの積み重ねが物事を具体的に動かすポイントなのだろうと思います。

実は私は当地に初めてまいりまして、視察をさせていただき、関係者ともお会いしたわけですが、思っていた以上にやる気のある方々がおられますので、最初は町に汗をかいていただくことが必要だと思いますが、民間への移行は、やる気のある事業者がおられれば、その辺の枠組みもできてくると思います。今後にどう繋げていけるか期待しております。

【井上室長】 ありがとうございました。PR にはいわゆるホームページの作成のような電子媒体、それから今日も四国新聞の方に来ていただいており、お話しを伺いたいと思いますが、いわゆる紙媒体、それに加えて対面による販売活動の 3 つがございます。この 3 つを上手く組み合わせないと、情報をターゲットに打ち込むことができません。単にどこかのメディアを通して宣伝すれば良いわけではないし、ホームページで情報を垂れ流しにしても上手くいきません。ターゲットに対して何を売っていくのかが明確になっていないと、きちんと情報が伝わりません。そういうことを考えながらプログラムも作っていく必要があると思います。今日も話の中で、口コミで本山町の取り組みを知る方が増えてきたという話がありましたが、口コミほど強いものはありません。しかし悪い情報も、口コミでは良い情報の倍以上の速さで伝わります。もし本山町さんで何か良くないことがあると、1 年経つとそれが四国全体の悪い情報として全国に伝わってしまうということになります。口コミにはそういう怖さもあります。そういう意味では細心の注意を払う必要があります。しかし注意ばかりしていては、なかなか先に進めないということもあります。大胆に行動しながら細心の注意も払うということなのだと思います。特に、PR という点では石井支店長もおっしゃっていたように四国新聞の方が来ておられますので、感想等をお聞かせいただけないでしょうか。

【四国新聞　岩部編集室長】 昨日と今日、お話しを伺ってまいりました。こういう場で発言したことはあまりないものですから何をお話しして良いか分かりませんが、この地区には

私も何回か来させていただいたことがございます。皆さんご存じだと思いますが、香川には豊島という所がございます。50 万トンの産廃が不法に投棄されたゴミの島だった所ですが、今は環境教育のメッカになっております。そこへ行って、大人から子供までそれを見て、その後、船で隣の直島へ行って処理場で廃棄物がどのように処理されていくのかを見学するわけでございます。直島には処理場だけでなく芸術がありますのでそれも併せて鑑賞するわけですが、かなり充実した修学旅行やエコツーリズムの場になっています。かつては負の遺産であったものを逆手にとって、観光資源に使うこともできるわけでございます。豊島はその良い例だと思います。本山町には本当に素晴らしい自然がございます。それを使ってピンポイントで PR をされていくと良いのではないかと思います。以上でございます。

【井上室長】 ありがとうございました。今実に良い例を紹介していただきました。水俣でもエコツアーが行われていますが、負の遺産をどう環境教育に活かしていくかということで取り組んでおります。負の遺産があったとしても、それをネガティブに捉えるだけではなく、発想の転換をして、ネガティブなものも資源として逆用するという柔軟な発想が大事になっていると思います。今後プログラムを作る時には、頭を柔軟にしていただきたいと思います。同じ物でも方法によっていろいろな展開を見せるわけですから、正面からだけではなく斜めから見るとか、いろいろな視点から考えていただきたいと思います。後程、全体から眺めて改めてご意見を伺いたいと思います。

⑤地域間連携

【井上室長】 では次にテーマの 5 に移りたいと思います。地域間連携の問題ですが、既にこの検討会でも地域間連携の問題が出ておりますが、先程、口コミの話で、本山町で何か良くないことがあれば、翌年には四国全体の評判が下がってしまうという話をいたしましたが、飯田市はよく飯山市と間違えられます。飯山市もグリーンツーリズムに熱心に取り組んでおります。と言うよりも飯山市はグリーンツーリズムに真っ先に手を着けた自治体でございます。グリーンツーリズムという名称を初めて使ったのが飯山市でございまして、飯田はそれを追いかけたわけです。飯田と飯山はよく間違えられます。飯山市には木村さんという凄い仕掛け人がいますし、前市長の小山さんは、観光面ではカリスマ的存在でございまして、積極的に観光行政を進めてきました。飯田でグリーンツーリズムを体験したいと考えて電話をしようとした人が、間違えて飯山に電話をかけてしまうことが多々あります。この時に、飯山ではどうした対応をするかというと、実に親切な対応をするわけです。飯田と間違えていませんか？と問いかけるのみならず、飯山でもこういった取り組みをしていますよ、といったＰＲもするわけです。飯田と飯山はお互いにライバルというのではなく、お互いに共存関係の中で連携してグリーンツーリズムの振興を行っていると言

うことです。四国四県では連携した取り組みはなされているのでしょうか？

【小松氏】 四国四県と JR 四国が一体になって四国を宣伝し、お客さんを誘致するという活動をしています。その中で、航空会社とタイアップして、例えば JAL が「うららか四国バス」を走らせるとか、全日空とタイアップして四国を露出していただいてお客さんを呼んでいただくとか、あるいは全国の JR の車両の中吊り広告やポスターで、「デスティネーション・キャンペーン」を行うなど、四国全体として全国から観光客を誘致する活動を行っております。その中には修学旅行の誘致や外国人観光客の誘致なども含まれています。

【井上室長】 ありがとうございました。いま全日空さんの話が出ましたので、その説明もしていただきたいと思います。

【永山支店長】 お手元に「翼の王国」の切り抜きとホームページからプリントアウトしたものをお配りしてございます。そのご説明の前に、先程林業のお話がありましたので、それに関連した部分での当社の取り組みについてお話しをさせていただきます。私どもは一昨年から、「私の青空、森づくり」という切り口で取り組んでいます。この 4 月 10 日には、「和歌山県高野町における森づくり計画」に関わっております。これは各地の空港周辺の地域に森を作っていこうという趣旨のものでございます。昨年 11 月には、四国四県が「山の日」を制定し、嶺北地域も採り上げられていることから、平成 17 年度は、高知県も当社のプロジェクトの対象として高知を採り上げようかという話が出ております。

次に「翼の王国」のご説明をいたします。全日空は旅客機を全部で一日 880 便運航しており、機内誌を毎月発行しています。今日お配りしたものは、2003 年の 5 月号です。本社の宣伝部門に四国を採り上げてくれないかと頼んだところ、四国というと吉野川が面白いという話になりました。高知県は太平洋に面しているので、海のイメージが強すぎるのですが、四国という切り口にすると、この吉野川が面白いということで、モンベルさんにご協力いただいて、吉野川のラフティングを採り上げさせていただきました。この特集に 12 ページ割いておりますが、読者の方からの反応も大変良かったという話を聞いております。それからもう一つ、今度はホームページの方ですが、当社のトップページにあるトラベルサポートの部分をクリックしていただくと、「ANA　Latte」という欄が出てまいります。これは、キャビンアテンダント(CA)がお薦めする就航地の情報です。去年の 10 月に高知を採り上げ、その後も四万十川を採り上げさせていただきました。さらに、T シャツアート（砂浜美術館）とか大方町の方も採り上げさせていただきました。このような形で、全日空グループはいろいろな都道府県の観光の情報を、「翼の王国」やホームページで採り上げていきたいと思いますので、皆様が面白い情報を私どもに提供して下されば、特集やキャンペーンの中で活用していきたいと思います。

それから先程ＪＴＢの『感動体験』という雑誌を拝見しましたが、われわれ全日空グループは遅れていると思いました。エコツアー関係では、「森づくり」くらいしかできていないのに、さすがに旅行代理店の雄、JTB は違うなと改めて、それこそ「感動と驚き」を持っております。

また、先程県の観光振興課の方のご発言がありましたが、四国四県と JR にご協力いただき、17 年 12 月から 18 年 3 月までＡＮＡ四国キャンペーン～ＡＮＡ誘遊・四国バスの旅～を展開致します。その節にはご協力をいただければと願っております。

【明神部長】 もうお時間の方があまりないとは思いますが、私の方から少し付け加えさせていただきます。私ども現場としては、どういうふうに動くかを考える中で、早急に解決しなければいけないことがございます。本山町は体験ゾーンとして非常に魅力的な部分がございますので、現場としては直ぐに対応できるかもしれません。しかし問題は、やはり宿泊設備です。これが全く整っておりませんので、今の段階では体験ゾーンを経験していただいた後、外部で宿泊をしていただかざるを得ません。飯田の方でも整備をされている農家民泊などは、魅力的であります。本山町でも、やはりそういうものを一泊入れて、もう一泊は民間宿泊施設というのを考えていただきたいと思います。農家での二連泊は、現場の目から見るときついのです。農家に二泊して帰るのでは、生徒さん達も農家民泊の良さが分からずに帰るということになってしまいます。最初に農家に泊まり、翌日別の宿泊施設に泊まると、前日の農家民泊の印象が非常に強く残ります。その辺の連携をこの地域の中で考えていただければと思います。例えば大歩危、祖谷地区、琴平、それから高知市内など後泊の候補地は幾らでもございます。この地域に前泊のための施設を整えていただければ、比較的早く、誘致ができるのではないかと思いますので、よろしくお願いします。

【井上室長】 分かりました。実は飯田でも農家民泊は一泊だけで、農家への連泊をしないという条件で受け入れています。農家民泊はできるがその代わり翌日は旅館に泊まってくれなければ受け付けないことにしています。つまりホテルや旅館に泊まってもらうことが、農家民泊を受け付ける条件にしております。ですから必ず二泊してもらうことになります。それによって地域全体として、いろいろなことに対して、例えば「農」を切り口にしたり、「自然」を切り口にしたりしながら、一般の観光にまで波及効果を及ぼしていくということをやっています。そうでなければ誰かの一人勝ちということにしないために、できるだけいろいろな人達の利益になるように広く薄く、地域全体に経済の波及効果が生まれるように工夫しています。そういう配慮をして初めて地域全体が協力し合うことができます。ですから地域間連携だけではなく、地域内連携も非常に重要な視点であると思います。

ではこれからどうするかということを考えてみましょう。先程、野村さんが、こういう話は何度も出たがいつも具体的な行動にまでは至らないではないかというお話しをされて

いました。これだけの人達が集まって話し合いをしたわけですから、具体的なスケジュールを立てて実行してみようという動きがないと、せっかく集まって意見交換をしても意味がありません。私もわざわざやって来て、話をして帰りますが、後で、やはりできなかったのかでは寂しい限りです。では何をすれば良いかと言っても、明神さんのおっしゃる通り、態勢が整っていないわけです。ですから態勢を整えるのにどれくらいの時間がかかるのかというところまで、行動スケジュールの中に組み込んで、態勢を整えながら進めていかなければなりません。

例えば、日本政策投資銀行がこちらに協力をしてくれるということですから、スケジュール的なことで何かご提案がございましたら発表して下さい。

【石井】 今の時点では、われわれも具体的なスケジュール観を持っているわけではありませんが、いずれにしても鉄は熱いうちに打てということもございます。今年はもうすぐシーズンに入りますから、来年度何をするかというスケジュールになると思います。それこそ、来年度、何とか 1 校誘致するということに向けて、何とかアクションプランを作るということが、一つの方向ではないかという気がいたします。私どもは本業が金融業で、付帯的な業務として企画・調査もしているため、一つのプロジェクトを 3 年も 4 年も継続していくのは、なかなか難しい面がございます。しかし今年、来年ということであれば、私どもも是非ご協力させていただきたいと思います。たまたまですが、拠点自体が高松市にございますから、ターゲットゾーンに四国での当行の拠点があるという意味で、いろいろなわれわれの使い方ができるのではないかと思っております。

【井上室長】 ありがとうございました。飯田市も今では何とかなっていますが、最初の頃は、どうなるかやってみなければ分からないという状態からのスタートでした。多分、本山町の皆さんは、とにかく何とかやりたいという思いから始められたのだと思います。モデルツアーの計画も大変一生懸命作っておられます。

【石井】 若干補足させていただきます。今日は、私どもの組織としては支店単独ではなく、本店の政策企画部という環境等の新しい分野を担当しているセクションの部長も同道しておりますので、一言だけ発言させていただきます。

【日本政策投資銀行　政策企画部長　前田】

DBJ の前田と申します。今日は 11 時より参加させていただいたので、午前中の討論まではフォローできておりませんが、今日感じたことをお話しさせていただきます。皆様方は受入側で、四国支店は地域活性化の立場ですが、私はユーザーの立場から少しお話しをさせていただきます。私はこういう世界が非常に好きで、年間だといろいろな所で 40 泊くらいしています。レスポンシブル・ツーリズムという言葉がありますように、先程森林ボランティアの話が出ましたが、労働面で貢献したり、知的に貢献したりして、地域と関わりたいという気持ちが自分の中で強くなってきています。都市と農村の関係で言えば、従来は全くの無関係かあるいは弱い関係しかなかったものが、今では両者が強い関わりを求めつつあるのではないかと思います。今日の議論は、小学生等の受入の話ですが、個人としてそういう所に関わっている人間として、参考までに事例を申し上げます。実は阿蘇では、阿蘇グリーンストック運動というのが行われています。これについては皆様もご案内だと思いますが、既に 10 数年続いております。95 年に自治体や企業がお金を出して財団が設立されています。この運動は、牛を食べ、野焼きをして草原を守ろうという活動です。放っておくと森に戻ってしまうので、草原を守ろうということで行われています。現在、年間 1,000 人くらいが野焼きの作業に参加しています。参加者は熊本市民や阿蘇の市民、それから福岡市民、さらに私のような東京に住む者も参加しています。これは全くの無償で行われています。以前は参加者が勝手に宿を探して宿泊していたのですが、やっと去年、“ 阿蘇ゆたっと村 ” という中核施設ができまして、そこに泊まりたい人は泊まれるということになりました。それから「村民証」というのを発行しておりまして、私も持っておりますが、年間 6 千円を払うと「村民」になることができます。「村民」になると地元からお米などの産品を送ってくれますし、現地に行けば宿泊することができるという仕組みが作られています。こういうバーチャルな「二重住民票」のようなものを作るというのも、その地域のファンを作るのに有効ではないかと思います。それから新潟県の松之山という棚田で有名な地区があります。これは先の地震で大きな被害の出た十日町の隣にありまして、ここも、昔から山村留学や冬に開かれる豪雪塾などいろいろな試みをやってきました。最近では平成 10 年に、中核施設である「グリーンハウス里見」というものができまして、ここの田中さんという方が、耕作放棄地を買ったり借りたりして、自分で耕し、東京などから来る人に、田植えや稲刈りをさせたりしております。「棚田ネットワーク」という NPO や東京の農業系の大学の学生が来て農作業を手伝っております。こうした動きが結構あります。そういう意味で「貢献」ということがキーワードになるのではないかと思っています。

何回も同じ所に来るというのは、トータルな資源や食物、それから地元の人からいろい

ろなことを教わるとか、そういうものをひっくるめた「場所の価値」というものがあるからではないかと思います。そういう意味で、本山町で開かれたこの検討会に出てみて、非常に可能性があると思いました。是非私も東京から応援したいと思っています。以上でございます。

【井上室長】 ありがとうございました。それでは大分時間も迫ってまいりました。これからの課題がいろいろと見えてまいりました。何月何日までにどうしようというところまで、もう一度内部の方達といろいろ論議をしながらやっていく必要性が見えてきました。そうした課題の整理によって今後の方向性が見えてきました。大西さんいかがでしょうか。

【大西室長】 プログラムづくりに関しては、誰を呼ぶか、どのような方向性を持たせるかといった点をもっと明確にするべきで、皆とその点をよく話し合って作っていかなければいけないと思いました。それからこれまで培ってきた地域間の交流の中で、既に本山町に来られている方もおりますので、そういった部分をターゲットにして、そこからさらにターゲットを拡げていくといったことも、もう少し研究をしていきたいと思います。先程話が出ましたが、吉野川や早明浦ダムの周辺の森林を使ったプログラムも考えていくべきではないかと考えました。今回作成したモデルツアーのプランに関していろいろなご提案をいただいたことは、誠に有り難いと思っております。もう少し内容をスリム化して行けば実施できるのではないかと感じておりますので、内容をもっと詰めながら、既に本山町にやって来ている中学生へのアプローチの方法など、もっとターゲットを明確にしていこうと思いました。体験メニューとしては良いのではないかというご意見もいただきましたので、非常に心強く思いました。また来ていただいた人達の宿泊面、安全面なども含めて考えていかなければならないわけですが、食事場所に関する保健所への許可申請は、今年も何回かイベントをやりますので、早急に許可を取りたいと思います。施設につきましては、モニターツアーを行いながら、使われ方を検討し、例えばシャワーや寝る場所などの整備の内容を詰めていきたいと思います。校舎を使うという方法もありますし、他のやり方もあると思います。平成 17 年度にモニターツアーを何回か実施する計画もありますので、平成 18 年度からは例えば 1 年に少なくとも 1 校は誘致できるようにしたいと思います。1 校になるかどうかまだ決まっていませんが、そういう形で動いていければと考えております。具体性のある施策をやっていきたいと考えております。今日強く感じたのですが、モニターツアーをする場合、プロの方にも参加していただいて、評価していただくことも重要だと思いました。以上でございます。

検討会のまとめ

【井上室長】 そろそろ予定の時刻がまいりますので、まとめの方に入りたいと思います。

皆さんのお話をお伺いして、本山町さんの向かうべき方向性が見えてきたように思います。特に、本山町が良い資源を持っているということが、外部の方のご意見からも明らかであり、自信を持っていただいて結構だと思います。しかし資源を持っているから大丈夫ということではなく、その資源をどう使うか、どう PR していくかが重要です。

ここでもう一度簡単な整理をさせていただきます。まず「旅」の発生の仕方について改めて確認をしていただきたいのですが、先程来、ターゲットについて話し合ってまいりました。年齢、属性、興味、年収、ライフスタイルなど絞るべき対象はいろいろあります。ではどういうところにターゲットを絞れば良いでしょうか。例えば地域デザインですが、吉野川を活かすとすれば、どうすれば良いか、そのイメージについては、テーマを明確に設定する必要があります。情報発信では、費用対効果やメッセージ性という視点を明確に持っていなければなりません。プログラムの作成ではコンセプトを明確にして、ターゲットを絞らなければなりません。本物体験は人が介在します。これは先程、DBJ の前田部長もおっしゃっておりましたが、それが如何に大事かを認識する必要があります。また「旅」にはストーリー性がないといけません。それからこれも重要ですが、地域コーディネーターやランドオペレーターがいないと、きちんとした受入体制を作ることができませんし、「旅」の受け手として継続的な運営ができなくなってしまいます。地域づくりや人づくりについては、昨日来、いろいろとお話しをさせていただきました。「地域の宝探し」、これについては、人まかせではいけません。皆さんが宝探しをしなければなりませんし、それを行う過程で皆さんが共通認識を持つことになり、地域振興のための土台ができます。そういうものなしに、ツアーを作ったとしてもそれは浮ついたものでしかありません。やはり、ベースになるものについて、もう一度確認することが必要ですので、是非やっていただきたいと思います。

私どももそういう考え方に基づいて進めてまいりました。他の地域にはない独自の価値をどうやって作り出していくか、どう「差別化」をしていくかを考えなければいけません。飯田市では、次の段階の「差別化」として独自の認証制度を作ろうとしています。それはツーリズムのランキングであります。皆さんはホテルのランキングを目にしたことがあると思います。これと同じようにツーリズムにもランキングがあっても良いのではないかということでございます。この地域のレベルは「三つ星」でこういうサービスを受けることができ、こういうレベルの体験ができますということを指標化するわけであります。もっと具体的に言うと、例えば、この地域では地元の農産物を何パーセント使っています。ですから安心ですよという具合にランキングし、他地域との「差別化」を図ることで、本気でグリーンツーリズムやエコツーリズムを行っていることを知ってもらい、単に知名度だけで商売をしているところと差を付けようというわけでございます。こうした「差別化戦略」を、今後 2 年ほどかけて、ツーリズム・ランキングを作り、それを外部に発信していこうと考えています。本山町にも、他の地域と違うのだという「差別化」の視点をもって

ツーリズムの振興を図っていただきたいと思います。皆さん既にご承知とは思いましたが、再確認の意味で申し上げますが、2007 年から 2011 年までの間に定年を迎える「団塊の世代」が非常に数多くおります。これも一つのターゲットになるという例です。

それから、飯田市独自の試みですが飯田市のホームページに「プレゼント・サイト」を設けまして、飯田の産品をプレゼントしますからアンケートに答えて下さいという試みを行いました。例えば、「農林業をしてみたいですか？」という質問では、回答者の 50%が「してみたい」と答えています。次に「では実際にやったことがありますか？来たことがありますか？」という質問では、実際にやったことがあったり、来たことがあったりする人は、全体の 10%ぐらいしかいません。このアンケート結果から分かることは、回答者の 50%にニーズがありながら、10%しか実際に体験していないということです。残りの 40%はどうしたのという話になるわけでございます。この 40%には情報が届いていないということです。情報を届ける役割を担っているのが、今日、お見えになっているプロの方達なのです。高知県のコンベンション協会、それから JTB や全日空のような企業の方達に情報をどう届けてもらうかということが重要になるわけでございます。本山町だけで、あるいは嶺北地域の皆さんだけで情報を届けようとしても、それは無理な話なので、皆さんの力をお借りしてやっていくことが大切です。

もう一つ、別の Web アンケートですが、農山漁村での食体験に関する質問をしました。するとその地域の郷土料理を食べたり、作ったりしたいという回答が数多くありました。この調査は複数回答のアンケートなので回答数が回答者数を超えてしまっていますが、とにかく食への欲求が非常に強いということが、このアンケートで良く分かりました。

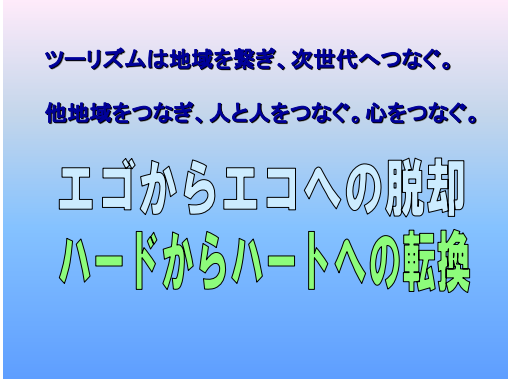
現在の旅に関するニーズでは、観光スポットは、第 3 位を占めているに過ぎません。観光スポットがなくても、他のニーズを充足してあげればお客さんは来てくれるということであります。農山漁村に来る方は、観光スポットを求めて来ているわけではないことが、これでお分かりになると思います。食や自然、農林漁業体験、そういうものを求めてやって来るわけです。それを忘れないようにしていただきたいと思います。

今日は教育という視点からエコツアーを考えてまいりましたが、いろいろなところにニーズはあるわけでございます。教育については、「学ぶ」ことへの欲求に如何に応えていくか重要であるとおもいます。飯田市では、「総合学習」が始まる前から総合学習用のプログラムを用意してエージェントに売ってもらっていました。如何に早くそういう情報を得て、PR をしていくかが重要になってまいります。さらに、自己実現という点では、中学生の段階での「自分探し」、それから団塊の世代の自分探しというテーマもあります。こういう人達もこれからはターゲットになってくると思います。それから「パートナーシップ」やコミュニケーションもこれからは重要になってきます。

それから誘客力については、既に皆様がご発言になった通りでございます。テーマの明確化ということも、先程申し上げた通りでございます。特に交流事業、ツーリズムは地域

づくりがベースになっています。資源探しひとつ取っても地域づくりです。如何に地域の人達が自ら頑張るかが大事になってきます。ですから行政主導でやっているだけでは、なかなか前進しません。民間の人達と共同で物事を進めていくことが大事になってきます。

切り札は「人」であります。今日来ていただいている皆さんは、地域リーダーであります。この地域リーダーは地域コンセプトの番人でもあります。自分の地域はこうしていくのだという一貫した考えをお持ちの方が、今日、お集まりだと思います。そういう人達に先頭に立っていただくことで、こういうツーリズムは動いていくのではないかと思っています。その際、ビジョンをどう描くかが重要であります。「子供達がこの地でどういうふうに生きていくか」というところまでビジョンに描き出しながらやっていかないと、ツーリズムは、うまくいかないし継続できません。自分たちの子供や孫へどう繋げていくかという思いがあれば楽しくなるはずです。そういう方向へ地域を動かしていくことが必要だと思います。是非、頑張っていただきたいと思います。



ということで、ツーリズムは地域を次世代へ繋いでいくものだと思います。さらに地域と地域を繋いで、人と人を繋いで、心と心を繋ぐのが、ツーリズムの原点だと私は考えています。今日、いろいろな話が出ましたが、その中でいろいろと指摘がされていると思います。

下に書いていることは、蛇足です。「濁点を取るだけで変わるのですよ」という意味で、施設ではなく、いかにソフトを充実させるかが大事だと思っています。

そろそろ時間になってまいりましたが、まだ発言されていない方もいると思います。最後に一言、これだけは言いたいということがございましたら、おっしゃっていただきたいと思います。

どうでしょうか、ここに町長さんがおられれば、最後に本山町としての決意表明をしていただくと一番良いのですが、大西さんに町長に代わって締めの言葉をいただきたいと思います。

【大西室長】

本日の検討会で、随分元気をいただいたと言いますか、やる気になっております。かなり厳しいご質問があり、私の回答は余り冴えのあるものではございませんでしたが、内心は、非常に元気になっております。今回いろいろなご意見を聴きましたが、今後自信をもって取り組んでいけるという気持ちになっております。資源を活かし、小学校の校舎を活かし、また農家民泊や体験ツアーなどをやって下さる皆さんと手を取り合いながら、本物体験という形で本山町のツーリズムを進めていきたいと思います。自分たちの地域の資源

をもっと明確にしておくべきだと思いました。それから私自身も本物体験を実践されている所へ研修に行ってもっと知識を拡げなければいけないとも思いました。いつの日か、井上さんに「本山町でも少しずつだが始まったね」と一言でも口にしていただけるようになりたいと思います。本日ご参加いただいた地域リーダーの皆様と協力して、本山町あるいは嶺北に四国版ツーリズムを興していきたいと思っております。また私だけがそう思うだけではしようがありませんので、皆さんからもどんどん意見を言っていただいて、皆様とご相談しながら進めていきたいと思っています。今後ともよろしくお願い致します。

【井上室長】

どうもありがとうございました。長い間、私の方にマイクをいただきましたが、拙い司会で申し訳ございませんでした。これで私の役割を終えさせていただきます。

【安藤】

井上さんどうもありがとうございました。ご出席の皆様、どうもお疲れ様でございました。非常に限られた時間の中で非常に貴重な議論ができたのではないかと思います。私どもも、昨年の夏頃からこのプロジェクトを温めて、限られた回数ではございましたが、本山町の皆さんや県の皆様と打ち合わせを積み重ねて、今日に至りました。この間、他地域の事例なども勉強してはまいりましたが、一般論なら誰でも勉強できます。しかし今日のように、具体的な事例を題材に議論をするという機会はなかなかございません。本日の議論は本山町で事業を立ち上げるための入り口になるのではないかと思います。

今日の検討会の冒頭に「光をあて、光り輝き、光を発する」というお話がありました。今はまだ光を当てたところで、光り輝き、光を発するところまでは、まだ道程は険しいかもしれませんが、関係者が手を携えて進んでいきたいと思います。私どもは地域振興の触媒になるという立場を表明させていただきましたが、そういう立場から応援させていただくつもりでおりますので、皆様も是非頑張っていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

＜検討会（午後の部）終了＞

３－９．まとめ～エコツーリズム実施に向けた６つのポイント

四国地域には、豊かな自然があり、その自然の中で文化や歴史が育まれてきた。四国観光においても従来の施設を見物する観光から、体験型観光への嗜好変化が伺える状況にある。そして３架橋完成による効果が薄れてきている今こそ、現状に危機感を持ち四国観光の方向性を真剣に考える時期といえるのではないだろうか。

今回のエコツーリズム検討会 in 本山町での意見交換を踏まえ、以下に四国におけるエコツーリズムの方向性をまとめることとしたい。今後の四国観光を考える際のみならず、それぞれの地域について考える際の一助として頂きたいと考えている。

①文化、歴史、食に関する資源の活用

四国の自然は、人の手（文化や歴史）の入った自然と言える。そこで四国独自の文化や歴史の魅力を再認識し、エコツーリズムのプログラムに反映させていくべきである（自然と文化・歴史の融合）。また食のツーリズムに対する欲求が強いことを認識し、地域の食材を地域ならではの方法で調理し提供することも、魅力的なプログラムづくりに有効であろう。

②観光ニーズと地元資源を踏まえたプログラムづくり

ツーリストは、観光地でツアーのために準備された体験ではなく、本物の体験を求める嗜好が強いことから、四国地域に住む人々のリアルな日常生活を資源として活用する視点が必要である。例えば、地元のイベントや風習など地域住民が楽しんで取り組んでいる活動そのものが魅力的なツアープログラムになる。

一方、こうしたプログラムを支える上では、指導役のインストラクターの他、ツアー参加者のサポートを行いインストラクターの魅力を最大限に引き出すエスコーターの養成も必要である。また、高齢化の進む四国の現状を逆手に取り、高齢者の知識や経験を活用した伝統工芸や農業体験プログラムが実施できれば、若者との交流による高齢者の生き甲斐づくりにも役立つ。

実際にツーリストを受け入れるにあたっては、本番と同じ条件（費用や日程）のモニターツアーを複数回実施し、プログラムの実施可能性を探ると共に参加者の生の声を実際のプログラムに反映させることが重要である。

③ハード整備に頼らないツーリスト受入施設の確保

エコツーリズムを実施するための新たな施設の建設は基本的には不要である。宿泊施設については、観光客用のホテルを持たない地域であっても、例えば農家民泊を活用すれば、大型ホテル並の収容人数を確保することも可能といえる。そのためには、受入農家を集落

や地域全体が認知するよう行政側が支援したり、必要に応じて特区申請（農家民宿に対する規制緩和、株式会社の農業参入等）や許認可取得（消防法や旅館業法上の要件等）をサポートすることが重要である。また、宿泊施設以外でも、既存の施設（廃校や観光施設、物産センター等）を見直して、エコツーリズムという視点から活用方法を考えることが必要である。

④地域とマーケットを結ぶ受入窓口の設定

ツアー参加希望者の受入窓口は、地域とマーケットを結ぶという意味で必須の存在である。受入窓口の形態は観光協会やＮＰＯ、株式会社など様々なパターンが考えられるが、まずは行政が先鞭を付け、地域のやる気を引き出したり、やる気ある人々のサポートを行うことから始めて、最終的には民間主導の運営に切り替えるというのが現実的であろう。また、非営利の観光ＰＲなどは観光協会で、ツアーの企画立案、地元や旅行会社とのやりとりは独立採算の株式会社でというように役割分担をはっきりさせることも重要である。

⑤コンセプトとターゲットを明確にしたマーケティング、ＰＲ

ツーリスト誘客のためには、コンセプト（例えば「吉野川流域」や「有機栽培」、「環境学習」）とターゲット（例えば「小学生向け教育体験旅行」、「中学生向け環境学習旅行」）を明確にしたマーケティングやＰＲ活動が必要である。その際、すぐに自前で大規模なＰＲを行うことは難しいので、多くの旅行会社と接点を持つ窓口を活用し、まずはその窓口に地域の情報を発信して地域を認識してもらう努力が必要となる（例えば、各地域の観光コンベンション協会はその窓口役になりうる）。

さらにＰＲの上で有効なのは、地域の住民１人１人が地域のセールスマンになって、地域の魅力をアピール出来るようにすることである。そのためには地域の人々にも体験プログラムに参加してもらうなど、住民自身が地域をよく知り、好きになるような仕組み作りが必要となろう。

⑥地域間連携

エコツーリズムは地域での体験旅行がその中心になるとはいえ、狭い地域内でツアーを完結させるのではなく、広域での連携によりプログラムの幅を広げることが重要である。例えば、「吉野川の流域文化体験」などストーリー性を持つツアーに仕立てたり、地元の農家民泊と有名観光地の大型ホテルでの宿泊を組み合わせるといった際に、地域間の協力は不可欠である。そもそもツーリストの側から見れば、県境や市町村間の境は存在しない。地域の魅力をより高める手段として地域間連携を捉えるべきであろう。

おわりに

これまで記載してきたように、観光客の嗜好が見物型観光から体験型観光へと変化していることは、豊かな自然が存在し、その自然の中で文化や歴史を育んできた四国地域にとっては、またとない観光活性化のチャンスと考えられる。こうした中、四国観光の現状に危機感を持ち、四国に点在する多くの資源をエコツーリズムという切り口で捉え直して、地域住民自身がその過程で地域資源の魅力に気づくことが、四国観光活性化を模索する中でのひとつの打開策になるのではないだろうか。またエコツーリズムは観光振興のみならず、都市住民との交流による生き甲斐づくりといった高齢化対策や、就農希望者やボランティアを受け入れることで農村の荒廃を防ぐといった過疎地対策という側面も持っている。このようにエコツーリズムは、今後の四国地域の活性化に寄与することが策を考える上で、大きな可能性を秘めていると言えるのではないだろうか。

本稿でも紹介したように、長野県飯田市ではさまざまなエコツーリズムの取組に成功しているし、また高知県本山町では今回の検討会を踏まえ、町役場をはじめ町内事業者や町民グループが一体となり、エコツーリズムを実施するための取り組みを本格化させようとしている。例えば従来から実施している水資源を通じた交流事業の一環として、１７年度にも香川県内の小学生向け教育旅行の受入が決まっているほか、奈良の学習塾が企画した教育体験旅行では、本検討会で議論したモデルツアープログラムを利用して、同町を訪れることとなっている。

こうした本山町での経験が、今後四国地域においてエコツーリズムに取り組む上で参考になることが期待される。

以　　上

参考資料

１．吉野川流域の文化と歴史

２．休廃校舎の活用

３．四国と全国の観光カリスマ

４．四国とエコツーリズムに関する年表

参考資料１．吉野川流域の文化と歴史

①吉野川流域文化の形成

現在の河口付近の平野は、吉野川の流れによって運ばれた土砂が河口付近に堆積してできたものと考えられており、かつてより、この土地にはヨシが生い茂っていた。そこで“ヨシの生えている川”「ヨシの川」と呼ばれるようになったのではないかと言われている。

吉野川は四国一の大河であり、流域の人々にとっては、いのちをはぐくむ恵みの川であると同時に、天下の暴れ川としても知られ、大雨のたびに数え切れないほどの大洪水を起こしてきた。そこで、関東の利根川、九州の筑後川、四国の吉野川の３つの暴れ川を、それぞれ「坂東太郎」「筑後次郎」「四国三郎」と呼んだのである。

この暴れ川によってつくられた吉野川流域の肥沃な土地には、古代より人々が住みつき、集落がつくられてきた。このことは出土した縄文式土器等からも分かっているが、流域内の主な平地は池田より下流の徳島平野のみであり、人口の分布も河口部付近の徳島市とその周辺地域に集中している。

②流域の産業

現在の流域の主要産業は農林業である。人口構成における農業依存の傾向は上流ほど強く、全流域の９０％近くが山地であるのに林業を正業とするのは全人口の１％に過ぎず、そのほとんどは農林業の兼業となっている。工業は下流の旧吉野川流域に集中し、薬品、食品、化学工業などの豊富な水資源を利用した業種が立地している。吉野川下流域は明石海峡大橋の開通もあり、関西圏との結びつきを強くしてきている。

吉野川の主要漁業資源としてはアユ、ウナギなどがあり、また河口部付近はアオノリを主体とする海藻類の漁場となっている。

伝統地場産業に関しては、吉野川の水資源との関わりが伺える。奈良時代より伝わる川田の手すき和紙、吉野川の冷水がその独特の風味を生み出していると言われている半田の手延そうめん、江戸時代に特に奨励されて発達した下流域での藍の栽培と阿波藍の染め物等、吉野川が流域の文化に与えた影響は少なくない。徳島県の伝統工芸品である大谷焼も、当初はこの藍染めの染料を入れる大瓶をつくるための焼物として発達したものである。

他にも、平安時代に始まったとされる八十八ヶ所霊場めぐりの第一番札所である霊山寺や阿波人形浄瑠璃などが、吉野川流域文化として挙げられよう。

また、吉野川上流部の山村には今なお平家の伝説が伝わっている。これは平安末期、戦いに敗れた平家の残党が祖谷をはじめとした四国山地に潜入し、その子孫達によって語り

継がれたものである。野生のシラクチカズラで作られた祖谷のかずら橋も、こうした平家の落人によって考案されたものと伝えられている。

③流域の歴史

現在の徳島県にあたる阿波の国は、鎌倉時代以降のたび重なる戦乱を経て、１５８５年豊臣秀吉から四国討伐の命を受けた蜂須賀氏が長宗我部氏を倒し吉野川河口部に徳島城を築城、政治的な安定期が訪れた。しかし、以降の統治を行った阿波藩は吉野川の堤防修築には消極的であった。その理由は藩の財政を潤す重要産物である藍を保護・育成するため、洪水がもたらす沃土が重視されたからである。沿川農民たちは洪水のたびに被害に苦しみ続けたのである。

この藍の栽培は中世以前からあったと言われているが、藩政時代にはいると、藍染めに適した木綿の全国的な普及もあり、吉野川流域の藍栽培が盛んになってくる。吉野川は藍を育て、藍が阿波の藍商を育て、「藍屋敷」と呼ばれる藍商達の大きな屋敷が数多く建築された。

この藩政時代から明治時代は、吉野川が物流の主役を担っていた。当時は舟こそが唯一の大量運送の手段であったことから、最盛期には 1000 を超える川舟が吉野川流域を行き来していたと言われている。

その、流通の拠点となったのが、流域各地の船着き場「川湊」であった。当時の主な川湊は池田、辻、半田、貞光、脇町、岩津、川島、第十。中でも池田、岩津、川島は良港として栄え、周辺には宿屋、酒屋、料理店などが立ち並び、船乗り、筏乗り、行商人、旅客でにぎわいました。各湊には勘定場が置かれ、船頭への手当の支払や、商品の取引や管理、受け取りや精算なども行われていた。 徳島、撫養など下流からの荷は、米や麦などの穀物をはじめ、肥料、味噌、醤油、塩、海産物、手工芸品、雑貨、生活用品等、日常生活に欠かせないものが川を上ってやって来た。一方、上流からは藍玉 、薪、木炭、たばこ、木材、繭、和紙などの特産物を乗せて舟が下っていったが、大正３年に池田までの鉄道が開通することにより、川舟は主役の座をとって代わられた。

④うだつの町並み

蜂須賀氏は阿波入国以後、藍作を奨励した。脇町の富商の多くも藍作に傾倒し、同町は阿北の中心地として成長していった。藍商の集う南町は、旧商家の本街道として最も繁華な通りとなり、付近に見られる土蔵造りの家屋は大半が当時面影を残し、隣家との境界には 2 階の壁面から 1 メートルばかり突出した土造りの防火壁がある。

この壁が「うだつ」である。防火対策として設けられたものだが、「うだつ」を造るには相当な建築費を要したことから、これをつくれない人の様を「うだつがあがらない」と揶揄した。このことわざは今でも一部で使われている。

脇町に現存する「うだつ」はおおよそ 50 個あまりに過ぎないが、格子・虫篭窓と共に昔ながらの景観を形成するのに欠かせない要素となっている。平成 3 年（1991 年）の調査によれば、徳島県下に 169 戸の「うだつ」のある家が現存しており、そのうち 51 戸が貞光町、49 戸が脇町、30 戸が池田町と吉野川沿いの町に集中している。特に脇町は昭和 63 年（1988 年）12 月 16 日に、全国で 28 ケ所目の「重要伝統的建造物群保存地区」に指定されている。

⑤嶺北地域と吉野川の関係

吉野川が古代より嶺北地域住民の生活と密着していた証拠として、吉野川流域には縄文前期から古墳時代にかけての遺跡が点在しており、本山町でも平成 2 年に松ノ木遺跡が発見されている。

また吉野川上流域である嶺北地域では、昔から林業が盛んであり、本山町白髪山の檜は戦国時代には豊臣秀吉に献上されて大阪城築城時に利用されたという。吉野川は切り出した木材を運ぶ水路として利用されてきた。しかし吉野川を使った流材は、洪水時に木材が一気に流出することで、下流沿岸の堤防や堰を破壊し田畑の作物に被害を与えることもあった。

木材の他にも、かつては生産が盛んであった繭玉や木炭が、吉野川を通じて嶺北から下流域へと輸送されていた。

参考資料２．休廃校舎の活用

過疎化や少子高齢化の影響による生徒減少により、廃校となる学校が増えている。平成 4 年度から 13 年度までの、廃校数は小学校、中学校、高等学校等（高等学校及び特殊教育所学校）で 2,125 校にのぼる。（文部科学省「廃校施設の実態及び有効活用状況等調査研究報告書」より）

四国においては愛媛で 39 校、高知で 33 校、徳島で 23 校、香川で 8 校が廃校となっている。（下図参照）

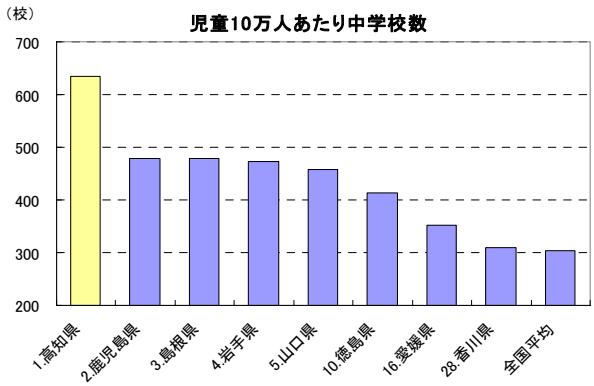
平成4～13年度の廃校数

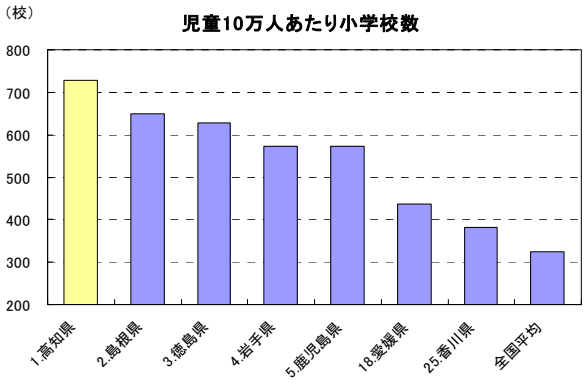
廃校数	小学校	中学校	高等学校等	合計
愛媛	25	12	2	39
高知	14	14	5	33
徳島	17	4	2	23
香川	5	1	2	8
四国	61	31	11	103
全国	1,499	476	150	2,125

この 2,125 校の廃校のうち約 8 超の 1,748 校が何らかの形で活用されており、さらに、うち 1,298 校については既存の建物を活用している。

既存建物の活用方法としては公民館や生涯学習センターと言った社会教育施設としての活用が最も多く 417 件。ついでスポーツ施設や体育館のような社会体育施設が 311 件。そしてグリーンツーリズムと関連するような自然体験施設（体験交流施設）が 77 件と続いている。また平成 15 年 4 月に文部科学省では、特色ある廃校の活用事例を纏め、「廃校リニューアル 50 選」として報告書を発表する等、廃校活用の動きが活発化している。

四国については、下図に示した通り高知県の児童 10 万人あたり小学校数及び中学校数については全国トップであり、その他３県も全国平均を上回っていることから、他地域に比べ学校の統廃合を迫られる可能性が高い。その活用策の検討が求められるであろう。





平成16年5月1日現在の数値
県名の前の数字は全国順位を示す
学校基本調査報告書（文部科学省）より作成

①休廃校活用シンポジウム in 本山

平成 16 年 11 月 28 日、本山町沢ヶ内の沢ヶ内小学校において、休校や廃校になった校舎の活用法を探るシンポジウムが開催された（参加者約 150 名）。会場となった沢ヶ内小学校（第４章参照）も 16 年 4 月から休校になっている。

東洋大の青木教授は、英国の農家民宿などグリーンツーリズム（都市と農村の交流）の例を紹介し、「沢ヶ内小の校舎を、ツーリズムに取り組む人々が勉強・交流する四国ツーリズム大学にしてはどうか？」と呼びかけた。また、高知大と高知女子大の学生グループからは「地元食材を使ったレストランと宿泊施設の複合施設にする」という案などが紹介された。

その他、休廃校舎を自然体験型宿泊施設などとして活用している西土佐村（四万十楽舎）や、徳島県勝浦町（ふれあいの里さかもと）の関係者から事例報告がなされた。

（休校となっている本山町の沢ヶ内小学校　左：外観、右：１階廊下）

②四国での廃校活用例「四万十楽舎」

四万十楽舎は、先述の「廃校リニューアル 50 選」に選出され、且つ「休廃校活用シンポジウム in もとやま」にも参加している。この四万十楽舎は高知県における廃校リニューアルの先進事例といえる。

「最後の清流」として知られる四万十川流域の西土佐村に位置する西土佐村立中半小学校は、1988 年に休校となった。当時の校舎は鉄筋三階建てで、新築後６年しか経過していない状態にあったことから、校舎の再利用が検討された。1997 年に県の地域活性化補助事業の決定を受け、ふるさと創生資金の人づくり事業費に村の一般財源を加えて社団法人四万十楽舎が設立された。子供達を中心とした地域の生涯学習センターという性格と共に、地域活性化研究センターという自然体験型宿泊センターを柱として運営されることとなった。社団法人として約 430 名の会員が参加し、独立採算で運営しながら、国・県・村の委託事業を受けている。校舎を宿泊施設として利用するため、教室に木製二段ベッドを配置し、50 名の宿泊設備を確保、浴室の新設がなされた。また、エコツーリズムプログラムとも言える「川遊び」や「山遊び」、「絵画教室」や「もちづくり」、「凧づくり」と言った地元の文化や人的資源、伝統資源を活用した体験プログラムを実施し、山の子供達のために柏島や大方等の海へ出かけ、自然体験ツアー等も実施している。

参考資料３．四国と全国の観光カリスマ

観光カリスマとは？（国土交通省HPより抜粋）
観光地が低迷する状況下において、各観光地の魅力を高めるためには、観光振興を成功に導いた人々の類まれな努力に学ぶことが極めて効果が高く、各地で観光振興にがんばる人を育てていくため、『観光カリスマ百選』選定委員会では、その先達となる人々を観光カリスマとして選定し、選定結果等を国土交通省の観光政策のホームページにおいて公表している。

平成 14 年 12 月 25 日の第 1 回目認定から、平成 17 年 3 月 18 日の第 8 回目認定の観光カリスマ選定結果発表を以て、観光カリスマは累計で 100 人に達した。これにより選定は終了している。今後は観光カリスマの知恵と経験に学ぶ機会の提供等の事業が行われる見込みである。四国からは以下の７人が選出されている。また次項ではエコツーリズムに関係すると考えられる観光カリスマについて掲載する。

四国地域より

県	地域	氏名	役職	カリスマ名称	選定理由
徳島	脇町	佐藤　淨	脇町長	歴史的町並みを活かすカリスマ	脇町の歴史的建造物であるうだつの町並みを修復し、観光客を集客するまでに育て上げた。また、町おこしの組織化、ボランティア活動の活発化や人材発掘などを通じて、住民を地域活性化の主役に位置付けた観光地づくりを推進した。
香川	琴平町	近兼　孝休	㈱琴平グランドホテル　代表取締役社長	伝統ある門前町に新たな息吹を吹込み、躍動感ある"まちづくり"のカリスマ	四国路の春を告げる風物詩の一つである『四国こんぴら歌舞伎大芝居』を1985年（昭和60年）に復活し、全国ブランドとして現在まで継続的発展をさせてきた中心的人物。さらに、1997年（平成9年）には温泉掘削を成功させ、『こんぴら温泉郷』をつくり、琴平地区の観光客の誘致に大きな役割を担っている。
愛媛	松野町	岡田　春喜	（財）松野町観光公社 森の国ホテル・虹の森公園支配人	地域のブランド化と広域連携を実現したUターン実務家カリスマ	四国のメイン観光ルートから外れた地域において、公社という経営形態のイメージを超えた質の高いサービスや営業努力により、松野町の「森の国」ブランドを確立する一方で、県域を越えた観光施設間の広域連携の中心に立ち、互いの研鑽と営業力の強化を図り、集客に成功した。
	内子町	野田　文子	（株）内子フレッシュパーク「からり」取締役 「からり特産物直売所」運営協議会 会長	農産物直売の実践による都市住民との『食』と『農』の交流カリスマ	生産者自身が楽しみながら、消費者に農村の楽しみを提供する都市と農村との交流拠点「からり」の取締役として、農村女性による農産物直売による都市住民との交流の草分け的存在である。生産者の顔が見える安全・安心・新鮮な農産物を追求し、リース教室ツアーなど年間をとおした「食」と「農」の農業体験活動を実践するとともに、農業ベンチャーを対象とした研修等の講師としても積極的に活動し、農村女性起業家のモデルとして多方面で活躍している。
	新居浜市	森賀　盾雄	新居浜市国保課長 （前新居浜市商工観光課長）	地域資源を活かしたオープン博物館都市づくりのカリスマ	都市そのものの形成史が観光客への売り物になることに着目し、行政内部のみならず市民団体を組織してイベント等各種バラエティあふれる取り組みを行い、工業都市が知的博物館都市へと変わる礎を築いた。
	伊予市 （旧双海町）	若松　進一	双海町教育委員会教育長 （前双海町地域振興課長）	真似しない、真似できないアイデアで地域力を作り上げるカリスマ	住民のまちづくりの意識を高めるための組織作りに力を入れる一方、夕日をコンセプトにしたまちづくりに従事し、「他の市町村を見習わない。見習ったら規模の大小の勝負になる。オンリーワンなら、自分たちの汗と知恵があればできる。」をモットーに、話題を呼ぶ仕掛けをつくり、地域の活性化に貢献した。
高知	馬路村	東谷　望史	馬路村農業協同組合代表理事専務	特産品（ゆず加工品）と共に村をまるごとブランド化に導いたカリスマ	人口約1，200人という林業で生計を立てていた過疎の山村が、昭和56年からゆず加工品の販売をはじめ、平成15年には売上が29億円を超えるまでになった。東谷氏はこの加工品の開発、生産、販売に携わるとともに、観光地や温泉など村の情報をまるごと売り込む作戦で、馬路村ブランドの確立に中心的な役割を担ってきた。この知名度アップにより、県内外から多数の視察や観光客が訪れるようになるなど、観光交流の面でも大きく貢献している。

（国土交通省ホームページより作成）

エコ関係

県	地域	氏名	役職	カリスマ名称	選定理由
秋田	乳頭温泉	佐藤　和志	（有）鶴の湯温泉代表取締役	秘湯の温泉カリスマ	秘湯ロマンにこだわり、豪雪にも関わらず冬季営業を始め、湯治場風景や自然環境を守るため周辺土地の取得やひなびた姿を残しつつ施設を近代化するなど、乳頭温泉郷の環境保全とイメージアップに指導力を発揮し、全国的な人気温泉地を作り上げた。
福島	猪苗代町	小椋　唯一	（社）福島県観光連盟企画委員	修学旅行、校外学習等の教育旅行誘致のカリスマ	修学旅行、体験型校外学習等の教育旅行を、地元猪苗代町のみにとどまらず、福島県、東北地方へ誘致するべく豊富な知識とノウハウを駆使し新しい企画を打ち出しながら活動を行い、誘客を推進しており、観光産業をはじめとする地域の振興に貢献している。また、磐梯高原地域のプロガイド組織の設立にも大きく関わり、人材育成にも注力している。
福井	大野市	大谷　光治	大野市長	『環境保全と人づくり』歴史に学んだまちづくりのカリスマ	城下町の歴史と文化を生かした「まちなか観光」を推進。全国の大野姓の人々によるさまざまな交流や情報の受発信を行う「平成大野屋事業」を展開し、大野市の全国的な知名度アップに取り組んでいる。また、地域住民の自主的なまちづくり活動の契機となる「越前大野平成塾」や「明倫館事業」などの人づくり活動やブナ林の保全施策等の行政版環境保全活動にも取り組んでいる。
長野	白馬村	福島　信行	白馬村長	活力とにぎわいの村づくりカリスマ	これまで白馬村の観光の主軸となっていたスキー観光の他に、優れた景観や農村資源、地形的条件等を活かした通年型・滞在型観光地としての白馬村の観光振興に尽力している。また、白馬村の楽しさを提供できる名人を登録し、旅行客の案内や引率に参加してもらう「白馬マイスター制度」を誕生させ、新たな手法で白馬村滞在の魅力を提供している。
	飯山市	小山　邦武	前飯山市長	ありのままの自然を舞台としたグリーン・ツーリズムによる地域づくりのカリスマ	グリーン・ツーリズム客のニーズを取り入れるためにスタッフとして都市部の若者を公募・採用し、180人の市民インストラクター（地元の名人）による100種類以上の自然・農林業体験プログラムを四季を通じて企画・提供することにより、通年で多くの観光客を集めるとともに、地域の活性化に貢献した。
	軽井沢町	星野　佳路	（株）星野リゾート 代表取締役社長	エコリゾート経営のカリスマ	28万坪の広大な敷地を生かしたゲストの満足度を高める高質のサービスを目指し、専門知識を持ったエンターテイナーが案内する有料の自然体験ツアーを企画して多くのリピーターを集めるなど、リゾートの新しい経営戦略を打ち出した。
兵庫	神戸市	金井　啓修	有馬温泉旅館「陶泉(とうせん)御所坊(ごしょぼう)」主人	温泉観光を核にしたコミュニティビジネスでまちのブランド力向上と活性化を進めるカリスマ	個人客をターゲットとした個性的な宿づくりに成功したばかりではなく、まちづくり全体を考えた集客の仕掛けづくりに取り組み、有馬の住民が温泉観光をまちづくりとあわせて考えようとする意識改革に大きく貢献した。
岡山	久世町	徳永　巧	真庭遺産研究会　事務局長	美しい自然や文化遺産等をグリーン・ツーリズムに結び付けるカリスマ	県北部の9町村を含む真庭地域において、失われつつある農村固有の自然や風景、歴史遺産にスポットライトをあて、その保全と活用方法について検討することを目的に「真庭遺産研究会」を設立し、その事務局長としてこれら自然資源等を活かしたグリーン・ツーリズムやエコツーリズムを推進し、真庭地域の景観保全や観光振興に貢献している。
熊本	水俣市	福田　興次	㈱福田農場ワイナリー 代表取締役社長	観光農園による地域づくり・観光振興のカリスマ	観光農園経営とあわせて、地元特産である甘夏みかんの加工品の開発・販売、自家生産・地域の特産品にこだわった食材の提供、地ビールの製造・販売を行い、年間20万人を超える観光客等の誘致を実現。誘客効果と全国販売を行う地元ブランドの特産品により水俣地区の活性化・イメージアップに多大な貢献をしている。
大分	湯布院温泉	溝口　薫平	㈱由布院玉の湯 代表取締役会長	『心の活性化』のカリスマ	観光地において自然保護を主張したさきがけ的存在であり、自然景観を大切にした温泉保養地づくりに成功。また、町内の情報交換の促進などにより、住民のまちづくりへの参加意識の高揚、地域の活性化に貢献した。
沖縄	石垣市	大濱　長照	石垣市長（沖縄県石垣市）	「住んでよし、訪ねてよし」の地域づくりを実践するカリスマ	市長として、また観光協会長として、石垣島観光のあるべき姿をしっかりと打ち出したうえで、石垣島の豊富な自然や文化を守るとともに、自ら先頭に立ったトップセールス、様々なイベントの実施等により観光客の増加、市人口の増加両方を実現した、まさに、「住んでよし、訪れてよし」の地域づくりを実践している人物である。
	西表島	竹盛　洋一	竹盛旅館　代表者 西表島エコツーリズム協会元会長	地域主体で自然の保護と活用の両立を実践するカリスマ	西表島という自然豊かな沖縄の中でも特に原生的な自然資源に恵まれた島において、貴重で豊かな自然と共生しつつ地域振興を図るという新しい観光のあり方を模索し、実践する活動の中核として活躍。具体的には、多様な関係者を束ね、日本で初めて「エコツーリズム協会」を設立し、エコツーリズム運動を促進するとともに、自らも旅館経営者としてエコツーリズムを実践し、その普及に尽力。

その他、エコツーリズム関連

県	地域	氏名	役職	カリスマ名称	選定理由
長野	飯田市	井上　弘司	飯田市産業経済部 エコツーリズム推進室長	ワーキングホリデー等多様なアイディアを取り入れた「都市農村交流」のカリスマ	他地域に先駆けて「無償ボランティアでのワーキングホリデー」を企画し、農作業の手伝いのお礼に農家の生活を教えるという「心と心の交流」をセールスポイントとすることにより、本当の農家の家族のように素朴で温かな田舎の生活が体験できるということで好評を博すなど、農業を素材とする新しい観光の形を示した。
大分	安心院町	宮田　静一	大分県グリーンツーリズム研究会会長	農村民泊さきがけのカリスマ	普通の農家に会員を泊め、農村の生活文化を体感してもらう会員制農村民泊の生みの親であり、景観や自然環境を考える「リバーサイドウォーク」や農村の伝統文化を見直す「全国藁（わら）こずみ大会」、グリーン・ツーリズム普及に向けた各種フォーラム開催などのイベントにも積極的に取り組み、行政との連携による様々な活動が独自の会員制農村民泊「安心院方式」を定着させ、都市住民と農村住民との交流を拡大させた。
宮崎	西米良村	黒木　定蔵	西米良村長	新しいワーキングホリデー制度」のカリスマ	賃金を支払ってきちんと仕事をしてもらいながら休暇と交流を楽しんでもらうワーキングホリデー制度の導入などにより、人口1，500人の小さな過疎の村である西米良村を全国に知らしめ、交流人口を増加させるとともに、村民に自信と誇りを取り戻させることに成功し、村民の自主的な取り組みによる村の活性化にまで発展させた。

（国土交通省ホームページより作成）

四国の観光関連年表

日本		四国		世界	
				1872 年	世界初の国立公園 ｲｴﾛｰｽﾄｰﾝ･ﾅｼｮﾅﾙﾊﾟｰｸ（米国）開園
1950 年	文化財保護法（文化庁）	1955 年	石鎚地区（愛媛・高知）が国定公園指定（11月）		
1957 年	自然公園法	1964 年	剣山地域（徳島・高知）が国定公園指定（3月）	1971 年	ラムサール条約
1972 年	自然環境保全法制定（環境庁）		室戸阿南海岸（徳島・高知）が国定公園指定（6月）	1972 年	世界遺産条約（UNESCOで採択）
1980 年	ラムサール条約日本加盟	1972 年	足摺宇和島地域（愛媛・高知）が国立公園指定（11月）	1973 年	ワシントン条約
1980 年	ワシントン条約日本加盟	1985 年	四国初の高速道路（松山自動車道　三島川之江～土居）開通（3月）	1978 年	ガラパゴス諸島、世界初の自然遺産（世界遺産）に登録
1989 年	小笠原ホエールウォッチング協会設立	1988 年	瀬戸大橋（児島・坂出ルート供用開始）（4月） ゴールドタワーオープン	1983 年	エコツーリズムという言葉が初めて使われる。 （メキシコの建築家Ceballos-Lasuraunの造語）
1990 年	エコツーリズム提唱（環境庁）	1990 年	この頃より「最後の清流・四万十川」として注目を集める	1991 年	オーストラリアエコツーリズム協会設立
1992 年	世界遺産条約日本加盟	1991 年	レオマワールドオープン	1992 年	国立公園と保護地域に関する国際会議開催
1993 年	JATA（日本旅行業協会）「地球に優しい旅人宣言」	1992 年	本州と高知県が高速道路で接続 （1月　川之江～大豊間開通）		環境と開発に関する国連会議開催
	屋久島、法隆寺、姫路城、白神山地世界遺産登録				
1994 年	NACS-J（日本自然保護協会）「エコツーリズムガイドライン」発行				
	京都、世界遺産登録				
1995 年	国内観光促進協議会エコツーリズムワーキンググループ設置（運輸省）	1995 年	阪神・淡路大震災の発生（1月）により京阪神からの観光客減少		
	農山漁村滞在型余暇活動促進法施行				
	白川郷・五箇山合掌造り集落世界遺産登録				
1996 年	西表島エコツーリズム協会発足				
	極地ツーリズム情報センター設立				
1998 年	エコツーリズム推進協議会発足	1998 年	明石海峡大橋供用開始（4月）		
	JATAエコツーリズムハンドブック発行	1999 年	イサム・ノグチ庭園美術館オープン（5月）		
1998 年	地球の歩き方「エコツアー・完全ガイド」初版		しまなみ海道供用開始（5月）		
2002 年	東京都、自然環境保全促進地域、第一号に小笠原を指定	2000 年	この頃からが、所謂「讃岐うどんブーム」と言われている	2000 年	国際エコツーリズム年、国際山岳年
	「エコツーリズム国際大会・沖縄」開催		徳島自動車道井川池田～川之江東間開通。四国４県の県庁所在地が高速道路で結ばれる。（3月）		
2003 年	エコツーリズム協会（旧：エコツーリズム推進協議会）NPOとして内閣府より認定		レオマワールド休園（8月）		
	「第１回エコツーリズム推進会議」開催	2001 年	ゴールドタワー閉鎖（9月）		
2004 年	エコツーリズムモデル事業実施対象地区指定	2004 年	ゴールドタワー・レオマワールド営業再開		
	エコツーリズム推進マニュアル発表（環境省監修）		地中美術館（直島）オープン	2005 年	環境をテーマとした”愛・地球博”が開催

（ホームページ、新聞記事等を参考に本行作成）

【参考文献】

- 四国運輸局業務便覧
- 国土交通省編「観光レクリエーションの実態～第 9 回全国旅行動態調査報告書」
- 2005 年度版地域ハンドブック（日本政策投資銀行地域政策研究センター）
- 四国ハンドブック　平成 16 年度版（日本政策投資銀行四国支店）
- 四国運輸局「四国の主要観光地における入り込み状況について」
- 「四国４県主要指標　平成１６年版」（財務省 四国財務局）
- 国土交通省編「平成 16 年版　観光白書」
- (財)日本交通公社「旅行者動向 2004」
- (財）日本交通公社「旅行年報 2004」
- 「錦おりなす自立する地域」（日本政策投資銀行地域企画チーム編著）
- 「実践！地域再生の経営戦略」（日本政策投資銀行地域企画チーム編著）
- 「数字でみる観光 2004」（社団法人　日本観光協会）
- 四国運輸局「四国観光交通地域振興アクションプラン策定調査報告書」（平成 9 年 3 月）
- 「エコツーリズム推進マニュアル」(2004 年 7 月エコツーリズム推進会議編集、環境省監修）
- 「グリーンツーリズム～文化経済学からのアプローチ」（西川芳昭、駄田井正編著）
- パンフレット「嶺北住民が描く将来上の実現に向けて」（嶺北交流ふれあい推進協議会）
- 「エコツーリズム検討会 in 本山町」事前配付資料（本山町企画課作成）
- 高知新聞（1993 年 4 月 6 日）掲載「ふるさとを流れて～汗見川」
- 高知新聞（2004 年 11 月 29 日）掲載「休廃校舎の活用探る～本山町でシンポ」
- 四国新聞（2002 年 4 月 16 日）掲載「香川用水の水源巡り」
- 平成 12 年度モデル事業による上下流交流の有効性実証調査（国土交通省）
- 「四国三郎吉野川　アクアくんと水の旅」（平成 10 年 3 月　発行：嶺北五か町村
  ＜大豊町、本山町、土佐町、大川村、本川村＞、高知県、国土庁
- 観光カリスマ井上塾（平成 16 年 10 月 20 日～22 日）資料
- 幡多広域観光推進連絡協議会パンフレット
- 文部科学省「廃校施設の実態及び有効活用状況等調査研究報告書」(2003.4)
- 休廃校活用シンポジウム in もとやま　実績報告書
  （17 年 3 月　高知県農林水産部農山村振興課）
- 動き始めたＰＰＰ型公有財産コンバージョン－廃校・公共施設の再生－
  （日本政策投資銀行首都圏企画室　2004.12）
- 「いまなぜ地域通貨なのか？その役割と可能性」日本政策投資銀行(平成 15 年 7 月)

【参考ＵＲＬ】

- 「ウェルカム！四国」ＨＰ（http://www.wel-shikoku.gr.jp/）
- 環境省ホームページ（http://www.env.go.jp/）
- 総務省統計局（http://www.stat.go.jp/）
- 国立社会保障・人口問題研究所（http://www.ipss.go.jp/）
- わがマチ・わがムラ－市町村の姿－ＨＰ（http://www.toukei.maff.go.jp/shityoson/）
- 本山町ＨＰ（http://www.town.motoyama.kochi.jp/）
- 嶺北広域行政事務組合ＨＰ（http://www.inforyoma.or.jp/reihoku/welcome.html）
- 独立行政法人水資源機構ＨＰ（http://www.water.go.jp/）
- 四国の川と生きるＨＰ（http://www.soratoumi.com/river/）
- 香川県庁 HP 内「かがわの水」（http://www.pref.kagawa.jp/kankyo/mizu/kgwmizu/）
- 徳島県庁ＨＰ内「吉野川」
  （http://www1.pref.tokushima.jp/kikaku/seisaku/yoshinogawa/yoshinogawa.html）
- 財団法人ダム水源地環境整備センター（http://www.wec.or.jp/center/index.html）
- 吉野川交流推進会議ＨＰ（http://www.yoshinogawa.org/kikanshi/index.html）
- 国土交通省四国整備局徳島河川国道事務所ＨＰ（http://www.toku-mlit.go.jp/index.html）
- 四国の川と生きるＨＰ（http://www.soratoumi.com/river/）
- 南信州観光公社ＨＰ（http://www.minamin.ne.jp/kousha/index.html）
- 日本交通公社ホームページ（http://www.jtb.co.jp/）
- Ｈ．Ｉ．Ｓエコツーリズムデスクホームページ（http://www.his-j.com/tyo/eco/top.html）
- エコツアー総覧ホームページ（http://ecotourism.jp/）
- 徳島県ＨＰ内“徳島をたのしむ”（http://www.pref.tokushima.jp）
- 幡多広域観光推進連絡協議会ＨＰ（http://www.hata-koiki.com/）
- さわやか福祉財団「地域通貨」ＨＰ（http://www.sawayakazaidan.or.jp/chiikitsuka/）
- 高知新聞（平成 17 年 1 月 23 日「手探りの地域通貨」）
- 地域通貨全リストＨＰ（http://cc-pr.net/list/）
- 高知県森林局木の文化推進室ＨＰ
  （http://www.pref.kochi.jp/~seisaku/kinobun2/hp_1/index.htm）
- 水の郷百選ホームページ
（http://www.mlit.go.jp/tochimizushigen/mizsei/mizusato/mizunosatohyakusen/index.htm）
- 水源の森百選ホームページ
（http://www.rinya.maff.go.jp/seisaku/sesakusyoukai/hyakusen/hyakusenntop.html）

～ DBJ SHIKOKU RESEARCH 既刊目録 ～

・NO. 1 「四国大型小売店の出店余地について」 1999. 10

・NO. 2 「四国における中心市街地活性化の課題と展望」 2000. 02

・NO. 3 「四国地域民間企業設備投資の長期推移分析」 2000. 04

・NO. 4 「四国における県都の役割について
～経済的中枢管理機能を中心として～ 」 2000. 08

・NO. 5 「三架橋後の四国地域におけるこれからの産業振興のあり方
～内発型地域産業振興への取組み～ 」 2000. 10

・NO. 6 「外国人観光客誘致の現状と四国の戦略」 2001. 01

・NO. 7 「四国における人口高齢化と高齢者対応型産業の展望」 2001. 02

・NO. 8 「四国におけるリサイクル産業振興の課題
～エコタウン事業の活用を中心に～ 」 2001. 09

・NO. 9 「四国におけるコミュニティバスの現況と課題
～規制緩和後の新たなバス事業の息吹～」 2001. 12

・NO. 10 「地域におけるPFI推進上の課題
～PFIは四国をどう変えるか～」 2002. 2

・NO. 11 「産学連携の最新動向と四国の現状」 2002. 3

・NO. 12 「PFIの基礎
～これからPFIを検討される方へ～」 2002. 10

・NO. 13 「地域ベンチャーファンド設立の現状と課題
～四国における地域ベンチャーファンド成立に向けて～」 2003. 5

・NO. 15 「四国地域における情報化の現状と課題
～全域的なﾌﾞﾛｰﾄﾞﾊﾞﾝﾄﾞ接続の整備とその活用に向けて～」 2003. 6

・NO. 16 「四国における産業クラスター形成の可能性
～徳島における電気機械・化学ｸﾗｽﾀｰ形成に向けて～」 2003. 11

・NO. 17 「地域の自立的発展のために求められる地域版MBA
（ビジネススクール）の創設」 2003. 12

お問い合わせ先

〒７６０－００５０　高松市亀井町５番地の１　（百十四ビル）
日本政策投資銀行　四国支店　企画調査課
TEL　０８７（８６１）６６７６（代表）
FAX　０８７（８３１）１４８４

〒７９０－０００３　松山市三番町７丁目１番２１号（ジブラルタ生命松山ビル）
日本政策投資銀行　松山事務所
TEL　０８９（９２１）８２１１（代表）
FAX　０８９（９２１）８２２０